
武勇伝～修羅の者たち～

生時(レジェンド)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武勇伝～修羅の者たち～

【Zコード】

Z8762C

【作者名】 レジエンド 生時

【あらすじ】

元いじめられっ子の少年、神威龍一が、天神流という古武術を身につけ、最強の武道家を目指す。また、師匠の瑠奈との恋愛関係！そして、クローケン病という難病と闘う青年。作り話の中に真実を描いた格闘小説！

メッセージ&序章 天神流（前書き）

これは、武勇伝を読みやすくしたモノです。内容はほとんど変わらないです。（少し誤字を直したくらいです）

メッセージ&序章 天神流

作者からのメッセージ

この物語は、ただの格闘小説ではありません。僕自身の自伝でもあります。

それは、僕自身が、クローン病という病気を抱えていて、その病気を知つてもらいたいからです。だけど僕自身、闘病記が書けるような生き方をしていません。

そこで、作り話の中に少しだけ真実を書いてみました。（クローン患者の友達も、その方がいいと言つてくれましたし・・・）

だから、自伝といつても、ほとんどが作り話です。

だが、第九章は、僕の実話です。

また、何故格闘モノなのかというと、武道が好きで、病気をしてからもやつていたのですが、やはり格闘技は病気を抱えながらやるのは難しい・・・だから、格闘モノの物語を書く事にしました。物語の中ではなら、格闘技を続けられるし、それに、この物語を書くため、様々な格闘関係の本（漫画も含む）を読みました。そういう意味では、武道をやり続ける事が出来ました。

けど、この物語を読んだら、僕自身いかに弱くて、愚か者がが分かれます。

でも、この物語でクローン病や、あとイジメの事、そして生きたくても生きられない人もいる・・・だから自殺をしてほしくないと言う事を伝えるができたら、落ちこぼれの僕でも生きていて良かったと思います。

僕自身、本当に弱い人間だから、何度も死にたいと思つたか分かり

ません。

この物語を書く前も、世の中がイヤになりました。
だが、そんな時、一冊の闘病記を読んで、生きることの大切さを思
い出しました。

それに、病院で知りあって、せっかく友達になつたのに亡くなつて
しまつた友たちのためにも、生きなければいけないと思いました。
そして、病気は治らなくても、新たに生まれ変わって、今までとは
違う生き方をしていきたいと思います。

序章 天神流

忍術 日本の古武術の一つで、その歴史は古く、その術は修驗道
の山伏によつて、より高度なものに高められていつた。彼らの呼び
名は一般的には忍者、忍び、忍術使いとよばれているが、昔は乱破、
透破、密偵、間諜間者、諜者、三つ物、隠密などと呼ばれていた。
また、聖徳太子は情報活動する者達を志能便と名づけた。

忍びが主に活躍したのは、戦国～江戸時代だ。
また、あの魔王と呼ばれた天下人、織田 信長が、一五八一年（天
正9年）大軍を率いて伊賀に攻め込んだ。

「天正伊賀の乱」である。

多くの伊賀者は惨殺された・・・

その生き残りで、後に天神斎と名乗る忍びが編み出したのが天神流である。

そして、この平成の世にもこの技を使う男がいた。彼は強くなるために修羅と名乗り喧嘩に明け暮れていた。そして月日が流れた・・・

第一章 喧嘩屋修羅参上

第一章 喧嘩屋修羅参上

「また遅刻だ！」

そう叫びながら学校に向かう少年がいた。

彼の名は神威 龍一である。

女の子のような顔・・・体つきも華奢で、まさに、かわいらしい女の子といった感じだ。

彼の父は伝説の格闘王と呼ばれるほどの格闘家であったが、彼が生まれたと同時に謎の引退をしてしまった。

龍一は私立桜木高校に通う一年生である。

彼がぎりぎり学校に着くと、後ろから絞め技をしてこよなくしてきた少年がいた。

彼の名前は嘉納 四郎・・・髪を茶色に染め、柔道の経験がある少しヤンチャな少年だ。

「また龍ちゃんいじめてる。もうすぐ先生が来るよ」

そう言つてきたのは、新戦会空手の館長後藤 勇の娘、後藤 舞である。

その隣には、彼女の幼なじみでもあり、同門でもある沖田 一といふ少年がいた。

二人共空手初段の腕前だ。

「やつと授業が終わったーさて帰るか・・・と、四郎が言つた。

四人で帰宅途中同じ高校に通う男子生徒が一人、三人のヤンキーに絡まれていた。

「あんた達なにしてんのよ」「舞がヤンキー達にそう怒鳴った！」

「んだ～てめえら～は！？」

ヤンキーの一人が言った。

「おまえら桜高のもんだろう！？」

そう言うと男子生徒の顔を殴つた！

ついに舞は切れ、彼女のハイキックが炸裂した！

「俺達に喧嘩を売るつてのか？俺達のバックには修羅さんがいるんだぜ！」

四郎はやばいと思った・・・と龍一も舞を止めに入った。

「明日から桜校狩りだ！」

そう言って三人は去つていった・・・

四郎がおびえながら、

「ど、どうする相手は修羅だぜ！あいつらマジだぜ！？」

男子生徒二人も怯えていた。

「なにビビッてるのよ。あんた達男でしょう。修羅だかなんだか知らないけど、あんなの口だけよ。だから不良つて嫌いなのよ」舞は強気でいた。

「お前は、修羅の強さと恐ろしさを知らないんだ。あの男と互角にやれるのは大河^{たかが}虎次郎^{じゅじろう}くらい」

四郎はまだ怯えていた。

そして次の日の下校時間、帰宅途中四人の前に昨日のヤンキー達が現れた！「こいつらですよ。修羅さん」

その男はガタイもよく、いかにも強そうな男だ。他にも強そうなヤンキーが五人、合計九人だ！

「他の生徒は関係ないわ。相手は私一人よ」さすがの舞も少し怯えた表情であつた。

「舞ちやん僕も相手をするよ」

一も震えながら構えた。

四郎も覚悟を決め戦う気だ。

その時、龍一が笑顔で、

「すいません。お願いですから僕の友達に手を出さないで下せ……」と頭まで下げた。

「駄目だ！ 昨日言ったよな。今日から桜校狩りが始まると……」

「まあ、待て」

「修羅さん……？」

「そここの女が俺の女になるなら考へてもいいぜ……？」

舞は迷つたが

「……そ、それで、皆がたすかるなら……いいわ……」

「駄目だよ。舞ちやん、舞ちやんには一君がいるじゃない」
実は舞と一は付き合つていたのだ。

「えじや～やるか～？ 修羅の強さを見せてやる」

すると龍一が、

「あなたが修羅の名を使おうがかまわない。だが友達に手を出す事
は許さん！」

龍一の表情が変わった……

修羅は龍一に向かつて、

「上等だ！ てめえからやつてやる……」

すると

「……てめえら～、本物の修羅の強さと恐ろしさ、忘れた分けじ
やあるまいな！？」

「龍ちやん！？」

「お、お～あの田あの口調……あ～つ本物の修羅じゃねえか！？
直樹さん、だから修羅の名を、使うのはやめたほうがいいと言つた
じゃないですか！？」

そう・・龍一こそが本物の修羅であった。

「どうする？やるか？」

「と、とんでもありません」

その時、後ろから一人の男の声が・・・

「やつと見付けたぜ！龍一」

その男こそ大河 虎次郎であつた。

黒髪を逆立て、鋭い目、手には木刀を・・・

「虎次郎、久しぶりだな。」

「あ、あ、あいつが・・・た、た、大河・・・こ、こ、虎次郎・・・」

・

四郎はかなり震えていた。

だが、彼が震えるのも無理はない・・・目の前には、修羅と虎次郎・二人の化け物がいるのだから・・・

「今日こそケリを着けてやるぜ！龍一！」

「上等だ！」

「あれが龍ちゃん！？あのやさしくておとなしい・・・まるで別人」

最初に攻撃をしかけたのは、虎次郎だ！龍一の顔面にパンチが・・・

だが龍一は虎次郎の頭上より高く飛び、一回転してかかと落とし・・・

・天誅と呼ばれる技だ。だが虎次郎もかわした！

「さすがだなあ。虎次郎・天誅をかわすとわな」

龍一はすかさず、後方宙返りと同時に顎に蹴りを放つが、これも虎次郎はかわす。だが龍一は体をひねらせ、こめかみに再び蹴りを放つさすがに虎次郎もかわせなかつた。

「天神流忍術双龍！」

今度は虎次郎が木刀で攻撃・・・龍一の頭に虎次郎の一撃が決ました！

舞達は、二人のタイマンを止めたがどうする事もできなかつた。

「龍一君、さすが格闘王の息子だ。でも戦い方が、格闘王とはまるで違う！？舞ちゃんもビデオ見たから分かるでしょう！？」

「そうねえ。一ちゃん、格闘王が編み出した神威流とは全然違う

神威流とは格闘王が編み出した総合武術である。

少しずつ虎次郎が押し始めた。

「龍ちゃん、もうやめて～」

だが舞の声は龍一にはすでに聞こえない・・・

「どうした龍一、高校に入つてふ抜けたか！？お前の強さはこんなもんじやないはずだ！」

「勝負はこれからだ！」

龍一は虎次郎のパンチを受け、関節を決め、投げた後、虎次郎の喉に肘鉄、だが虎次郎は紙一重でかわした。

「虎次郎、化け物だな！？天神流忍術雷鳴をもかわすとはよ。」

「どうすれば、龍ちゃん達を止められるのよー？」

龍一が何かを投げた。それは手裏剣の一種、飛苦無である。

一般的に手裏剣は忍者の武器と思われがちだが、手裏剣術も古武術の一つである。

また、この苦無は、元々職人の道具で、所持していても怪しまれないので、江戸時代の頃は、この飛苦無がよく使われていた。投げ方も、直打法と反転打法がある。直打法は、手裏剣を手中に持つ時、剣先を指先の方に向けておき、剣先を的に向けて進行させる打法である。反転打法は、手裏剣を手中に持つた時、剣先を手首の方向に向けて、手との空間で、剣を半回転させて、剣が的に達した時、剣先が的に命中するように打つ打法である。

虎次郎は飛苦無を、木刀で受けとめた！

「あいつらマジで殺し合つ氣か！？」

すると舞達の後ろから女性の声が・・・

「まったく、高校に入つて少しほは真面目になつたと思つていたのに・・・」

後ろを振り返ると、ものすごい美人がいた。

長い髪を茶色に染めている謎の女性・・・

舞が女性に話かけた。

「あの龍一君の事知つていいんですか！？」

「知つていいわよ。何しろ私があいつに天神流を教えたんだから・・・」

・

彼女の名は月形 瑠奈（26）天神流十七代目！普段は喫茶店を経営しているが、裏の世界ではアルテミスと呼ばれるプロのスイーパーだ！

「お願いです。一人を止めて下さい！」

舞は泣きながら瑠奈にお願いした。

「最近あいつは明るくなつた・・・出会つた頃はいじめられっ子で中学の時は喧嘩ばかりしてたあいつが・・・こんな素敵な友達がいたからなんだねえ」

そう言うと瑠奈は龍一の所に歩き始めた・・・

「そろそろ終わりにしようぜえ！虎次郎・・・臨、兵、鬪、者、皆、

陣、列、在、前、天神流奥義龍神！」

「リュウ！実戦でまだ奥義は使うなと言つたはずだ！それに大切な友達を泣かすな！」

「ルナさん・・・！す、すいません」

「チツ、またあの女か・・・龍一、必ずいつかケリは着けるからな。女その後はお前だ！」虎次郎はそう言つて去つていった。

「私に、ちょつかい出して、タダですむと思つてているのかしら・・・帰るよ。リュウ」

「はい、ルナさん」

そして、二人は帰つていった・・・

「昨日はすごかつたな龍一、まさかお前が修羅だつたなんてよ。今までの事、怒つていい？」

四郎は必死でいじめた事を謝つていた。

「気にしてないよ。それに僕の方こそ、みんなに、黙つてごめん。皆が良くしてくれたから言い出せなくつて僕小四のときまで本当に

いじめられていたんだ。伝説の格闘王の子供のくせに弱いからって、中学生までまじって毎日殴られたり蹴られたり、その時に助けてもらつたのがルナさんなんだ。そして泣きながらお願いして弟子にしでもらつたんだ。修行は厳しかつたがルナさんがいたから……」

龍一の顔が赤くなつていていた……

「龍ちゃん瑠奈さんの事好きなんでしょ！？」

舞が龍一に問いかけた。

「やっぱ分かつた？」

龍一は照れながら答えた。

「でもあんな美人なんだから彼氏いるだろ？？」

四郎がそう言つた。

「今はいないらしい……でもルナさんの心の中にはある人が……あつ、そうそう話は もどるけど喧嘩屋やつていたのは強くなるためには実戦が必要だと思つたから、でも町の悪餓鬼の中では強くても格闘家としは全然……武道家じゃないけど、これじゃルナさんにいつまでたつても、追いつけない。父さんにもね……父さん表じや不敗だけ引退前にある人と戦つて負けてるんだ……」

「うそ！あの伝説の格闘王が！？」

三人同時に同じ事を言つた。

「会つた事ないけど父さんを倒したその人の名は天神流十六代目月形 良昭大先生。瑠奈さんのお父さんだよ！おそらく父さんは負けたから引退したんだと思う」

「会つた事ないって、瑠奈さんのお父さん今、何してるの？」
と舞が聞いてきた。

「……今はもういない……殺されたんだ……天神流の十七代目後継者になるはずだつた人で瑠奈さんの恋人だつた武田 武さんも戦死した！相手は瑠奈さんや武さんとは兄弟弟子の水谷 凍矢……瑠奈さんの話では凍矢は重症を負つたが生きてるらしい……」
しばらくの間沈黙が続いた……

そして、

「そろそろ帰るつづけ」

四郎は席を立つて帰る準備をした・・・

その頃違う場所で一人の少年が五人のヤンキー達に囲まれていた。

「てめえ～この前はよくもやつてくれたな」

少年は顔色を一つも変える事無く

「悪いけどこの中に僕を本気にさせてくれる人はいなかつた・・・僕はいそがしいんだ。それじゃ

そう言つて、去ろうとした・・・

「待て、『ラーハ』

「しようがないな～」

わずか数分でヤンキー達は血まみれになつていた。

彼の名は小林 秀一、名門聖蘭学園一年生。頭も良くルックスも良く、また少林寺拳法の達人で、文武両道の少年だ！

少林寺拳法・・・少林寺で達磨大師が授けたという心身鍛錬の法を起源とする拳法。

日本では宗道臣の創始した少林寺拳法が行われている。

また少林寺は、唐手やムエタイ、それにテコンドーなどの全身となつていて。

龍一達が帰宅途中、向こうから美少女が歩いて來た。

「舞じやない？それに一君も・・・久しぶりねえ。」

「恵！？・・・ホント久しぶりねえ。」

彼女は舞と一の幼馴染で、聖蘭学園に通う相川 恵であった。

「相変わらず舞と一君仲がいいね。」

「恵は彼氏いないの？」

「・・・好きな先輩はいる。でも頭もいいし、かつこいいから私なんか相手にされないと思つての

13

「何言つてゐるの、恵も頭はいいし、すぐかわいいから、ついや
ましよ。」

舞は彼女を励ました。

しばらくすると、向かうから秀一がやつて來た。

恵の顔が赤くなつた・・・どうやら彼女の好きな人は秀一みたいだ。

「恵もしかして彼が・・・」

「・・・うん」

「話しかけたら」

恵は秀一に話かけようと彼に近づいた。

「僕になんか用かい？悪いけどいそがしいんだ。」

「ちよつと、あんた！」

舞が怒鳴つた！

「おや、君がわいいね。名はなんて言うの？」

どうやら秀一は恵より舞の方を気に入つたみたいだ。

「ふざけないで！」

舞がまた怒鳴つた！

やばいと思い、龍一が止めに入つた。

その時、秀一が龍一に回し蹴りを・・・龍一は紙一重でかわした・・

・

「なにをするんですか？」

と龍一が言つた。

「見付けたぜ！あの恐怖はわすれてないから・・・」

秀一が龍一にそう言つた。

「僕はあなたと会うのは初めてですよ！？」

「一年くらい前かな・・・金髪の少年が五人いやもつといったかな
！？」一瞬で五人以上の不良達を倒したのは・・あの時初めて恐怖と言つものを感じた・・今でもその恐怖が頭から放れない・・その恐怖を忘れるためにはその男を倒すしかないとつた・・・髪を黒くしても僕には分かる君があの時の金髪の少年喧嘩屋修羅だろ！？私

怨はないが僕は君を倒す！」

「先輩やめて下さい！」

恵は必死で止めようと説得した！

舞達も止めようと説得した。

もし龍一がこの前みみたいになつたら止める事が出来るのは瑠奈だけ・

しかし瑠奈の経営している喫茶店の場所が分からぬ・・・

「でも君には感謝している。君を倒したい思いで修行に励んだ。君に会うまでも僕は天狗になつていた・・・僕の名は小林 秀一！君の本当の名を聞いておこう・・・」

「僕の名前は神威 龍一」

「神威？もしかしたらあの格闘王の？」

「格闘王は僕の父です。」

「どおりで強いはずだ。」

「父さんは父さん！僕は僕だよ！」

秀一は構えた。

「その構え少林寺拳法か！？でもあなたと喧嘩する気はないんです。」

と龍一は言つたが・・・

「君も武道に心得があるんだろう！？ならこれは武道家としての異種格闘技戦だよ」

そう言つと秀一はジャンプして、また回し蹴りを・・龍一もまたかわすが、止まらない龍一の顎をかすめた・・・

「旋風脚かい。」

龍一の表情が変わつた・・・

龍一は高く飛び、一回転・・この技は、天神流天誅！

秀一の頭に龍一のかかと落としが・・・

「これだよ・・戦いとはこうでなくては・・・」

秀一はニヤリと笑つた。

「柔術！？いや違うか・・・」

「天神流忍術だ！」

そう言うと飛苦無を投げた。

秀一は避けたが、その方向に龍一の回し蹴りが炸裂！

だが今度は、秀一の正拳突きが、龍一の顔面に炸裂！

だが後方中返りをして、顎に蹴りをさらに体をひねらせこめかみに蹴りを・・

「天神流双龍！」

さすがの秀一もかなり効いたようだ。

「あんたも化け物だな！？双龍をまともに喰らつて立ち上がるか。

もうこうなつたら、瑠奈以外止められない。

秀一がまた正拳突きを・・・だが龍一はかわして、なんと秀一の頭の上で、片手で逆立ちした！

「あいつら雑技団か！？」

と、四郎が言った。

そして龍一は秀一の髪をつかみそのまま膝で秀一の顔面に攻撃・・・だが秀一は両腕でガードをした！一人は後方宙返りをして、距離を置いた。

その頃、さつき秀一にやられたヤンキー達が、龍一達の近くまで来ていた。

「あ、あの野郎じやねえかあ！？しかも相手は修羅だ！いや、待てよ。ここでしばらく様子を見て、やつらがくたばりかかったところを、俺達がどめをさす。そうすれば俺達は修羅まで倒して有名人だ！」

ものすごい攻防戦が繰り広げられていた。

秀一も、さすが少林寺拳法の使い手だけある。一人の実力は互角・・

これで、同年代で龍一をここまで追い詰められるのは、虎次郎と秀一となつた。

一人はすでに血だらけとなつてゐる。

その時！

「今だー！一人をやれー」

隠れていたヤンキー達が襲いかかってきた！

「センパーアイ」

秀一はすでに動けない・・秀一の頭に木刀が・・・

バキッ！

鈍い音が響き、血が・・・

なんと恵が秀一の身代わりになつたのだ。

「なんで僕をかばつたんだ！？」

「先輩の事が・・ハアハア・・好きだからです・・・」

龍一が完全に切れた！

「てめえら〜、そんなに死にたいのか！？」

龍一は五人のヤンキー達を血祭りにした。

恵は、救急車で病院に運ばれた・・恵の怪我は、運良くそれほどたいした事がなかつた。

「惚れたのは僕の方かも・・・
と、秀一がつぶやいた・・・
舞や龍一達は喜んだ。

寝たふりをしていた恵は涙が止まらなかつた・・・

第2章 摩利支天

第一章 摩利支天

龍一と秀一のタイマンから一週間が経った。いつも四人は瑠奈の喫茶店「LUNA」にやつて來た。

龍一以外の三人は初めてだつた。

「すごくオシャレな店ですね～」

舞はすごくはしゃいでいた。

「ありがとうございます。いつでも来てね。」

「しかし秀一さんと、恵ちゃんこれで決まりだね！？」

と一が言つと、四郎が龍一に

「いつ会くるんだ？」

と、からかつてきた。

「なんだ、リュウ好きな人がいるのか？」

瑠奈に言われると、龍一は心の中で、ルナさんが好きです～いや愛しています！とつ 言いたいと思つた・・・

「リュウ、お前は、顔は悪くないし運動神経もいい・・・だがその秀一って子と違つて頭の方が・・・舞ちゃんこいつにいい子紹介してあげてよ。」

「は、はあ～でも皆彼氏がいるみたいなんです・・・」

舞は龍一と瑠奈がうまくいけばいいのにと思つた。

「じゃあさよなまでした。」

舞達は店を出た・・・

次の日、龍一は遅刻をしたため、トイレ掃除をさせられていた。

四郎は舞と一緒に

「先に帰ろうぜ。」

と言つた。

三人は龍一を置いて先に帰ることにした。

帰宅途中、秀一と恵に会つた。

「恵、怪我の方はだいぶ良くなつたみたいね。」

「うん、もう大丈夫よ。」

その時、五人のゾッキー達が現れた！

彼らは摩利支天と言う暴走族のメンバーだ！

「昨日はこいつらが世話になつたみたいだな！？」

ゾッキーの中の一人が言つた。

彼は摩利支天の七代目高橋 雅史（18）だ！

「秀一さん、また喧嘩したんですか？」

と、一が聞いた。

「昨日恵に、ちよつかいをだしてたんでね・・・でもあそこまでボコボコにしてないけどね！？」

「小僧おれは、パンピーでも容赦しねえぜえ！？」

秀一は構えた・・・そして一人のタイマンが始まつた・・・ものすごい激戦だ！

秀一は後方宙返りをし、距離を置いた。だが秀一が膝を付いた・・・マサシの攻撃は止まらない・・・

「やばいぞ！」

四郎は、震えながら言つた。

舞が止めようとした。だが、マサシが舞を突き飛ばした。

「族をなめんなよ！コラー！」

そして、マサシが秀一にどごめをさしだす・・・

するととつさに舞は

「私達には龍一君がいる・・・と叫んだ！」

ゾッキーの一人が

「龍一・・・誰それ？」

と言った。

「てめえらはだまつとれ！おー龍一がいるだと・・・上等だよ・・・てめえら・・・」

「龍一君は強いはよ・・・」

「ああ～強い・・・ちょっと今まで俺もヤツが怖かった・・・」

するとマサシは、ナイフを出し向の躊躇もなく秀一の太ももを刺した！

「ぐわ～・・・」

秀一が叫んだ！

「やつに伝える！明日の土曜集会で待つと・・・

そしてマサシ達は去つていった・・・

秀一は病院に運ばれた。龍一も舞から連絡を受け駆けつけた！

「舞ちゃん、秀一さんをやつたのは本当にマサシなんだね！？」

すると舞は、

「ごめんなさい。龍ちゃん私を殴つて・・・私、龍ちゃんの名前を勝手に・・・だから殴つて！」

「何言つてんだよ。そんな事出来る分けないじやん・・・それにそんなこと関係ない」

「そうだ瑠奈さんにたのめば・・・

と、四郎が言つた。

「ルナさんは関係ない・・・これは修羅と摩利支天の戦いだ・・・」

龍一は家に帰つていった・・・

「おかげり、龍一」

「ただいま、母さん・・・」

「ただいま、母さん・・・」

「兄ちゃんお帰り！ねえゲームして遊ぼうよ」

龍一には七つ下の弟がいた。

「『』めんな、龍之介・・・今日はそんな気分じゃないんだ・・・」

龍一は部屋にもどると、しまってあつた特攻服を取り出した。

「まさか、またこいつを着るとは思わなかつた・・・」

次の日の中、龍一は再び金髪に染め「修羅 参上」の文字が入った特攻服を着て、木刀を持って、家を出た・・・途中、龍一の前に一人の男が現れた！彼の名は西村 和也（20） 摩利支天の六代目の頭をはつていた男だ。

「龍一、本当に行くつもりか？」

龍一はタバコをくわえ火をつけた。

「カズヤさん止めても無駄ですよ！？」

「止めはしない・・・もうチームも俺には関係ないし・・・ただ、マサシは強くなつた・・・あいつに、七代目を譲つたのはあいつに俺は負けたんだよ・・・それに今、特隊をしてるのはトオルだ！」特攻隊長をしている岡村 徹（18）は龍一の二つ上で、龍一が、中学時代の時の親友だった男でボクシングの経験もある強者だ！

「関係ないつスよ・・・今の俺は、カズヤさんが頭をはつていたチームを潰そうとしている男です・・・トオルだろうと誰であろうと邪魔するヤツはぶつ殺す！」

そして戦場へと向かつていった・・・

その頃、舞達は瑠奈の所に向かつっていた・・・

「瑠奈さん大変です！龍ちゃんが・・・」

舞達は必死で瑠奈に事情をはなした・・・

「そう・・・秀一君の仇を討ちに・・・あいつを修羅にしてしまつたのは私のせい・・・私はあいつの両親に悪い事をしたと思つてい

る。格闘王が引退したのは、私の父に負けたからじゃない……本当は自分の妻、つまりリュウの母の事を思つて、引退したのよ。自分が試合で傷ついた姿を、これ以上見せたくない……だから引退し、技を封印し、リュウに武術を教えなかつた……だが私は、あいつに技を教えた。あいつの父、格闘王を倒した天神流を……最初は、あいつがいじめられていたから、護身術のつもりで教えた……どうせ、すぐに逃げ出すと思つたし、だがあれからもう6年がたつた……よく耐えたよ、あいつは……あいつの気持ちは分かつている、けど私は裏の世界で生きる女……あいつには、もつといい女性が現れるさ……さて行つてくるね……

「私達も付いていきます！龍ちゃんは大切な友達なんですよ……」「（リュウ、いい友達をもつたね……）」

と、瑠奈は心の中で喜んだ……

すでに、修羅対摩利支天の戦いは始まつていた！

「今宵の月は、我を狂わせる……」

龍一はそうつぶやいた……すでに十人以上倒したが、相手は五十人以上いる。

「下がれ！おまえらでは無理だ！」

「ト、トオルさん……」

ついに龍一とトオルのタイマンが始まつた……

「トオル何でこんな腐つたチームにまだ入やがる！？」

「お前とまさかやる事になるとはなあ……お前にとつて腐つたチームでも、俺にとつては大切なチームなんだ……だから特隊としておまえを倒す！」

トオルのストレートパンチが炸裂！

龍一はふつ飛んだ……更に、トオルの攻撃が続く……一瞬のスキを見て龍一がロー・キックからハイキック……今度はトオルがふつ飛んだ！更にトオルの頭に龍一の木刀が……だがトオルはかわした……龍一は木刀を投げ捨てた。

「お前とは、素手で戦いたいからな～」

すさまじい戦いが続いた・・・再びトオルのストレートパンチが・・・
・龍一はかわし、関節を決め投げた・・そして、トオルの喉に肘鉄・
・・これは天神流雷鳴・・だが、龍一はわざと外した・・・
「龍一・・・俺の負けだ・・・」

ついに龍一が勝った。

「マサシ！俺とタイマンだ！」
「てめえら、修羅を殺せ！」

龍一は、再び木刀を持った！

「邪魔だー！」

次々と摩利支天のメンバーが倒れていく・・・

「（な、何だ！？早すぎて何が起きているのか分からん・・・）

龍一の動きは、まさに電光石火・・・

「マ、マサシさん！」

「情けね～ヤツらだ・・・龍一あんまりいきがるなよ！？」

「マサシ、てめえ～いつから俺にタメ口利けるようになつた！？」
「てめえの方こそ年下のくせに調子にのるなよ！？」

龍一が、木刀でマサシの頭を・・・だがマサシのナイフが龍一の腹に・・・龍一は素早く避けた！マサシのナイフ攻撃が続く・・・だが龍一は全て避け、木刀でマサシの手に攻撃・・・マサシはナイフを落とした。龍一も木刀を投げた・・・

その時ようやく瑠奈達が現れた。そして・・・

「臨、兵、闘、者、階、陣、列、在、前、天神流奥義龍神！」
ついに龍一は実戦で奥義を使つた。

龍神は水神・・・降りしきる大雨を、避けるのは不可能・・まさに奥義龍神は、降りしきる大雨・・・常識を超えるスピードで相手の急所を確実に攻撃する。あまりの速さで数秒の間、相手を宙に浮かし動きを封じる・・・これが龍神である。

「ぐは～」

マサシは吹っ飛び、そのまま立ち上がる事が出来なくなつた・・・

「秀一さんのおもを刺したよな～！？」

「秀一さんのおもを刺したよな～！？」
そう言つと、マサシのナイフを拾つて、そして、マサシの胸めがけて・

・・だが、その時、瑠奈の投げた石がナイフに直撃・・・
「運が良かつたな、今の俺を止めれる人がいて・・・」

瑠奈は、龍一の方に向かつていた・・・そして・・・

「お前は、ついに私との約束を破つて奥義を使つた・・・お前は
今日から破門だ」

そう言つと、瑠奈は去つていった・・・

誰もがあまりの事で言葉を失つた・・・もちろん瑠奈は、龍一の事を
思いしたことである。これで自分の事を忘れ、すばらしい女性に
出会い、幸せになつてくれると思つたからだ・・・

摩利支天との戦いから一週間が経つた。龍一は天神流を破門され
たことで、ただ今を生きる事しか頭になかつた・・・最強の格闘家
になる夢を忘れて・・・龍一が、公園を散歩していたら、真面目そ
うな高校生カップルを見付けた。

自分には、ああいう青春が今までなかつたな～と思いながら、歩き
始めた。

すると、カップルの前に一人組みのヤンキーが現れた。

「ねえねえ、お姉ちゃんそんなヤツより俺達と遊ぼうぜ～

彼氏は震えながら彼女を守るうとしていた。

「俺達、君には用はないんだよ。」

その時、龍一が現れた。

「嫌がつてゐるぢやないですか。」

「何だ、お前・・・殴られたいのか？」

「僕を殴つて、気が済むのでしたら、いくらでも殴つて下さい。」

ヤンキー達は龍一をボコリ始めた・・・するとその時、四郎と一緒に

現れた。四郎が、ヤンキーの一人に背負い投げ・・・と同時に一が、もう一人にハイキック・・・

「二人共ありがとう・・・そついえば舞ちゃんは？」

龍一が聞いた。

「舞ちゃんは、今日は用事があるみたいで・・・僕達これから秀一さんのお見舞いに行くんだけど、龍一君も行かない？」

と一が聞いてきた。龍一も行くことにした。

その頃舞は、瑠奈の店にいた。彼女は何とか瑠奈と龍一のよりをもどそうと、考えていた。

「瑠奈さん、お願いです。龍ちゃんを許してあげて下さい」舞は瑠奈にお願いした。

「別に私は、あいつが奥義を使つたから破門したわけじゃないのよ。前にも言ったように私があいつを修羅にしてしまつた・・・私があいつの前から消えれば、私の事を忘れ、そして幸せになつてくれる・・・そう思つたからよ。」

「確かに龍ちゃんは最近変わつた・・・今まで、遅刻はするは、授業中はほとんど居眠りしてました・・・だけど最近は誰よりも早く来て授業も眞面目に受けている・・・でも、なんか、今をただ、生きているつて感じがするんです。」

「そう・・・でもそれでいいのよ・・・あいつには、私みたいな汚れた人間になつてほしくないの・・・天神流は、しょせん人殺しの技・・・あいつがまだ、強くなりたいと言うならば、新戦会に入門させてあげてよ・・・」

その頃、龍一達は秀一の見舞いに来ていた。一以外の三人はタバコを吸うので四人は喫煙室にいた。といつても、彼らは未成年・・・当たり前の事だが、未成年の喫煙は、法律で認められていない。

「龍一君タバコ吸わないのかい？一君達からいろいろ聞いたよ・・・

・本当に格闘技を辞めるのかい？・・・そうだ龍一君、ジャッキー・

リーの映画が好きなんだよね！？燃えよ醉拳のDVDがあるんだけど、観る？」

と、秀一が聞いた。

「・・・もう僕は、強くなりたいと思わないんだ・・・」

「龍一君、君がお父さんや瑠奈さんを超えたないと同じように僕や舞ちゃん、四郎君や秀一さん・・・そして虎次郎も皆、龍一君を目標にしているんだよ。」

と、一が答えた。

「僕は昔から変わらない・・・弱虫君なんだよ・・・」

するとその時、一人の男が声をかけてきた。

「君達も格闘技をやっているのかい？」

その男の名は野村 昇児（27）でクローン病といつ難病を抱えている不良患者だ。

クローン病は消化器の病気で、主に小腸や大腸に潰瘍ができたりし、狭窄つまり、腸が細くなったり、ろう孔と言つて腸に穴が開いたりする。

彼は十八の時にクローン病と診断され、数え切れぬほどの入退院を繰り返し、オペも三回している。今の医学では完治はしないが、主な治療は点滴による絶食や薬物治療、そして外科的治療である。

「俺もガキの頃、少し少林寺拳法を学んでいた事があるし、病気してからも実戦空手を学んだ・・・けど病人は病人、強くなるどころか弱くなっちまつた・・・だから、現実で、格闘をするのはやめて、今は格闘モノの小説を書いて、物語の中で格闘を続ける事にしたのだ・・・俺は君がうらやましいよ・・若いし、なによりも健康だ・・・実にもつたいないよ。」

「僕は、やはり強くなりたい・・・そしてルナさんを超えたい・・・」

「・・・

その日の夜、瑠奈の店が終わる頃に、龍一が現れた。

「何しにきた？」

「破門されて、ここに来れる身分じゃありませんが、僕は一つ、言い忘れた事があります。それは、ルナさんの事が・・・ずっと前から、あの・・その・・す、好きです！」

「・・・くだらない事言つてないで帰りな。」

「ハジメ君達から聞きました。破門された本当の理由・・そして、ルナさんが真剣に僕の事を考えていたという事・・俺は必ず、ルナさんに認められる男になつてみせます！」

瑠奈の心が一瞬ときめいた・・そして、龍一は帰つていった。

第3章 プレシャス

第三章 プレシャス

次の日、龍一達が帰宅しようとした時、龍一達の学校に一人の女性が現れた。

「み、南・・・」

「ハアハア、ひ、久しぶりだな、龍一・・・」

「龍一の知り合いか？ それにしても、この女ラリってんじや・・・ ジャンキーか？」

と、四郎が聞いてきた。

彼女の名は杉原 南（18）で杉原グループの会長の娘でもあり、そして、トオルの彼女でもある。

「なぜ、そんなモノに手を出した！」

「ア、アンタには、関係ないだろ？ ・・・」

と言い去つていった。

「（もしかしたら、まだ北斗さん達は音楽をやっているかも・・・）

」

その夜、龍一達4人はビートと言うライブハウスにやつて來た。そのステージには、プレシャスというバンドが演奏をしていた。プレシャス・・それは、高価な物、貴重な物を意味する・・・

演奏が終わると、龍一達は外に出た。すると・・・

「久しぶりだな、龍一。」

その男は、プレシャスのヴォーカルとギターを担当している、杉原北斗（26）である。彼は、南の兄であり、なんと瑠奈や凍矢、

武とは幼馴染であり、摩利支天の二代目でもある。

他に一見美女と思わせるような美青年、ギターのラン（26）彼も

瑠奈達とは幼馴染で元摩利支天の特隊だ。

またベースのジュンジ（26）と右腕に龍の刺青をしているドラムのユウヤ（26）は百鬼という族のメンバーだった。

百鬼はあの凍矢が作ったチームである。その時、瑠奈は、苦乃一というチームを結成。摩利支天と百鬼は仲が悪く、また摩利支天と苦乃一対百鬼の戦争が起きた時その戦いを止めたのが、武である。

その後、北斗がジュンジとユウヤを誘つてフレシャスが結成されたのである。

「あいつが、薬に手をだしたのは、去年お袋が亡くなつてからだ。今あいつには、何を言つても無駄だ・・自分の意思で止めようとしない限り・・・」

「そうですか・・でも久しぶりにフレシャスの音楽が聴けて良かつたです。それじゃ僕達はこれで・・・」

「俺達も、これから打ち上げがあるんで、またな・・・」

次の日の夜、龍一は舞と一緒に連れられて、新戦会を見学する事にした。

「押忍！館長、彼が神威 龍一君です。」

と、舞が父でもあり、そして、新戦会の館長である後藤 勇（46）に紹介した。

「君があの格闘王の・・・舞や一からいろいろと聞いていいよ。」

「よろしくお願ひします！」

龍一は心の中で、鬼がたくさんいるなーと思つた。

新戦会は後藤館長以外にも、幹部に四天王と呼ばれる4人がいた。

一人目は土方 歳夫師範（33）

二人目は永倉 新一指導員（29）

三人目は原田 光介指導員（26）彼も瑠奈の幼馴染で元摩利支天のメンバーだった男だ。

そして、四人目は沖田一（16）である。

また、女子でありながら、一般の部で稽古をしている、後藤 舞（16）など他にも強者そろいだ。

静かに見学している龍一に、館長が声を掛けってきた。

「あそこにあるサンドバックを、蹴ってみないないかい？」

そのサンドバックは他のよりも大きく150キロはある。

龍一は構えた、そして・・・バシッという音が道場になり響きサンドバックはものすごい勢いで動いた！

「（恐ろしい小僧だな・・・）」

さすがの後藤館長も驚きを隠せない様子だった。

練習が終わっても門下生の気合いは收まらない感じだった・・・そして、原田が龍一に話しかけてきた。

「君、月形 瑠奈の弟子なんだって！？」

「はい、そうです。ルナさんの事知っているんですか？」

「ああ、幼馴染だよ。」

「原田先輩と瑠奈さんが幼馴染ですって・・・？」

と、舞と一は驚いた。

「しかし、あの女の弟子で格闘王の息子じゃあ強いはずだ。しかも、あの恐ろしい女の事が好きらしいねえ」・・・しかし瑠奈が相手だと難しいなあ・・・あいつの強さは、生まれて物心がついた頃から、天神流を父親から学んでいた・・・だが、瑠奈が小さい時に母親を事故で亡くし、十七の時に父親と恋人の武を殺され、それから、裏の世界を一人で生きてきたからだ。

「ルナさんは、武さん以外の人と付き合っていないんですか？」

と龍一が聞いた。

「もう俺も8年くらい会つてないからな」たぶん、いないと思うよ・・・あいつに下手に、ちょっとかいを出そうとして、病院送りになつたヤツはたくさんいたけど・・・だが、君は瑠奈にマジらしいか

らね～・・だから、あいつも君の事を思つて破門したんだろ！？」

「そ、そうですが・・・僕はルナさんをあきらめたくないんです。

「

「ああ、そうだ、確か北斗と瑠奈が一ヶ月くらいだけ付き合つていたつけ・・・」

「ルナさんと北斗さんが・・・？」

「ああ・・・でも何ですぐに分かれたのか、北斗に聞いたら、あいつの心には今でも武が生きている・・と言つてたな～」

龍一は会つた事のない武田 武という人がうらやましく思えた・・・

次の日、南は公園を散歩していた。すると、子供がボールを取ろうと道路上に飛び出した！だがその時、車が・・・南は子供を助けるため、自分も道路上に飛び出した！そして・・・道路には、たくさんの血が・・・すぐに救急車に運ばれた。子供の方はたいした怪我はなかつたが、南は・・・夕方、龍一達が帰るのとしたところ龍一の携帯が鳴つた。北斗からだ！

慌てて四人は、秀一が入院している病院に急いだ！

そして、四人が見たのは、二度と動く事も笑つ事も出来ぬ彼女の姿であった・・・彼女は感じる事すらできぬ場所へ旅立つて行つたのだ・・すでに、瑠奈やトオルは来ていた。そして、北斗と瑠奈、トオル、龍一以外のメンバーは秀一の所に移動した。すると、杉原グループの会長と秘書が現れた。

「親父～何しにきやがつた！？てめえは、家族よりも会社の方が大事なんだろう！？」

すると杉原会長が、南に向かつて泣きながら土下座をした。

「ううつ・・すまん南、私はお前や北斗に父親らしいことをしてやれなかつた・・南、だがお前は人のために自分の身を犠牲にしたんだ・・これからは、大好きな母さんと一緒に・・・お前は私にとつて、いつまでも貴重な宝だ・・・」

その姿に北斗は言葉を失つた・・・

その頃秀一達は喫煙所にいた。

そこには、あの昇児もいた・・・

「ここで俺は、いろんな友と知り合い、そして病で何人の友を失つた・・・」

そう言つと、その友のために自ら作った曲「祈り」を歌い始めた・・・

そしてタバコの火を消し部屋にもどつていった・・・

曲と言えるかどうか分からぬが、彼はこの曲を収録した、CD-Rを患者に配つたりした。

だが健康な人からは、二百五十円で売つてゐる。その辺のところは、昇児らしい・・・

音楽の経験は少ないが、彼が、昔バンド時代に使つていた名前は、修羅生死(しゅらじよじ)である。荒んでもいいから、強く生きたい・・・そう思い、つけた名前だ。

だが彼は、肉体だけでなく、精神的にも弱く、馬鹿な連中と馬鹿な事をして、嫌な事から逃げてばかりいた落ちこぼれのクズだ・・・だが、そんな落ちこぼれでも、死の悲しみを知つてゐるからか、自殺をしようとした人に、怒つた・・・というよりも、キレたこともある。

もちろん、彼も何度も死にたいと思つた事があるが、生きたくても生きられなかつた友に申し訳がないし、自殺は人殺しと同じ・・・だからキレたのである・・・

また、少年時代の彼自身も、龍一ほどではないがいじめられていた。中一の時、お金を持って来いといわれた事もあつた。

彼が少林寺拳法を学んでいたのは、小学校のころで、昔から格闘映

画や格闘漫画が好きだったのと、たまたま父と兄が学んでいたからである。

だが、弱いがためにいじめられていた！

しかし、中一になると、家庭の事情とかで、学校には遊びに行くだけになつた。行きたい時に登校し、授業中は寝ているか漫画を読んだりしていた。さらに、授業中に一人ライブをやって、授業を潰したこともあつた・・・

問題児であつたかも知れないが、アニメのキャラに本気で恋をするなど、この頃はまだ、かわいらしい一面もあつた。彼の心が本当に荒んでしまつるのは、この後の専門学校に入学してからだ。

昇児は、中学を卒業すると、料理の専門高校に入学する。

この専門学校は彼のような落ちこぼれの集まりな上、教師は暴力教師で、教師が教師を止めに入つた事もあつた。どうやら、教師が生徒に机を投げたらしい。さすがに、その教師は解雇された。

今の教育では考えられないが、殴る蹴るは当たり前の学校だつた。それに生徒のほとんどが親に見捨てられている。だから親も何も言わないのである。

そんな学校に通つていたため、彼の心は本当に荒んでしまう・・・ついに彼自身も、本気で人を傷つける事が出来る人間になつてしまつた。

昔は彼自身、いじめられていたのに、今度は彼がいじめをしていたのだ。

だが、彼がいじめられた時その連中を憎んだよに、彼にいじめられた人達も彼を憎んでいるはず・・・その罪は一生消えないのかもしない・・・

だから、パン工場に就職してすぐに、クローン病になつてしまつたのであるう・・・

そして、その時に自分の弱さをことんと思い知られ、退院してから弟が習っている空手道場に通う。

だが病気をしてからも、相変わらず馬鹿な事ばかりしていた。

そんな彼だが、二十代前半に、人のために役に立ちたいと思い、自ら病気の勉強会の役員をすると言い出したのだ。

当時の彼にはお金のことしか頭に無かったのに、ボランティアでやつていたのだ。

その後、仕事が忙しかったり、体調が悪かたりで、会には最近出ていないらしい・・・

だが、最近になって、本当に貴重な物は、お金じゃなく、こんな自分と共に病気と闘ってくれる家族なんだと気づき始めたのである。

第4章 瑠奈の過去

第四章 瑠奈の過去

その日の夜、瑠奈は幼き頃から、龍一に出会った頃までの過去を思い出していた・・・

一十年前・・・

「どうした瑠奈、そんな事では強くなれんぞ!」

「はい、お父様・・・」

「まあ、今日はこれくらいにして、帰るわ・・・母さんが、ご飯の支度をして、待つていてる。」

家に帰ると、瑠奈の母が食事の支度をして待っていた。

「お母様、ただいま帰りました。」

瑠奈にとって、この頃にはまだ、家族がいて幸せだった・・・この後に悲劇が起きる事も知らずに・・・

「瑠奈、明日が楽しみね。」

「はい、武も凍矢も楽しみにしているみたいですね。」

「ワシは用事で行けんが、思いつきり楽しんで來い。」

「はい、お父様・・・」

明日は、武田一家と水谷一家と瑠奈と瑠奈の母とでキャンプに行くはずだった・・・

しかし次の日、悲劇は起きた・・・キャンプ場に向かう途中トラックと正面衝突を・・・そして、その事故で生き延びていたのは、瑠奈、武、凍矢の幼き三人だけだった・・・

瑠奈の父良昭は、自分があの時、一緒に行つていれば……そう思い、武と凍矢を弟子にした……

三人は、本当の兄弟みたいに仲が良かつた……後に瑠奈をめぐつて一人が争うなどその時は、知る由もなかつた……

それから四年後……瑠奈達が十歳の時、ある男が現れた。

「月形 良昭殿ですか!? 私の名は、神威 武蔵と申す! 貴殿と試合たいがために、参りました!」

そう、この男こそ龍一の父、伝説の格闘王である……

「おぬしが今、話題の格闘家か……」

「お父様……」

「お前達は、下がつていなさい……おぬしは何故、私と試合たい?」

「私は今日で、格闘家を引退します。」

「引退? まだおぬしは、二十代後半……まだまだ引退するには早いのでは?」

「妻に傷つく姿をこれ以上見せたくない……あいつは武道家の妻として、私が勝利すれば、確かに微笑んでくれます。だが、それは心の底からではない……それに一週間前に子も生まれたし……だが、最後にあなたと本気で勝負したいのです! 私の師堀辺 正宗先生が、亡くなる前に、もし天神流の後継者に勝てたらお前は、最強の格闘家だ……とおっしゃられて……」

「堀辺 正宗……その名は父から……先代の天神流の継承者から聞いた事がある……よろしい、天神流十六代目として、相手をしよう。」

実は堀辺は、後継者にはなれなかつたが、瑠奈の祖父と共に天神流を学んでいたのだ……

その後堀辺は、天神流を捨て、骨法や柔術などの他の古武術を学び、

天神流を越える武術を編み出そうとした。

そして、その理想は、龍一の父武藏に受け継がれていった……

そして試合が始まった！

いきなり仕掛けたのは、武藏だ！

だが、彼の正拳突きをかわし、天誅が炸裂！

だが、まったく効いてない……

良昭は、足払いをし、武藏が倒れそうになつた瞬間、顔をつかみそのまま地面に頭を叩きつけた！

「天神流忍術鉄槌！」

だが、武藏は立ち上がった……更にものすごい攻防戦が続いた……

「おぬしは、あの富本 武藏の生まれ変わりか？」

「父が、富本 武藏のよう^{つわもの}な兵^{ひょう}になるよう」と願つて付けてくれた名前なんで……」

すると彼は、腰に差してあつた一本の木刀を抜いた。

あの、富本 武藏が、初めて試合をしたのは十三の時。

相手は新当流の有馬喜兵衛で、そして、武藏は喜兵衛を木刀で殺したという。

「リングの上では武器が使えないんですね……神威流は体術だけじゃないんです。」

「二刀流とは……まさに富本 武藏の二天一流……だが天神流は忍術、体術はもちろん、剣術、槍術、棒術など様々な武器が使える……瑠奈！」

「はい、お父様！」

瑠奈が父良昭に、木刀を渡した。再びものすごい激戦が……そして、良昭の頭に武藏の木刀が……だが良昭も木刀で防いだ！

「（胴ががら空きだ・・・）」

武藏のもつ一本の木刀が良昭の胴に・・・だが良昭は、中国拳法の氣功のような技で、氣合いとともに、木刀を折ったのだ！

良昭は木刀を捨て、奥義龍神を使つた！

武藏は立つ事が出来なかつた・・・これで武藏の不敗伝説は終わつた・・・

だが彼にとつて今日の試合はどうやらしに試合は今までに、無かつたであろう・・・

さらに時が流れで、瑠奈達は中学生になつていていた・・・

この頃になると、瑠奈と凍矢はヤンキーになつていていた・・・特に凍矢は補導されたり逮捕されたりして、何度も警察の厄介になつていてる。

武と凍矢と瑠奈は同じクラスで、また隣のクラスには、北斗とランが、さらに違うクラスに原田がいた。

この頃から、瑠奈と武は付き合つていて、武が瑠奈に何も言はないのは、二つか自らの過ちに気がついてくれると信じていたからだ。

だが中学を卒業して半年経つた頃、摩利支天の二代目に北斗が、特攻隊長にはラン、そして、原田がいた・・・また、凍矢が作った百鬼にはジュンジとユウヤが・・・さらに、瑠奈が結成させた苦乃一が・・・

ある晩ついに摩利支天と苦乃一対百鬼の戦争が始まった・・・

「瑠奈・・・武みたいなクソ真面目なヤツよりも、俺の女になれ！」

「凍矢、ふざけんじやないよ！？」

「お前が北斗か？」

ジュンジが北斗を睨みつけた・・・

「上等だよ！？お前・・・」

北斗がそう言つた・・・

「なんだ！？この女みたいなヤツは？」

ユウヤがランを挑発した・・・

「誰が女みたいだつて！？殺すぞ、ゴラフ！」

ランが木刀を強く握つた・・・

物凄い乱闘が・・・こうなつたら、誰も止められない・・・と思つたら、一人の男が現れた！

「瑠奈、凍矢こんなとこに居たのか・・先生が心配しておられるぞ。」

そう、その男は武であつた！

「何、じゃてめえ、は？死にてえのか～？」

百鬼の一人が武に攻撃しようとしたが・・・

「そいつに手を出すな！お前らじや無理だ！」

凍矢が自分の舎弟にそう言つた・・・

「へえ～以外と仲間思いなんだな！？」

「勘違いするな・・お前を殺すのは、この俺だ！・・てめえらへ行くぞ！」

この戦争をきつかけに、瑠奈は武にふさわしい女になるつとするが、凍矢はかなりのワルになつっていた・・

そして、その傍若無人さゆえに、凍矢はついに天神流を破門された・・

・・

それから一年が経つた・・・

武と瑠奈は阿の山と呼ばれる所で修行していた・・

天神流には道場がなく、この山は代々天神流の者が山ごもりの場として利用されてきた山である。

その頃、月形家に一人の男が現れた・・・

「お久しぶりです・・良昭先生。」

「何しに来た？凍矢・・・」

「瑠奈を俺の嫁にしようと思いまして……」
「たわけたことを……いいか、瑠奈は武と結婚させるつもりじゃ。」

「そうおひしゃると思いましたよ。」

「そいいいながら一やりと笑つた……」

「ならば、先生と武を殺さなくてはなりませんねー?」

そして死闘が始まった……が、さすがの凍矢も良昭には勝てそうもなかつた。

「（クソ、やはり今の俺では勝てんか……?）

「許せ、凍矢よ……今樂にしてやる。そして、ワシもお前の後を追う……」

良昭が、凍矢にとどめを刺そうとした……だがその時！

「う、うう、こんな時に発作が……」

なんと良昭は、胸を病んでいた！

「これは、これは……なんとも……まさか病んでいたとは……安心してください先生、今樂にして差し上げます。」

そして良昭は……

「次は武だ……」

その頃瑠奈と武は……

「瑠奈そろそろ山を降りよう……先生も待つておられるだらうし……」

「そうね……」

「……瑠奈……来年になつたら、結婚しよう……」

「うれしい……すうごくうれしい……」

二人はそのまま熱い口づけをした……

その時！

「やはり、ここにいたか……」

「凍矢……何しに来た?」

武は冷や汗を搔いた。

「瑠奈を俺の女にするためさ……」

「私は、あんたの女になる気はない……」

「いい事を教えてやるつ・・・ 瑠奈、お前の父良昭は俺が殺してやつた・・・」

「嘘を言つな！」

「嘘ではない・・・ お前らも気づいてたんだろう！？あの男が胸を病んでいたことを・・・ 感謝してもらいたいもんだ・・・ どうせ早かれ遅かれあの男の死期は近かつたに違いない・・・ だが俺のおかげで、病死ではなく戦死したんだからな。」

「凍矢・・・ なんて事を・・・」

武が構えた・・・

「次はお前だ！」

凍矢が攻撃をしかけた。

二人の実力は互角だつた。

この戦いを当時の瑠奈には止める事ができなかつた。

「やるな・・・ 武

「（すまん瑠奈、お前だけでも生きて・・・ そして幸せになつてくれ・・・）」

武は死を覚悟し、凍矢と共にガケから転落した。
すぐさま瑠奈は、ガケを駆け下り、武の所に・・・

「しつかりして、武！」

「す、すまん・・・ 瑠奈・・・ ハアハア・・・ だが・・・ お、お前だけは、幸せになつて・・・」

武はついに息耐えた・・・ だが！

「ハアハア・・・ く、くそが・・・」

なんと、凍矢はまだ生きていた！

「凍矢！」

瑠奈は父と武の仇を討とうとしたが、凍矢の凍りつく目に瑠奈は、金縛り状態におちいつた。

「ど、どうした・・・ い、今のうちに、俺を殺しておかないと、後

悔・・・するぜ！？

ついに瑠奈は、動く事が出来ず凍矢を逃がしてしまった・・・

やがて、瑠奈は、天神流の後継者となり、ただひたすら強くなろうとしていた・・・

そして、裏の世界に足を踏み入れた・・・

すでに、瑠奈の強さは、格闘王はもちろん、父良昭をも超えていた。

瑠奈は裏の世界で、何人もの人間を殺めてきた・・・

ほとんどが人間のクズばかり・・・

だが中には、本物の戦士とも命をかけ戦つた事も何度かある。

初めて、瑠奈が殺した相手は、ただの通り魔だつた・・・

ある日、一人のOしが帰宅途中に殺された。

それから、三日後に今度は女子大生がバイトの帰りに殺された。犯人は同一犯と思われるが、どうも金銭目当てではないらしい。それは殺された二人から財布などを盗んだ形跡がないからだ。

そして五日後の夜・・・

「お、お願ひです。お金ならあげます。」

「へへへっ、お前、新聞読んでないのか？おれは、金なんかいらねえよ。」

「も、もしかして、あなたが、あの通り魔！？」

「そうだ。俺が最近Oしが女子大生を殺した男だ！」

「あ、あなたの目的は何？」

「俺の目的は、恐怖に怯える女の顔を見ながら、ゆっくりと殺すことだ。」

男は無職で、名は宮下 勉（37）で人間のクズのクズだ。

「（お願い、誰か助けて！）」

女は恐怖のあまり、逃げることも出来ず、やがて、声すら出せなくなつた。

「ついに声まで出ないくらい怖いか？今から刃の包丁でゆっくり殺してやるよ。」

その時！

「今日、死ぬのはお前だよ。」

「なんだ！？誰だ、おまえは？」

「私は、始末屋^{スイーパー}・・・お前を殺しに来た！」

瑠奈だ！瑠奈がついに現れた。

そして震えている女性の近くに行き、彼女を守るとした。

「へへへっ、それにしても美しい女だ。まずはお前を、ゆっくりと殺してやるよ。」

「もう大丈夫よ。今のうちに逃げなさい。」

女は、瑠奈のやさしい顔を見たら安心し、そして、ゆっくりと歩き始めた。

その時、男が瑠奈に襲いかかつた！

だが瑠奈の天誅が破裂！

さらに瑠奈は、男が気絶しない程度で攻撃を続けた。

女は瑠奈を信じ、無事逃げることができた。

男は再び包丁で襲いかかるが、瑠奈は男の手首を蹴り、その勢いで包丁は男の腹に突き刺さつた。

「血、血が・・・、痛いよ・・お願いだ、助けてくれ。」

「無理ね。あんたは、そのまま、苦しみながら死んでいくのよ。」

そう言つて、瑠奈は去つていった・・・。

「（スイーパーか・・所詮天神流は、人殺しの技・・今の私にはち

ょうどいいかも・・）」

こつして瑠奈は、スイーパーとなり、後に裏の世界でアルテミスと呼ばれ、多くの人達から恐れられるようになつていく・・・。

「た、頼む、救急車を・・・」

その翌日、すでに男は死んでいた。

発見者がすぐに、警察に連絡した。警察は「この男が通り魔だと分かった。

そして、包丁には瑠奈の指紋が無いため、この男は自殺したことになっている。

それから半年後、ちょうど武が亡くなつて、一年が経つた頃・・・北斗は自分の思いを瑠奈に告げた。

そして、一ヶ月後・・・

「どうしたの？ 北斗・・・」

「・・・瑠奈、俺ではお前を幸せすることが出来んみたいだ・・・お前の心の中にはまだ、武が生きている・・・」

「」めん北斗・・・でもあなたに告白されてうれしかつた・・・だから・・・

そして二人は、恋人からまた友達という関係にもどつていった・・・

それから数日後、ジュンジとコウヤの前に北斗とランが現れた。
「この前の解散ギグ観たぜ。短当直用に言つ・・・俺達と音楽をやらないか？」

「何で俺達が、てめえらなんかと・・・絶対にヤダ！」

コウヤは嫌がつていたが、ジュンジは、考えていた。

「北斗、俺もこいつらと一緒にやりたくねえよ〜

するジュンジが、

「お前らにとつて、音楽とはなんだ？」

「貴重な宝だ！」

と、北斗が言つと、ジュンジはニヤリと笑い、そしてプレシャスが結成された！

さりに時は流れ、瑠奈は二十歳になつていた・・・

その頃、龍一は、上級生や中学生までマジって、堤防でいじめられていた。その中には、あのマサシもいた。

「お願い・・・やめてよ・・・」

「龍一！俺達はお前のためにやつてるんだぜ。」

「お前は、格闘王の子供のくせに弱いから、俺達が鍛えてやつてるんじゃないか。」

「明日までに、授業料五万持つて来い！」

そう言つてやつらは去つていった・・・

次の日、龍一はお金を持つてこなかつた・・・そのため、また堤防に連れられ、ボコボコにされた後、真冬の中、川に投げられた。

「ゲホッ・・・ゲホッ・・・」

龍一は自力で岸に上がつた・・・

「お前が悪いんだろう・・・金もつてこねえから・・・」

さらりにリンチが続いた・・・

だがその時！

「確かに、悪い子にはお仕置きが必要ね。」

瑠奈が笑いながらそうつぶやいた・・・

「綺麗な姉ちゃんだな！俺達の仲間になりたのか？」

と次の瞬間にじめつ子達はあつという間に瑠奈にお仕置きされて、そして一目散に逃げていつた！

龍一の体は、ビショビショに濡れていた上に、泥だらけであつた・・・

・
そして泣きながら、

「もう嫌だ・・・もう死にたいよ・・・」

とつぶやいた・・・

すると瑠奈は、

「死ねば！早く死んで見せてよ。一人で出来ないなら手伝つてあ

げようか？」

そう冷たく言い更にナイフを取り出した……

すると龍一は、

「……本当は死にたくない……本当は死ぬのが怖いんだ……

すると瑠奈は、ナイフを置き、濡れて泥だらけの龍一をそつと抱きしめた……

「（温かい……そしてすぐいい匂いがする。）」

龍一は照れながらそう思った……

「そうよ……死んだらそれで終わりなのよ……もう一度とそん

な事を言つてはダメだからね……」

「僕、強くなりたい……お父さんみたいに……」

「……努力すれば、強くなれるわよ……」

こうして、龍一は瑠奈の弟子となり、純粋に強さを求めていった……

・

しばらくして、瑠奈はヴァイオリンを弾き始めた。

実は昔、瑠奈もプレシャスのメンバーでヴァイオリンを担当していたのだ。

やがて龍一に、天神流を教えるため脱退した。

プレシャスは、その後解散をしたが、三年後に、再び活動を開始した……

た……

そして、一年後には、インディーズバンドとして、アルバム「ファンタジア」をリリースした。

アルバムの最後の曲に、瑠奈も参加して、ヴァイオリンを弾いている。

瑠奈は父から天神流を学び、母からヴァイオリンを学んでいたのだ。

瑠奈は、南や武をして、父と母のためにヴァイオリンを弾いていたのであつた・・・

第5章 龍一と瑠奈

第五章 龍一と瑠奈

南が亡くなつて、一週間が経つた・・・
この間に秀一は退院をしていた・・・

ある日、瑠奈の店に一人の男が現れた！

「へへ、なかなかいい店じやん。」

「光介！」

店に来たのは、新戦会の四天王の一人、原田 光介だ。

「南ちゃんの葬式の時、お前や北斗と久しぶりに会つたけど、あの時は話かけづらかつたから何も言はなかつたけど・・・今日来たのは、お前に頼みがあつて来た。」

「頼み・・・？」

「とりあえず、コーヒーを・・・」

しばらくして、瑠奈がコーヒーを出した。

「うまい・・・」

「それで、頼みつて何？」

「俺が、空手を学んでいたのは知つているよな！？」

「ええ・・・でもまだ続けているの？」

「ああ・・・けど最近、面白いヤツがうちの道場に入門してきた。」

「面白いヤツ・・・？」

「あの伝説の格闘王の子供だよ。」

「・・・！」

「しかし厄介なことに、とんでもなく強い！が、俺は指導員であ

る以上指導しなきやならん・・・だが、あんな化け物をビリビリ指導していいか分からん・・そこで館長や他の幹部と相談して、お前の弟子に戻せばいいと思って、頼みに来た。」

「まさかお前が、新戦会の人間だったとは・・・」

「あいつは本気で、おまえに惚れている・・・いやお前自身も、龍一に惚てるんじゃないのか？」

「この前、北斗が私にこう言った・・・お前の心は今、揺れて揺れて、揺れ動いている・・・だが、龍一を愛しているから、自分に近づけないようこじしている・・・それは愛しそうなから・・・そう言っていた。」

「あいつらしいなあ

「あいつに会つたら、店に来るようにならねえでよ。」

「分かった、今日道場で会つたら云々とくよ。」

次の日の夜、店が終わる頃に、龍一は現れた。

「・・・ルナさん、僕・・・」

「リュウ、百万払つてくれたら、アンタの彼女になつてもいいわ。」

「

「・・・・・」

「私はこういう女なのよ。」

すると龍一は、そつと瑠奈を抱きしめた。

「初めて、ルナさんに会つた時、泥だらけの僕を、こうやつて抱きしめてくれた・・・」

「・・・私にこんな事をして、ただで済むと思つていてるの？」

「僕は、ルナさんになら、殴られても、殺されてもかまわない・・・」

だが龍一の体は震えていた。

それは龍一が、瑠奈のやさしさと同時に、恐ろしさもよく知っているからだ。

そして龍一は、覚悟を決め、震えながら目を閉じた・・・

「（リュウ、お前はホントに馬鹿な男だよ。）」「

すると瑠奈は、龍一に優しくキスをした・・・

龍一にとつては、はじめてのキスだった・・・

「（・・・ルナさん・・・）ルナさん、僕と付き合って下さーーー！」

「・・・リュウ、ゴメン、今私は、誰とも付き合いたいと思えないの。でもすごくうれしいよ。」

「・・・ならもう一度、僕を弟子にして下せーーー！」

「・・・うん、それならいいわ」

こうして、龍一は再び瑠奈の弟子にもどる事ができたのである。だが一人は、まるで恋人の様な感じだった。

それは、瑠奈と龍一の距離が縮まったからである。

「マジだぜ！？マジ！俺見たもん。龍一と瑠奈さんが手をつないで歩いていたんだ。」

「確かに、龍一君は最近、様子がおかしい・・・」

「やはり一人は、付き合っているのかしら？」

学校の中で、舞と一と四郎がうわさ話をしていると、龍一が登校してきた。

「みんな、おはよー。」

「お前、瑠奈さんと付き合つているのか？」

「まさか、まだ師弟という関係だよ。それより僕、学校を辞めるつもりなんだ。」

「龍ちゃん本気！？」

「うん。本気！けどチャランポランな理由で辞めるんじゃないんだ。自分の夢・・・最強の格闘家になると誓つ夢のためさ。」

「だからって、辞めなくとも・・・」

「何となくと言つ理由で、高校に入ったが、学校で学ぶ事は何もない・・・だったら辞めて、その時間を利用して、天神流の修行をしたい。」

彼の目は本気であった。

「来週から一年間、阿の山に一人でこもって、修行に励むつもりなんだ。」Jのことは、ルナさんや親には話してある。後は、担任の先生に言つだけ……」

「龍一君は、本気みたいだねえ。」

「うん。でも、高校に入つて嬉しかつたことは、3人に出会えたことかな。」

昼休み、龍一は図書室にいた。

彼は本を読むのが大好きだ。漫画や小説、さらには絵本など様々な本を読む。

龍一の姿を見かけ、舞たち3人も図書室に入つていた。

「龍ちゃん、何の本を読んでいるの？」

「今読んでいるのは、宮本 武蔵の本だよ。あの武王大山 倍達は、山」よりも時代宮本 武蔵を心の師としている。だから、どんな人か知りたいんだ。それに、お父さんと同じ名前だし……おじいちゃんは、お父さんに宮本 武蔵のような兵になつてほしくて、付けたみたい」

「俺は本なんて、漫画しか読まないからなあ……」

四郎はそう言いながら、一冊の本を手に取つた。

彼が選んだ本は、「姿三四郎」だ。

明治時代、柔道家三四郎が、様々な格闘家達と闘つていくといつお話しだ。

そして、彼の必殺技といえば、あの山嵐だ！

この姿三四郎のモデルとなつた人物は、あの講道館の嘉納 治五郎の門下生、西郷 四郎である。

「（もし）この山嵐が出来たら、龍一に勝てるかも……」

昼休みが終わり、龍一達は教室に戻つていた……

帰宅途中、龍一達四人は、新戦会の土方と原田に出会つた。

そして、原田が龍一に話しかけた。

「龍一、瑠奈とはその後うまくやつていいかい？」

「はい！」

「俺達は今から、瑠奈の店に行くんだ。土方さんが瑠奈に会つてみたいと言つんで……お前らもこいよ。」

こうして、みんなで瑠奈の店に向かつた……

瑠奈の店に入ると、そこには北斗とランがいた。

そして、北斗が土方に向かつて、

「ト、トシさん……？」

「北斗……？ 北斗か！」

「北斗さん、土方さんを知つてているんですか？」

「ああ、俺の憧れの、ヴァーカリストだった人だ。」

「そういえば、私が小さい時、土方さん、派手な格好で音楽をやつていましたねえ」

「そうか……お前は、音楽で土方さんに憧れていたのか……」

「光介……お前、まだ空手をやつていたのか！？ ……俺は、格闘技ならボクシングが好きだな」

「音楽か……もう十年くらい昔の事だなあ……それはそうと、あなたが龍一の師匠、月形 瑠奈さんですね？」

「ええ、お久しぶりです。土方さん。」

「……ああ、何処かで見たことがあると思つたら、貴女もプレシャスのメンバーでしたよね？」

「はい、でも今は違いますけど……」

「まあ、音楽の話は置いといて、実は今日来たのは貴女と試合をしたいと思いまして……」

「土方さん！ 何を……」

「舞ちゃん、土方さんは本気だ。」

「原田さん・・・でも、お父さんの・・・館長の許可なく、正当な理由もない他流試合は禁止されています！」

「館長から、許可是もらっています。」

「土方さん、私は武道家ではありません。」

「知っています。裏ではアルテミスと呼ばれている、プロのスパイパーらしいですね。」

「・・・・・」

しばらく沈黙が続いた・・・そして・・

「武士道とは死ぬことと見つけたり・・・俺は戦つ時は、常に死ぬ覚悟で戦っています。貴女のようにね。」

「分かりました。明日の夜、そちらの道場にお伺いします。」

「では、ルールは喧嘩ルールで、勝敗は負けを認めるか、相手が立てなくなるまで・・・もちろん武器を使つてもいいですよ。では明日お待ちしています。」

そして、次の日の夜・・・

道場には、新戦会の一般の部の門下生や四郎、秀一、恵、トオル、北斗、ラン達が集まつた。

「瑠奈さんと龍一は、まだ来てないみたいだなあ

「時間の指定はしてないし、瑠奈さんは店があるからねえ・・・

「それより原田さんが持つているの、真剣じゃ・・・本気で殺し合いでする気なのか！？」

そして・・・

「お待たせしました。」

瑠奈と龍一が、天神流の道着を着て現れた。

「私が、館長の後藤 勇です。」

「月形 瑠奈です。」

「おい、すごい美人だな。」

「ああ、でも本当に強いのかなあ？」

「原田先輩、あの人本当に強いのですか？」

「あの女がどれほど強いか、もうすぐ分かる。だから黙つて見ていろ。」

「押忍！」

「永倉！」

「押忍！館長！・・・では、正面に礼！互いに礼！始め！」

ついに一人の試合が始まった。

土方がまず、回し蹴りを・・・だが瑠奈は紙一重でかわた。

更に、土方の攻撃が続くが、瑠奈はすべてかわす・・・

「さすがに強いなあ・・・」

今度は瑠奈が攻撃を・・・だが土方もかわし、かかと落としを・・・

瑠奈は避けて、そして、天誅が破裂！

更にもう片方の足で土方を蹴り飛ばした！

土方は壁の方までふつ飛んだ。

更に手裏剣を投げたが、わざと外した。

「降参したらどう！？次は、ほんとに当てるわよ。」

「やはり空手家の土方では勝てぬか・・・ならば、鬼の土方ならどうだ！」

土方の顔つきが変わり、ついに鬼と化した。

「原田！」

「押忍！」

原田が土方に、刀を投げ渡した。

「あんたが武道家でない様に、今の俺も空手家じゃない・・・」

土方がついに刀を抜いた。

「行くぜ！」

鬼の土方の攻撃が始まった。

土方の剣術は我流だが、かなりの腕前であった・・・

今度は、本当にかわすのが精一杯で、瑠奈はなかなか攻撃が出来ない。

「す、すごい・・・強いよ・・・土方さん。あのルナさんがかわすの

が精一杯なんて・・・

そして、土方は得意の突きを出したが、これも瑠奈はかわす。

「なるほど、これが鬼の土方の強さね・・・なら私も、アルテミスとして戦うわ。」

土方の攻撃は止まらない、瑠奈の頭に刀が・・・だが瑠奈は白刃取りをして、そして、刀を折った。

だがそれと同時に、土方は瑠奈の鳩尾に蹴りを放っていた。さらに折れた刀で突きを、だが瑠奈は、かわし双龍が炸裂！

そして、龍神を使つた。

「（何だ、この技は・・・）」

土方は、立ち上がることが出来なくなつた。

「ま、まさか殺した！？」

すると瑠奈が笑顔で、

「また彼と戦いは・・・」

と答えた。

土方は氣を失つてゐるが、生きていた。

「（恐ろしい女じや・・・あのトシを倒すとは、ワシもあと十年若ければ、あの女と戦つてみたいと思つたかも・・・）」

「（いつか、ルナさんを超えてみせる・・・）」

龍一は、心にそう誓つた。

第六章 龍一の過去（其の一 修羅の巻）

土方と瑠奈の戦いから一週間後……
すでに龍一は、学校を自主退学していた。

彼の担任は、止めるどころか、やつと一人、問題児が消え喜んでいた。

「緒方先生、また一人、うちの学校のクズが消えて良かつたですね。」

「まつたくですよ。あのクズ、父親があの格闘王だから、自分も強くなれると思っているんですよ。」

その話を聞いていた女教師が、一人に文句を言い始めた。

「緒方先生、藤田先生、神威君はクズじゃありません。」

「早乙女先生は、あまいんですよ。あいつは、遅刻はするは、授業中は居眠りしているはで、問題児以外の何者でもありませんよ。」

「それだけで、あの子をクズと言うのですか！？」

「あいつは、普段おとなしくしているけど、裏では何をやっているかわかりませんよ。」

「そうです。どうせ影で、シンナーを吸っていたり、イジメをしたり、ホント何をやっているか分かりませんよ。」

「お二人が、そういう人だということが、よくわからました。」

「そう言って早乙女先生は、席に戻つていつた……

「後は、嘉納 四郎も辞めてくれれば、嬉しいのだが……」

その頃、舞達は……

「なんか、龍ちゃんがないとさびしいねえ。」

「確かに今日一日、なんか物足りなかつたなあ」

「そうだね。しかも龍一君、明後日から一年間、山じまいりでいなくなるしねえ」

「まあ、あいつが決めた事だ。それより、そろそろ帰らつぜ」

その頃、龍一は、家で自分の過去を思い出していた。

今から十六年前・・・

一九九〇年五月二十日に、神威 龍一は、名古屋で生まれた。そしてこの年に、伝説の格闘王が、格闘家を引退する。

三歳の頃になると、武道の変わりに、ピアノを習っていた。龍一は、両親からかなり甘やかされて育てられた。

そして、月日が流れ・・・

小学4年生の時、龍一はいじめられていた。

彼は毎日、毎日、上級生や中学生までマジッていじめられていた。

だがその年の、十一月一日に、龍一は、瑠奈に助けられ、そして弟子となる。

龍一は、瑠奈の弟子となつてからは、学校に行かず、天神流の修行に励んだ。

「もつと腰に、力を入れて」

「・・・ハアハア・・・は、はい・・・」

龍一は、力強く蹴つた。

「ダメダメ、こう蹴るのよ。」

バシッ！

瑠奈の蹴りが、龍一に炸裂！

瑠奈は、もちろん手加減をしたが、今まで甘やかされてきたため、龍一は今にも泣きそうな顔をしていた。

「まあ今日は、これくらいにしましょ、う。」

龍一は、涙をこらえて、

「あ、ありがとうございました。」

そう言つと、瑠奈が近くに来て、龍一の怪我を診た。

「大丈夫みたいね。」

龍一の顔が赤くなつた。

「（ホント、ルナさんつて、美人だなあ・・・こんな人が、将来お嫁さんになつてくれたらうれしいなあ・・・）」

この頃から龍一は、瑠奈に憧れていた。

やがて、龍一も中学生になつていた。

龍一は、小学校の卒業式はもちろん、中学校の入学式にも出てこなかつた。

だが、中一の秋に、龍一は派手に金髪に染め、一時間目の途中に登校してきた。

龍一が、通つていた白川中学は、昔から有名な不良学校で、虎次郎やトオル、南達もこの学校に通つていた・・・

また、あの瑠奈や北斗達もこの学校の出身である。

だが、十年も時が経つてるので、瑠奈達を知つている教師はいなかつた・・・

龍一が、ドアを開け、初めて教室に入る。

「おい、あれ龍一か・・・？」

「マジ! ? どうしたんだ! ? アイツ。」

生徒が騒ぎ始めた・・・

今時間、龍一のクラスは社会の授業をしていた。

「き、君が、神威君か！？」

社会科の教師は、震えながら、龍一に話しかけようとしたが、龍一は勝手に空いている席に座り、そのまま腕を組んで眠り始めた。

二時間目の授業が終わり、休み時間の時、一人のヤンキーが龍一の席に近づいてきた。

「おい、起きろ！」

「テメエ、なんだ、そのカツコウは・・・」

「なんだ、お前らか・・・」

実はこの二人、昔上級生たちといつしょに、龍一をイジメていた二

人だ。

「雑魚に用はない・・・消えろ・・・」

二人は完全に切れた！

「まあ、強くなるためには、実戦も必要か・・・」

一人が殴りかかるとした瞬間、龍一の正券突きが炸裂！
もう一人は、龍一の後ろを取ろうとしたが、裏拳が炸裂！

「龍一君・・・」

一人の女子生徒が、龍一に話しかけた。

「静か・・・」

彼女の名は、星野 静で、ルックスも良く、成績も優秀でクラスのアイドル的存在だ。

「いつたい、どうしたの？」

「お前には関係ない。俺はこれから、修羅となり強くなる。」

「ク、クソ餓鬼が・・・」

「おい、虎次郎は来てないのか？」

「来てねーよ」

「そうか・・・」

チャイムが鳴り、三時間目の授業が始まろうとした頃、龍一は教

室を出た。

「おい、あれがホントに龍一か！？」

「ムチャ強え～」

その頃龍一は、屋上で一服していた。

「（修羅か・・・いいだらけ今日から俺は喧嘩屋だー。）

昼休み、龍一は三年のここに来た。

「お、おい、あれ一年坊か！？」

「それにしても、なんて目をしてんだ。」

「（チツ、強そうなヤツはいないのか）」

その時、教室から、泣き叫ぶ声が聞こえた。

「痛い・・・も、もう、やめて下れ。」

「お、おい、助けてやれよ。」

「馬鹿、お前が行けよ。」

「おい、ズボンとパンツ脱がせ！」

「や、やめて・・・」

その時！

「おい、まだ弱い者イジメをしているのか？マサシー。」

「誰だ！」

「昔、お前にいじめられた、神威だよ。」

「ああ、お前か・・・それにしても、あの泣き虫野郎が、ずいぶん派手な頭をしているなあ」

マサシは、いじめていた少年を蹴つ飛ばした！

そして、龍一に攻撃を・・・

だが、龍一の天誅が炸裂！

更に攻撃が続く・・・

その時！

「おい、一年坊、そのくらいこなしな。」

「ああ！？誰だ、テメエー！」

「俺は岡村 トオル」

この時、龍一とトオルは初めて顔を合わせる。

トオルは中学一年の夏に、この学校の転校してきたため、龍一の事を知らないのだ。

また、転校してしばらくしてから、南の兄北斗と同じボクシングジムに三年間通っていた。

「俺の名は、神威 龍一・・・アンタ、強そうだな」

龍一は拳を強く握り、トオルに喧嘩を売ろうとしたが、トオルは、

「俺に、喧嘩を売ろうとしてもだめだぜ。俺は、無意味な喧嘩は嫌いなんだ」

「無意味な喧嘩…トオル、二年間に喧嘩を売つてきたんだぜ」

「ああ？ てめえ、またイジメをしてたな！？」

「（何だ！？）イツも俺と同じで、イジメをしているヤツが気に入らないのか！？」

「ちょっと龍一、私の彼氏に手を出さないでよ」

「南か・・・いい彼氏だな」

そう言って、龍一は教室を出た。

「南、もしかして、あいつが伝説の格闘王の息子か！？」

「ええ、そうよ」

「なかなか面白そうなヤツだ。」

龍一は、自分の教室に戻ると、さつきの一人のヤンキーが再び龍一に喧嘩を売つてきた。

「しつこいぜ、お前ら・・・」

龍一が攻撃をしようとした時、

「お前、ホント喧嘩が好きなんだな！？」

トオルが、龍一のクラスにやってきた。

「なんだ、俺と喧嘩するきになつたか？」

「いいや、俺はお前が気に入つた

「・・・・！」

「どうだ、俺とダチにならねえ？」

「ダチだと！？」

龍一は今まで、友達なんていなかつたから、少し動搖していた。
そして、

「お前は、南の彼氏だし、俺もお前が気に入つた

「お、おい、やばいぜ」

「ああ、トオルさんが出てくるとは・・・」

こうして龍一は、初めて友達と呼べる存在が出来た。

龍一は、それから毎日のように喧嘩をするよつになつた。
だが、龍一が喧嘩屋として喧嘩を売る相手は、自分が強いと認めた
相手とイジメをしているヤツだ。

また、売られた喧嘩は必ず買つていた。

しかも、この時の龍一は手加減を知らない・・・

特に虎次郎とのタイマンは、瑠奈以外に、止める事が出来なかつた。

初めて、虎次郎とタイマンをハつたのは、龍一が喧嘩屋になつて
三ヵ月後だつた。

ある土曜の午後・・・

龍一は、公園のベンチに座つていた。

その姿を、六歳くらいの女の子が眺めていた。もちろん龍一は、こ
の視線に気づいていた。

龍一は、タバコに火を点け、そして微笑んだ。
すると、少女が話しかけてきた。

「お兄ちゃんは外人さん？」

「いいや、金髪に染めているんだよ。」

「なんか女人みたい」

その時、

「あつ、兄ちゃん！」

「龍之介」

「この人、龍之介君のお兄ちゃん！？」

「もうだよ。すゞく強いんだよ」

「でも女人の人にみたいで、全然強そうに見えない」と

どうやら彼女は、龍之介の友達で、名前は花沢

龍之介と百合が仲良くお話をしていたら、

「中坊が、何派手に染めてんだよ」

高校生くらいのヤンキー五人が龍一に喧嘩を売つてきた。

公園こゝた親子達は、急いでその場から離れた。

平和だった公園の中が、一瞬で修羅場となつた。

「翻譯」：「翻譯」

元・一體・が・ア・リ・チ・一・ア・リ

「お前ら、運かししなあ。弟達かしなかつたら、こんな程度じゃ済まないぜ！？」

「パ、パツ金に女顔・・・こいつが修羅か！？」

「すゞ」——い。龍之介君のお兄ちゃん、本当に強い

ヤンキー達にも意地があつた。まだ龍一とやる気だ。

たかその時

ପାତ୍ରବିରାମ

「龍之介、彼女連れて、他の所で遊んで来い」「えっ？・・う、うん。」「リちゃん、行こう」

一人もその場から離れた。

「やつと、テメエーと喧嘩ができるぜ！虎次郎！」

その時、警察が現れた。

「お前ら、何をやっている？」

「おい、マツポまで来たぜ」

「ああ、やばいな・・・」

ヤンキー達も、その場を離れた。

「堤防で勝負だ」

「フン・・・」

虎次郎も、公園から離れた。

だが、龍一はその場から動かなかつた。

「お前、中学生だろ？。名前は？」

「・・・喧嘩屋修羅だ！」

「ふざけてないで、質問に答える！」

「さて、そろそろいいかな・・・」

龍一はタバコを銜えた。

「おい、未成年がタバコを吸つていいと思っているのか！」

「未成年？タバコ？あの二人は、シンナーを吸つてているみたいだ

ぜ！？」

「なに！？」

警察が、後ろを振り向いた瞬間、龍一もその場を離れた。警察は後を追うが、龍一の速さに、ついて来られなかつた。

龍一は、どうやら時間稼ぎをしていただけだつた・・・

龍一が堤防に向かう途中、トオルと南に出会つた。

「おい、そんなに慌ててどこに行く？」

「堤防で、虎次郎とタイムマンだ。」

そう言って、堤防に向かつた。

「おい南、俺達も行くぞ！」

トオル達も堤防に向かつた。

その頃堤防では、虎次郎が龍一を待つっていた。

そして・・・

「待たせやがつて・・・」

「ああ！？誰のために、時間稼ぎをしてやつたと思つていいんだ

！」

「行くぜ！」

ついに二人のタイマンが始まつた。

もの凄い激戦が続いた・・・

トオル達が、堤防についた頃には、一人は血だらけになつてた。
・・二人には止める事が出来なかつた。

虎次郎が、隠していたナイフで攻撃・・・だがそれをかわし、龍一
は手裏剣を投げたが、虎次郎もかわす。

その時、静が現れた。

「龍一君、お願ひだからやめて！」

「無理だぜ！？俺達でも止められないんだから・・・」

「そ、そうだ。兄貴の幼馴染の、瑠奈さんなら止められるかも！」

？」

「瑠奈さん！？」

「ええ、その人が、龍一に格闘技を教えているらしいのよ

「お前、その人の場所分かるか？」

「ええ・・・

「よし、その人を連れて来てくれ

「分かつたわ」

南は、瑠奈の店に向かつた。

龍一は、虎次郎のナイフを持つてゐる手首をつかみ、鳩尾に蹴りを
喰らわせ、そのまま関節を決め、投げて、肘鉄・・・天神流雷鳴だ！

「ぐは～」

虎次郎もこの攻撃で、かなりのダメージをくらつた。
だが、龍一自身も、体力的にかなり限界がきていた。

その頃、やつと南は、瑠奈の店にたどり着いた。

「ハアハア・・・瑠奈さん、大変です！龍一が虎次郎と喧嘩して・

・ハアハア・・・

「落ち着いて、言いたい事は分かつたわ。一人の喧嘩を止めてほしいのね。」

「は、はい・・堤防にいます」

「悪いけど店番をお願いね」

「え？ は、はい・・」

堤防では、まだ二人のタイマンが続いていた。

スピードと技は龍一、パワーと実戦経験は虎次郎だ。虎次郎は、小学生の頃から、高校生や一般の大人と喧嘩をし、ほとんど負けた事ない男だ。だが、二人の強さ自体は互角だ！ 後は体力勝負だ。

二人が攻撃をしようとした時！

「いい加減にやめな」

瑠奈が現れた。

龍一の動きが止まった。

だが虎次郎の攻撃は、止まらない・・・

「そんなに喧嘩がしたいなら、私が相手をしてあげる」

「上等だー！」

虎次郎は、瑠奈に攻撃を仕掛けた。が、一撃で虎次郎は立てなくなつた。

「ぐ、くそつたれ・・・こ、この俺が、女なんかに・・・龍一に、そして女・・必ずお前らをぶっ殺す！」

虎次郎はフラフラな状態で去つていった。

「す、すごい・・いくら龍一との戦いで、血だらけになつているとはいえ、あの虎次郎を一撃で・・・瑠奈さんか・・そういえば、北斗さんから、あの人の伝説を聞いたことがあつたな・・・」

「リュウ、帰るよ。」

「はい・・トオル、お前も来いよ」

「あ、ああ・・」

それから後に、何度も虎次郎と戦うが、この時のように瑠奈が止めたり、勝負がついたかと思えば、二人ともダウンして立てながつたりして、勝負は龍一が、高校に入つてからも、つかなかつた。

次の日、龍一は久々に、学校に登校した。すでに昼休みだつた。後ろから静が、龍一に声をかけてきた。

「昨日はすごかつたね」

「……あの時、ルナさんが止めに入らなければ、勝つていたぜ！」

「龍一君、昨日の人気が好きなの？」

「……お前には、関係ない……」

「……私、龍一君の事が好きなの……だから……」

「……やめておけ、生きてる世界が違う……それにお前の言つとおり、俺はルナさんが好きだ。」

「そう……そうよね……でも、自分の気持ちが、伝えられたから……なんかスッキリした」

「お前にはいつか、いい男が現れるさ……」

「うん」

その時、龍一のクラスメートが現れた！

「龍一君、ちょうど良かつた。ミツオが、マサシさん達に連れて行かれた……」

「何！？場所は？」

「たぶん体育館裏……」

野田 光夫……龍一と同じクラスで、目立たない存在のため、龍一の変わりにイジメられている少年だ。龍一はすぐに、体育館裏に向かつた……

体育館の裏では、ミツオがマサシ達にイジメられていた。

「さつきクソ踏んじました。ミツオ舐めろ！」

「やめて……」

「逆らうのか！？」

マサシ達は、ミツオをボロボロにした。

「逆らつた罰だ！明日までに、五万持つて来い・・・」

「てめーら、何してんだ！？」

「りゅ、龍ー・・・」

「上等だよ！？てめーら・・・」

龍ーは一瞬で、マサシ達を血祭りにした。

「てめーら、これから俺とミツオには、敬語で話せよ！しばらくして、静が現れた。

「ミツオ君、大丈夫？」

「う、うん・・・」

「一応、保健室に行こう」

「（情けない・・憧れの静さんに、こんな姿を見られるとは・・

「どうやらミツオは、静に恋をしているようだ。龍ーは、それに気づいた。

「俺が保健室に、連れてくよ・・・もうすぐ授業が始まるから、お前は教室に戻れ・・・」

そして龍ーは、ミツオを連れて、保健室に向かつた。
その途中、龍ーがミツオに尋ねた。

「お前、静の事が好きだろう・・・」

「・・・う、うん・・でも静さんは、龍ー君の事が・・・」

「俺には好きな人がいるんで、コクられたが、断つた

「えつ？そ、そなんだ」

「お前は、静が好きで、静は俺の事が・・俺はある女性が好きで、
その女は亡くなつた恋人の事が忘れられないみたいで・・恋愛つて
難しいなあ」

「う、うん・・・」

授業が終わり、静は同じクラスの、女子生徒達と帰宅した。

だが途中、静達は三人のヤンキー達に絡まれた。

「どこの学校？」

「俺達と楽しもうぜ」

すると静は、

「皆、逃げて・・・」

「え？ そんな事出来ないよ・・・」

「そうだ・・龍一君を呼んでくるよ」

他の女子生徒達は、龍一を呼びにいった。

「まあ、バスはいいや・・あんた一人で俺達を相手してくれれば・・

・

「くすっ・・相手！？いいよ

「物分りのいい女だ！」

その時、ミツオが近くで様子を見ていた。

「（ど、どうしよう・・静さんが危ない！でも怖い・・）」

ミツオは静を助けたいが、恐怖で動けなかつた・・・
だが、自分の好きな人を助けたい、ミツオは勇気を振り絞つて、静
を助けに行つた。

「や、やめろ・・・」

「ミツオ君」

「なんだ、お前は？」

「し、静さんは、僕が守る！」

「おいおい、震えてるぜ！？」

ヤンキーの一人が、ミツオの顔面を殴つた！

その頃、さつきの女子生徒が、龍一とトオルを発見！女子生徒達

は、龍一とトオルに事情を話した。

「どうか、分かつた・・お前らは帰りな

龍一とトオルは、静を助けに向かつた。

だが、龍一は急ごうとしなかつた。

「おい龍一、何のんびりしてんだよ！？」

「ああ、大丈夫だつて、あいつは父親からテコンドーを学んでいる」

「で、でも・・・あの子は女だぜ」

「・・・しょうがねえな・・急ぐか！」

その頃、ミッオは、ヤンキー達からボコボコに殴られていた。

「ミッオ君、逃げて！」

「ぼ、僕・・龍一君みたいに強くないけど、でも静さんを守りたい・・」

「ミッオ君・・・」

ミッオは、すでに限界だった。

「けつ、口だけヤローが・・俺達に逆らうからこつなるんだ」

「おい、クズ共・・ミッオ君は命がけで、私を守ってくれた・・・」

私はミッオ君みたいに優しくないわよ」

「し、静さん！？」

テコンドーは韓国の武術で、蹴り技を得意とし、そのため柔軟や身軽さが必要だ。

もちろん、他の武術でも柔軟や身軽さは必要だが、テコンドーはその一つを利用した蹴り技が多い。もちろん手技のほうが多いが、足を自由に使うため、足技が多いと思われているのだろう。

静は、一人のヤンキーにかかと落としをし、もう一人には、回し蹴り・・・もう一人のヤンキーは、逃げようとしたが、とび蹴りが炸裂！

静は、三人のヤンキーを倒した。

だがその時、ヤンキーの仲間達が現れた！

しかも、八人もいる。

「オセエーと思ったら、こんな所にいたのか」

「直樹さん」

「何、女に負けてんだ！？」

「す、すいません・・・」

「でも直樹クン、いい女だぜ！」

「ああ・・・」

「（十一人か・・・今の私じゃ無理・・・）」

「女のくせに強そうだな・・でも俺は、あの喧嘩屋修羅のダチなんだぜ！」

「・・・へー、あの修羅の友達なんだ！？・彼、有名人よね・・・どんな感じの人なのかなー！？」

「金髪に染めてて、俺みたいにガタイがよくて、メチャ強えんだぜ」

「クスッ、金髪と、強いのは合っているけど、あなたみたいな体格はしてないわ」

「ああ！？」

その時、龍一とトオルがやつと到着した。

「なんだ！？ミツオまで居るじゃん！」

「なんだ、テメーは！？金髪に染めて、修羅のマネか？俺はその修羅のダチだからよ！」

次の瞬間、龍一は直樹の鳩尾に、蹴りを放つた！

「ぐは～・・ゲホッ、ゲホッ・・・」

「ああ！？俺はテメーなんかしらねえぞ！」

「な、直樹クンが一発で・・・」

「おい、あのリーゼント野郎・・白川中のトオルだ！」

「じゃ、じゃあ、あの金髪野郎が、本物の修羅！？」

「てめーら、よくもミツオを、ボコリしてくれたな」

「龍一、俺にも遊ばせろ！」

数分後・・・龍一とトオルは、ヤンキー達を血祭りにした。

「おいお前ら、今度はこの程度じゃ済まないからな！」

龍一のその言葉で、ヤンキー達は逃げて行つた。

「ミツオ君、大丈夫！？」

「へ、平氣だよ・・・」

「トオル、行こうぜ！」

「ああ・・・」

龍一とトオルは、その場を離れた。

「ミツオ君、ごめんなさい。・・・私、三人くらいなら、勝てる
と分かつていてたけど、ミツオ君が、私を守ってくれたから、しばらく
黙つてみていたの・・でもすごく嬉しかった・・」

「・・・僕は、静さんの役に立ちたかったんだ・・・ぼ、僕、静
さんが好きです！だから、付き合ってください！」

「ミツオ君・・・ありがとう。こんな私でいいなら喜んで・・・」

こうして、二人は恋人同士になった。

龍一は、「修羅 参上」の特攻服を着て、相変わらず喧嘩に明け
暮れていた。

だがこの時、真の強さが何かを彼は知らない・・・

第七章 龍一の過去（其の一 龍の巻）

第七章 龍一の過去（其の一 龍の巻）

月日は流れ、龍一は一年生になっていた。

「わ、悪かった。も、もう、修羅アンタには手を出さないから・・・許してくれ・・・」

「許してください！だろ・・・クズ共が・・・」
六人のヤンキー達が、血だらけになつて、倒れていた。

その喧嘩を、一人の少年が震えながら見ていた。その少年こそ、少林拳の使い手、小林 秀一だ。

もちろん、その存在を龍一は気づいていた。

そして龍一は、秀一の近くに歩み寄つた。龍一は、相手が強ければ、ヤンキーであろうと、一般人だろうと、男女関係なく喧嘩を売る。だが龍一は、嘲笑うかのように秀一の横を通り去つていつた・・・おそらく、龍一は秀一に、お前は強いが、臆病者だ！と言いたかったのであろう・・・

それは、秀一が龍一に、恐怖を感じ、震えていたからだ。

秀一は、震えながらタバコに火を点けた。

「（・・・あが、喧嘩屋修羅・・・）」

それから一週間後・・・

この日龍一は、あるモノを目覚めさせた・・・

龍一とトオル、南は、西村モータースに居た。ここは、摩利支天の

六代目、西村 和也の実家だ。

「やつと、復活した・・・」

「おう、どうだ!? 龍一」

「あつ、カズヤさん・・・復活しましたよ! ルナさんが愛用していた単車が・・・」

この日、目覚めさせたのは、瑠奈がレディース時代から、二二十歳まで愛用していたカワサキの単車ニンジャだ。龍一が弟子になつてからは、瑠奈も忙しくて、ずっと眠つていた単車・・・それを、目覚めさせたのだ。

「けつ、単車には興味ネーとか言つてたくせに・・・」

「ああ、興味ないよ。だからトオル（お前）の単車（×）にも興味ない。・・・けど、この単車は、ルナさんが愛用していたから、特別なの・・・」

「問題は、中坊のお前が、コイツを乗りこなせるかだ」

龍一は、まだ中学生、当然単車の免許など持つていない。

「へへつ、ルナさんも同じことを言つていた・・・けど、ナポレオンじやないが、俺の辞書に、不可能の文字は無い!」

そう言つて、龍一は単車にまたがつた。

「その辺軽く流したら、ルナさんの店に行くから・・・それではカズヤさん、失礼します! ジャ あな南、トオル・・・

ヴォン! ヴォヴォオオン!・・・

龍一は、その辺を流した後、ルナの店に向かつた・・・

喫茶「LUNA」・・・
ギヤバババーン!

瑠奈の店の前で、単車を止めた。

そして龍一は、店の中に入つていつた・・・

「ルナさん、ニンジャ復活しましたよ」

「へー、ちゃんと乗つてこれたんだ」

「俺は、ルナさんの弟子ですから・・・」

「それより、さつき、アンタの母親から、電話があつたわよ。」

「あつ、携帯の電源、切つたままだつた・・・」

「まあ、心配していたみたいだから、家に帰りな・・・」

「・・・は、はい・・・」

「あつ、単車は、置いてきな・・・」

「はい・・・」

龍一は店を出て、家に戻つた・・・

「おかえり、龍一・・・」

「ルナさんの所に、電話したみたいだが、なんの用だ！？」

「さつき、学校の先生から連絡があつて、あなた、今日も学校に行かなかつたの？」

「・・・悪いかよ！？」

「今から、学校に行つて、午後からの授業には出なさい・・・」

「イヤだね！」

「龍一、あなた、もう一年生なのよ・・・来年になつたら・・・」

「うるせーな！俺の勝手だろう！」

その時、父武蔵が現れた！

武蔵は、格闘家を引退してからは、時代劇モノの小説を書いたりしていた。

「沙織・・・その馬鹿は、行きたくないって言つてはいるんだ・・・

ほつとけ」

「でも、あなた・・・龍一、お父さんだつて、本当は心配しているのよ。もちろん、お母さんも、そして、先生方も、みんな、あなたの事を心配しているのよ。だから、わざわざお電話を・・・」

「先公が心配！？笑わせるぜーそんなの立場上、しようがなくやつてはいるだけだ！影では、俺をクズ扱いしたりして・・・あいつらは皆、似非教師だ！表向きは、いい面しやがつて、偽善者共が・・・パシッ！」

母沙織が、龍一の頬を叩いた。彼を叩いたのは、これが初めてのこ

とだった。

「クソババア……（あつ、涙……）」

沙織の目から、涙が……

その時、武蔵が、

「龍一、庭に出ろ！ てめーが、どれだけ弱いか教えてやる。」

「じよ、上等だ！」

武蔵と龍一は、庭に出了た。

「龍一、本気で来い！」

「い、いいのか！？ てめーは、引退して十四年も経つているんだぜ！？」

「舐められたもんだ……お前など、左手だけで十分だ！」

龍一が攻撃を仕掛けた！

だが、全部、紙一重でかわされてる。龍一が跳んだ！ 天誅だ！

だが、これもかわされた……

「もう、おしまいか？」

そう言つて、武蔵の左正券突きが炸裂！

龍一はそのまま、堀のところまでふつ飛んだ！
ドゴーン！

「ぐはっ・・・くそ・・・なんて一撃だ・・・」

「喧嘩屋？ 修羅？ 笑わせるぜ！？ てめーは、弱いものを守つて、正義の味方みたいな事をしていらっしゃるらしいが、ホントは、ただ喧嘩がしたいだけなんだろ？！？？ てめー自身も、偽善者なんだよ！ 瑠奈はお前に、何を教えているんだ？ あの女も偽善者か？」

「俺の事を、どう言おうとかまわん……だが、ルナさんの事を悪く言うな！」

「だったら、弟子のてめーが、しつかりしろー。弟子の出来が悪いと、師匠も同じだと思われるだらけー。」

「くつ・・・・

「俺は昔、瑠奈の父月形 良昭と戦つて敗れたんだよ……テレビでも、俺は負けた事があると口メンクトした」

武蔵は引退後、一度だけ敗北があるとコメントしたが、誰もその戦いを見たことがない。その時の戦いを見たのは、瑠奈、武、凍矢だけ・・・そのため、誰も信用しなかった。

また、天神流や良昭の名前も出さなかつた。

天神流は影に生きる武術・・・だから、天神流の者でない人間が、天神流を語つてはいけない、武蔵はそう思つたから、名前を出さなかつた。

もちろんマスクから相手の名前は?と聞かれたが、武蔵は、本物の修羅と戦つたと答えた。

信じる、信じないは、人それぞれ・・・それが最後のコメントだつた。

「（親父が、良昭大先生と戦つた!？しかも、親父が負けた!？・・・そうか、それで引退したのか！？）」

龍一が、ようやく立ち上がつた。

「どおした、偽善者ヤロー！もう、おしまいか？」

「くそーーいつか、てめーを超えてやる!」

龍一は、そのまま家を飛び出した。

「龍一！・・・あなた」

「ふん、あの馬鹿が、行く所は決まつている・・・」

しばらくの間、龍一は歩きながら、自分の世界に入った。

「狂おしいほど、痛いのならば、すべてのモノを壊し、自らを修羅と化すことで、求めるモノを手に入れるため、戦い続ける・・・」

龍一は、そうつぶやいた・・・彼が求めるもの・・・それは強さ・・・だが、今の彼は、喧嘩の強さしか求めていない。

「（どおすれば、親父を超えられるんだ・・・）」

龍一が立ち止り、我に戻つた・・・

しばらくして、彼が再び歩き始めた・・・

その時の龍一の顔は、まるで鬼のような表情をしていた。通行人達は皆、龍一と目を合わせないようにしていた。

その時、一人の男が龍一の肩にぶつかった。

「どこ見て歩いているんだ！？」「ラッ！」

龍一が大声で怒鳴った！

通行人達も、一瞬立ち止まつたが、見て見ぬふりをし、再び歩き始めた。

「おつ、ワリーな・・ボウズ。」

「ボウズだと！？今の俺は、機嫌が悪いんだ！喧嘩なら買つてやるぜ！」

「・・・俺は空手家だ！素人を相手にする気はない」

この空手家こそ、元摩利支天のメンバーで、後に新戦会の四天王となる原田 光介である。

だがこの時、お互いに相手が何者なのかを知らない。

そのため、龍一は、すでに原田と会っていた事を知らない。

この時出会つたのは、ただの空手家・・としか覚えていない。

原田も、この時出会つたのは、ただの悪餓鬼・・としか覚えていない。

「空手家！？上等だよ！？俺は強いぜ！」

「ふーん・・」

龍一は、完全に切れた！

「ぶつ殺す！」

「礼儀をしらんボウズだなあ・・まあ、昔の俺も人の事言えないが・・・」

「構えろ！空手家ヤロー」

「いつまでも、お前と遊んでいる暇はない・・じゃあな・・ボウズ」

原田が、背を向け、去ろうとした・・

「逃げるのか！臆病者！」

原田が立ち止まり、振り返つた・・・

そして、原田が上段回し蹴りを・・・
だが、紙一重のところで止めた。

「（やはり出来る・・あの爺さん）・・・」それでどうが強いか、分かつただろ？・・次は本当に当てるやー。」

「（・・み、見えなかつた・・・）」

「ボウズ、強くなるためには、負ける事も必要だ。その悔しさをバネにもつと強くなれ・・」

原田が、再び背を向けた・・

「ああ、それからこの戦い、おれ自身も、お前の後ろに居る爺さんには、負けた・・」

そういつて原田は、去つていつた・・・

「（・・後ろに居る、爺さんー？）」

龍一が、後ろを振り向くと、そこには一人の老人が立っていた。

「ジジイ・・いつから、おれの後ろに！？」

「ホツホツホツ・・ワシの気配に気がつかなかつたのか！？わしは、あの男が回し蹴りをする、ちよつと前に、お前さんの後ろに居つたかな・・」

「（いくり、あの空手家ヤローに、氣をとられていたとはいえ、俺の背後を取るなんて・・）」

「あの空手家、強いの？・・じやが、お前さんは未熟者じやー。」

「なんだと！？」

龍一が構えた・・

「おいおい、こんな年寄りに、暴力を振るう氣か？」

「てめー、ただのジジイじやネーだろ？ー？」

「あの空手家が、お前さんには、勝つたが、わしには負けたと、言つておつたじやろ？・・・あの回し蹴り、お前さんに対しての警告とともに、わしへの挑戦でもあつたんじや・・お前さん、あの蹴り見えたか？」

「・・いや、見えなかつた・・・」

「そりぢやろ？・・じやが、わしは見えた。顔色一つ変えずにな・

・だから、あの男は、負けを認めたんじやー。」

「・・・・・」

「わしの弟子にも、お前さんみたいに喧嘩の強さしか知らんやつが居る・・武道家にとつて、本当の敵とは誰だと思つ?」

「・・・自分より強い相手!?」

「いや、己自身じや・・わしの弟子も、お前さんも、心が弱いんじゃ!」

「心が弱い!?」

「そうじや・・・お前さん的心は荒んでいる。そのためお前さんは、わしに背後をとられたんじや!もし、わしが悪人じやつたら、お前さんはどうなつていったかのう・・・」

確かに、この老人が悪人だつたら、龍一は殺されてしまう。

「まあ、あの男の言うとおり、悔しさをバネに強くなることじや」

「じーさん、あんた一体何者だ!?」

「わしの名は、小野寺 辰彦じや・お前さんは?」

「神威 龍一だ!」

「神威!?お前さん、伝説の格闘王の息子か?」

「ああ・・けど、俺は親父から武術を学んでいない・・俺の師匠は、ルナさんだけだ」

「るな!?月形 瑠奈の事か?」

「ああ、ルナさんの事知つているのか?」

「知つてあるぞ・・確かに天神流とかいう古武術の使い手で、アル何とかつていう殺し屋じやろ!?」

「アルテミスだ!それに、殺し屋じやネー、スイーパーだ!」

「ああ、そうじや・・アルテミスじや・・そういう名乗つておつたわ・

・
「(名乗つて!?)じーさん、ルナさんに会つた事があるのか?」

しばらく小野寺が黙りこむ・・・

そして、小野寺が、再び語り始めた・・

「5、6年くらい前に、チンピラ共が悪さをしておつたので、少し懲らしめてやつたんじや。」

「へー・・・」

「じゃが、そうしたら、チンピラ共が、わしの命を狙い始めてのう・・・」

「そうか、それでアンタはルナさん」、奴らを始末してくれと、依頼したんだな！？」

「いや、逆じゃ・・・依頼をしたのは、チンピラ共の方じゃ・・・そして、あの娘が現れたんじゃ」

「ば、馬鹿な！？・・・ルナさんは、クズを始末するのが仕事・・・そんな、クズ共の依頼を受けたもんか！」

確かに、小野寺が弱ければ、瑠奈は相手をしなかつた事だらう。だが、小野寺も昔は名のある武道家・・・天神流の技を振るうと、これ以上の相手・・・

だから、彼女は、チンピラ共の依頼を受けたのであらう。

「あの娘は、修羅そのものじゃつた」

小野寺が、この時言つた修羅とは、荒んだ者のことではなく、三面六臂の闘神阿修羅のことである。その表情は、怒り、悲しみ、意志を表している。

確かに瑠奈は、強い意志を持つている。そして、家族や武を失つて、怒りと悲しみを心に秘めて生きている。

「わしは、お前の父、格闘王とは戦つた事はないが、おそらくあの娘は、格闘王より強いじゃろつ・・・さすがのわしも、何十年ぶりかに本気になつた。さて、この勝負どつちが勝つたと思う？」

「・・・ル、ルナさん！？」

「そう、そのとおり、勝つたのはあの娘で、わしは負けた・・・望みどおり、わしの命をやると言つたが、あの娘は、ただあなたと勝負したかっただけ・・・そう言つて去つていつた」

その後、小野寺の命を狙つたチンピラ共は、全員病院送りとなつた。そして、瑠奈に恐怖を感じ、この街から姿を消した・・・だが一人だけ、まだこの街に残つてゐる。その男は入院中に、人のやさしさを知り、心を入れかえ、今は眞面目に生きてゐる。

「さて、そろそろ行くかのう

「フン・・・いつか、親父にも、あの空手家ヤローにも、あんたにも、負けないくらい強くなつてやる・・・」

龍一は、そう言つて去つていった・・・

小野寺も、その場を離れようと、歩き始めた・・・その時、

「あつ！小野寺先生・・・どうも、こんにちは」

一人の少年が、小野寺にお辞儀をした。

「おう、秀一か・・・」

小野寺に、挨拶をしてきた少年は、小林 秀一だつた。実は、秀一に少林拳を教えていたのは、小野寺であった。

「今、面白い男に一人も出会つたわ」

「面白い男・・・？」

「一人は空手家、もう一人は、お前が前に言つておつた・・・喧嘩屋修羅じや！」

「ま、まさか、修羅のヤツ先生に喧嘩を・・・」

「売つてきた・・・じやがなあ秀一、少林寺拳法は喧嘩のための武道じやない、己を鍛え弱き人を守るための武道じや！」

「・・・・・」

「まあ、お前も、あの少年も若い・・・これからじや」

その頃、龍一はルナの店にやつて來た。

「やつと來た・・・今度は、あんたの父親から電話があつたのよ

「親父から！？」

「しばらく、私の所に預けるつて・・・まあ、あんたには、まだまだ教えなけばいけない事がたくさんあるし・・・とにかく、今

日からまた、私と二人で暮らすのよ」

龍一と瑠奈は、一年以上、阿の山にこもつて、二人で生活した事があるが、瑠奈の家での暮らしは龍一にとつては、初めての事であった。

「はい！」

龍一は、再び瑠奈と暮らせるかと思うと、今日の出来事が、どうで

もいいと、思えるようになった。さつきまで、鬼の様な表情をしていた龍一だが、今はまるで、飼いならされた子犬の様であった。

「夕食まだでしょー? 用意できているから、食べな

「はい! いただきます!」

「でもね、リコウ……あんたには、ちゃんと待っている家族がいるんだから、その事だけは、忘れるんじゃないよ」

「俺……お袋を、泣かせてしましました……今度、謝つてきます」

「ホント、出来の悪い弟子なんだから……」

「でも、親父のヤツ、ルナさんの事を……」

「偽善者つて、言つていたんでしょ……」

「知つていたのですか?」

「電話で、謝られたわ……でも、それは間違いじゃないわ

「えつ?」

「間違つてるのは、私の生き方……相手がどんなヤツでも、殺せば、罪人……」

瑠奈自身、自分が罪人だという事を、誰よりも知つてゐる。

「……後、親父以外に、空手家と、小野寺とかいうジーさんに負けました」

「あんた、小野寺先生にも喧嘩を売つたのー?」

「……はい」

「あきれた……」れじや、まだまだ、奥義は教えられないわね

「はい……」

「それから、じつせ学校に、行く気がないんでしょうー? あんたには、ちゃんと家の事や、店の手伝いをしてもらつから……もちろん、バイト代はだすわ」

「はい、分かりました……あの、僕はビリで寝ればいいんですか

?」

「あんたは、下のリビングで寝なさい」

瑠奈の店の奥に、キッチンやリビング、バスルームなどがあり、二

階に、瑠奈の部屋がある。

「ああ、それから、変な事しようとしたら、ぶつ殺すからね！」

「は、はい・・分かっています・・・」

こうして、龍一と瑠奈の新たな生活が始まった。

瑠奈の店は、年中無休・・・瑠奈の店が休業する時は、天神流の特別な修行がある時か、瑠奈のもう一つの仕事が、ある時くらいだ。営業時間は、朝七時から夜十八時である。

その後、夕食が済んだら、天神流の修行が、朝方四時まで続く・・・

そのため、二人の睡眠時間は、2時間くらいである。

だが龍一は、強さを求めた・・・

今までとは違う強さを・・・真の強さを求めた・・・

第8章 龍一の過去（其の三 神威の巻）

第八章 龍一の過去（其の三 神威の巻）

それから一週間後・・・

さすがの龍一も、疲れが出始めた。

「ふー、やつと、お客さんがいなくなつた」

「どうしたの・・リュウ？疲れたの？」

「だ、大丈夫です・・・」

その時、一人の男が店に入ってきた。その男の姿を見て、龍一の表情が、鋭くなつた。

「何しに来やがつた！？親父！」

「おいおい、それが客に対する態度か？」

店に入つてきたのは、龍一の父、武蔵であつた。

「まあ、てめーに用はネー。俺は、瑠奈に話があるんだ。クソ餓鬼は席を外してくれないか？」

「ふざけんな！俺は仕事中だぞ！」

「リュウ、お前疲れただろう・・部屋で休んでいな

「・・・はい・・・」

龍一は、エプロンを脱ぎ、そのまま部屋の中に入つていつた。武蔵は、コーヒーを頼んだ。

そして、瑠奈と話始めた・・・

「馬鹿息子の、世話をしてくれてありがとつ

「とんでもありません」

「それから、偽善者呼ばわりした事も・・・」

「前も言いましたが、おじ様の言つている事は正しいと思います。

私自身も、罪人・・・

「・・・いつまで裏世界で生きるつもりだ！？良昭先生も、武も、そして、お前の母も、お前が、裏社会で生きる事を、望んじやいない・・・それは、お前自身が一番よく知っているはず・・・」

「・・・」

しばらくして、瑠奈が「一ヒーを出した。

「うまい・・・これなら喫茶店だけでも、食べていけるだろう」

「・・・裏の仕事で、依頼人から、お金をもらつたことはありますせん」

スイーパー・・・日本語に訳せば始末屋だが、瑠奈は人間のクズしか始末しない。

警察は、事件が起きてからしか動かない。たとえ命を狙われている者がいても、証拠がなければ動けないのだ。そのために、大事件となる事もある。

だが瑠奈は、依頼人が心の底から助けを求めれば、命に代えても、その依頼を果たす。

そして、依頼人の笑顔が、なによりの報酬なのである。

だが、中には、小野寺の時のような例外もある。

天神流の後継者は、皆修羅となる。瑠奈も相手が強ければ、修羅となってしまうのである。

「確かに瑠奈のおかげで、助かつた人は多いらしいな・・・ところでお前、彼氏はいないのか？」

「・・・いません・・・」

「そうか・・・お前なら気づいていると思うが、俺の馬鹿息子は、お前に好意があるみたいだが・・・」

「私は罪人・・・リュウには、私なんかより、もつといい女性と付き合つてほしいのです」

「まあ、アイツはまだ、中坊だしなあ・・・」

「私は、沙織おば様の気持ちを知っていたのに、リュウに武術を教えてしました。おじ様を倒した天神流を・・・」

「瑠奈、それは間違いないじゃない……間違っていたのは俺だ。龍一に護身術として、武術を教えていたら、アイツはいじめられなかつただろう……あの時、俺は何もしてやれなかつた。アイツも男としてのプライドがあつたのだろう……絶対にいじめられていた事を言わなかつた」

武蔵は、コーヒーを飲み終えた。武蔵は、コーヒー代とは別に、龍一の生活費を瑠奈に渡そうとしたが、

「今日は私のおごりです。それと、アイツに必要なお金は、アイツ自身、ここで働いて、払つてもらいますから……」

もちろん瑠奈は、龍一からもお金を取るつもりはない。

「……そうか……だが、コーヒー代は置いてくぜ……アイツを頼むな」

そう言つて武蔵は店を出た。

その夜……

「……すいません。いつの間にか寝てしまつて……」

龍一はあの後、そのまま寝てしまつたみたいだ。

「ご飯、できているから食べな

「はい、いただきます！」

龍一が夕食を食べ始めた。

「親父、何しに來たんですか？」

「あんたをヨロシクつて、頼みに見えたのよ……それからさつき、南ちゃんが來ていたわ

「南が……？」

「あんたに、合わせたい人がいるみたいよ

「俺に！？」

「女人らしいわよ！また近いうちに來るつて

その時、

ピンポーン

とインターホンが鳴つた。

「南かな？」

そう言つて、龍一は玄関に向かつた。

そして、玄関を開けると、そこに居たのは、母沙織であった。

「お、お袋……」

「元気そうね……これ、着替え……お父さんに頼んだけど……」

「あら、おば様……こんばんは」

「瑠奈ちゃん、お久しぶり」

「どうぞ、上がつてください」

「今日はただ、この子の着替えを持ってただけで……今度ゆっくりと、遊びに来るわ」

沙織は、着替えを龍一に渡し、帰らうとした時、

「お袋……この前は「ゴメン……」

龍一が沙織に、この前のことを謝つた。

「……たまには、家に帰つてきなさい」

「……ああ、たまには、顔を出しに帰るよ」

龍一は、途中まで母を見送つた……

「この辺でいいわ。ありがとう」

「ああ……」

「あんまり無理しないようにね……休む事も必要なのだから……」

「分かつたよ。それじゃ……」

さすがに、瑠奈と同じリズムで生活をしていては、龍一は倒れてしまうだろう。

そのため、瑠奈は龍一に、店の手伝いを週4にして、時間も十一時～閉店までにした。

それから三日後の午後……

ピーク時が過ぎ、お客様は一人もいなくなつた。

その時、店にある男が現れた。

「いらっしゃいませ！」

龍一が、丁寧に接客をした。

すると男は、

「瑠奈ちゃん・・お久しぶり」

その男は、瑠奈の事を知っているようだ。

瑠奈も、その男にあいさつをする。

「ホント、久しぶりね・・3年ぶりかしら・・・」

男は、龍一の方を見て、

「この子が、瑠奈ちゃんの弟子かい？」

と、瑠奈に尋ねた。

「ええ・・出来の悪い弟子で、困っているんですけど・・・」

「どうも、すいません・・・」

龍一は、申し訳なさそうに答えた。

「出来が悪いか・・・俺も昔はそうだったな・・・」

「あの小野寺先生にまで、喧嘩を売つたらし」のよ

「小野寺先生か・・懷かしいなあ・・あの時、瑠奈ちゃんに、病院送りにされたのが、昨日の事のよう」と思える

「（ルナさんに、病院送りにされた！？）」

男は「ヒーを頼んだ。

すると瑠奈は、

「体調の方はいいの？」

と、男に尋ねた。

「まあまあかな！？2年前から、パン工場で働いてる・・・そ

れより今度、美奈子と結婚するんだ」

「やつと、美奈子さんと結婚するのね・・おめでとう」

「ありがとう・・瑠奈ちゃんが月の女神なら、美奈子は愛の女神かな！？」

「確かに美奈子さんは、ヴィーナス（愛の女神）かもね・・・」

「ルナさん、この人は誰ですか？」

瑠奈はしばらく黙つていた。

すると、男が答えた。

「俺の名は、野々村 将太・・・昔、瑠奈ちゃんに、小野寺先生を始末してくれと、依頼した事があるんだよ」

龍一は、男の言葉を聞いて、何者なのか分かった。

五年前に小野寺 辰彦を始末してくれと依頼した、チンピラの一人だという事を・・・

だが龍一には、なぜ、そんなクズと瑠奈が仲良くしているのかは、分からぬ。

「他のヤツらは、瑠奈ちゃんに恐怖を感じ、この街から姿をけしかが、俺は入院中に、瑠奈ちゃんや美奈子のおかげで、人の優しさを知る事が出来た」

将太の婚約者、美奈子は、看護師である。年は二十八歳で、将太は美奈子の二つ下である。

将太は最初、整形外科で入院していた。怪我も治り、本当なら、他のチンピラ共と同じように、退院できるはずだった。しかし、お腹の痛みが消えない。

将太は、そのまま内科病棟に移された。

そして、検査の結果、彼の病名が分かった・・・クローン病だ！

あの愚かな男、野村 昇児と同じ病気だ！

「最初は、治らないと聞いて、世の中がイヤになつたよ・・・そんな時、瑠奈ちゃんが見舞いに来てくれた」

「他の連中は退院しているのに、野々村さんだけ、まだ入院していると聞いたから・・・」

「すごく嬉しかった・・・その時、瑠奈ちゃんの優しさを知つたよ・・・」

「私もその時、クローン病という病気を知つたわ」

「クローン病！？クローン人間なら知つているけど・・・」

龍一には、初めて聞く病名だ。

クローン病は、一九三二年に、クローンという人が発見したところから、その名前が付けられた。そのため、クローン氏病ともいわれ

ている。

クローン病は、口から肛門までの消化器に潰瘍が出来るが、主に小腸や大腸に潰瘍が出来る。

「腸が細くなったり、穴が開いたりするんだぜ！しかも、腸を安静にするため、胸から点滴をして、絶食なんだぜ！」

「ホントですか！？」

「ああ・・・けど、すごい激痛だつたから、食欲なんか無かつたけど・・・」

将太はこの時、腸閉塞を起こしていた。そのために、緊急手術となつた。

クローン病は、命に係わる病気ではないが、腸閉塞や血便が止まらなかつたりすれば、当然命に係わる。そのため、緊急手術が必要とされる。

野村 昇児もそのために、三回も手術をしている。

「今度はそのため、外科に移されたんだ。術後には、一、二日、付き添いが必要だつたが、俺には親がいないんだ」

将太の両親は、彼が十八の時に、交通事故で亡くなつている。

「俺は、昔からワルをやつていて、結局、親孝行出来なかつた・・・」

将太の目から涙が・・・

「将太さん・・・」

龍一は、やつと分かつた。今の将太がクズでないといつ事を・・・

将太は涙を拭いて、再び語り始めた。

「・・・術後、俺の付き添いをしてくれたのは、瑠奈ちゃんだ・・・手術後は、次の日から歩かされた。術後の痛み・・・体中にはたくさんの中・・・けど、瑠奈ちゃんがいたから、苦痛の中、次の日から歩く事が出来た」

手術して、次の日から歩くのは、再び腸閉塞を起こさないためでも

あるが、再び腸閉塞を起こしてしまった人もいる。

「この時、瑠奈ちゃんにも親がないと知った・・・俺はこの時、瑠奈ちゃんに恋をしていた。調子がよくなつたら告白しようと思つた。そして、地獄の一週間を、外科で過ごし、再び内科に戻るのだが・・・所詮、治らない病気・・・問題なのは、食事だ。点滴のカロリーを減らして、エレンタールという栄養剤を飲まなければいけないのだが、これが不味いんだよ・・・一応、いろんな味のフレーバーがあるんだけど、不味い！」

エレンタールは、粉を溶かし、飲む方法と、鼻から管を通して、点滴のようにゆっくり落として、栄養を取る方法がある。

また、エレンタールは、一パックに300カロリー入っている。成年男性は約1500カロリー必要・・・エレンタールだけで生活するなら、五~六パックは必要となる。

他にもラコールと呼ばれる栄養剤がある。こちらは、すでにジュースのようになつており、味も何種類があつて、エレンタールよりも飲みやすい。だが、カロリーは一パックに100カロリーしかない。

「食事も、栄養士からいろいろ聞いたけど、未だに、何を食べていいのか分からん」

クローン病の食事は非常に難しい。簡単にいつてしまえば、エレンタールやラコールだけで、生活するのがいいといわれている。

しかし、それでも再発をしてしまう人もいる。逆に何を食べても平気な人もいる。

だが、腸の病気なのだから、食事は消化のいいものを食べた方がいいと思われる。

それでも調子が悪くなるなら、栄養剤だけで絶食をした方がいいと思われる。

「俺は、ある決意をした・・・瑠奈ちゃんに告白しようとした決めた・・・だが、ふられた・・・」

龍一の表情が、険しくなった。自分が告白した時、ふられたら・・・と、思つたからだ。

「俺にとつて、初めての恋だった・・・それだけに、ショックも大きかった。そんな時、よく慰めてくれたのが、美奈子だつたんだ。俺は、無理だと思ひながらも、退院する日に、彼女にアドレスを教えた。そして、久しぶりに、誰もいない家に帰つてきた・・・次の日の朝、起きて携帯を見ると、メールが来ていた・・・美奈子からだつた・・・そして、再び俺の恋が始まつたのさ」

将太がこの時、入院していた期間は、二ヶ月・・・

普通の人なら長いと思うだろうが、クローン病や、他の難病患者からすれば、二ヶ月など、マシな方だつう・・・彼らは、半年や一年の入院ですから当たり前・・・しかも、クローン病は、治療のため絶食・・・ひどい時は、水を飲む事さえ出来ないのだから・・・更に、退院してもすぐに戻つてくる人もいる。

将太も、その後、数え切れないほどの入退院を繰り返している・・・

「さて、そろそろ行くか・・・」ちそうさん

将太が、「一ヒー代を払おうとしたら、龍一が、

「結婚祝いにしては安いかもしれないけど、今日は俺のおじりです」

「・・・ありがとう・・・君の名前は?」

「神威 龍一です!」

「龍一君か・・・君の恋もうまくいくといいね・・・

「えつ!?」

将太には分かつていた。龍一が、瑠奈に好意を持っているのが・・・

次の日の朝方・・・

天神流の稽古を終え、布団に入るが、龍一は眠れなかつた。

彼は迷つていた。瑠奈に告白をするべきか、それとも、あきらめるべきか・・・

結局彼は、一睡も出来なかつた。

そして店に出ると、そこには、南と一人の女性が、龍一を待つていた。

「南、俺に会わせたい人って、その人かい？」

「そう・・・バイト先で友達になつたの・・・」

「麻奈美といいます・・・」

「どうも・・・龍一です・・・」

麻奈美は、髪を青く染めているが、すごくおとなしい感じの女性だつた。

南は、中学を卒業してから、カラオケ屋でアルバイトしている。 麻奈美とは、そこで知り合つたみたいだ。

麻奈美は、南の二つ上で、龍一とは四つ上になる。

「麻奈美は、バンドやつているの・・・だけど、ヴォーカルが辞めちゃつて・・・最初は、瑠奈さんに頼んだのだけど、忙しいからつて断られたの・・・それで、あんたを紹介使用と思つて・・・」

「バンドか・・・俺にヴォーカルなんて出来るかな!?」

「龍一さん・・・お顔もいいし、いいお声をしていますよ」

龍一の顔が、赤くなつた・・・どうやら龍一は、初めて会つた麻奈美に、ときめいてしまつたようだ。

「(いかん、いかん・・・俺は、ルナさん一筋なんだ・・・)」

「リュウ、やってみたら・・・」

「ルナさん・・・」

瑠奈はすぐに分かつた。龍一が麻奈美に好意を持つた事を・・・

「・・・分かりました・・・やってみます。それで、バンド名はなんていふんですか?」

「アリスといいます」

麻奈美は、アリスのギターでもあり、リーダーでもある。アリスというバンド名をつけたのも麻奈美だ。彼女は、ルイス・キャロル原作の、不思議の国のアリスが大好きだ。

不思議の国のアリスは、白いさぎを追つて、アリスが不思議の世界に迷い込んでしまうというお話だ。

麻奈美は、自分達で不思議な世界を創り、観客にアリスとなつてもらい、不思議な世界を体験してもらう。

それが、彼女の作ろうとしている音楽の世界だ。

「アリスか・・・いいね。俺も、あの話は大好き」

その時、三人のお客が入ってきた。

「いらっしゃいませ！」

龍一がまた、元気に接客しようとした。

「やつと、来たみたいですね・・・」

「麻奈美さんの知り合いですか？」

「皆、こちらが、アリスの新しいヴォーカリスト、神威 龍一さんよ」

この三人は、アリスのメンバー達だつた。

ギターのセイジ、ベースのコータ、ドラムのカミヤ・・・

「麻奈美ちゃん、こいつ中坊じやないですか！？」「こんなヤツと一緒にやるんですか？」

「な、何だと！」

セイジの言葉に、龍一は切れそつになつた。

「金髪に女顔・・・こいつ、修羅とかいつて、調子こいているヤツだろ！？」

カミヤも、挑発的な態度であつた。

「上等だ！コラー！」

しばらく黙つていた、麻奈美であつたが、

「お前らはここに、喧嘩しに来たのか？」

麻奈美の一聲で、メンバー達が黙り込んだ。

「『めんなさい』ね……龍一さん」

「は、はあ……麻奈美さんは、元ヤンですか？」

「……そんな昔の事は、忘れました」

「と、とにかく、ヨロシク……」

「ひして龍一は、アリスの『一代目ウォーカリスト』となつた。

その日の夜……

「リュウ、麻奈美ちゃんの事が気になるのドジョウ!…?」

「そ、そんな事……」

「彼女、彼氏がないみたいよ」

「そ、そつなんですか……（やはリルナさんは、俺の事なんか……）」

三日後……

南と麻奈美が、店にやつて來た。

「麻奈美さん!…いらっしゃいませー!…」

「龍一、私もいるんだけど」

「あつ、南、いらっしゃい」

「ちよつと、麻奈美の時と態度が違つじやない!…」

「そうか……? 麻奈美さん、ご注文は?」

「コーヒーを、お願いします」

「私は、コーラとハムサンドー」

「はい、はい……」

しばらくして、龍一がコーヒーと、コーラと、ハムサンドを持ってきた。

「ちよつじ、俺も今から昼休憩なんだ」

そう言つて、龍一は、南の隣に座つた。

「何で、私の隣に座るのよ?」

「麻奈美さんの隣だと、緊張するし、喋りづらいじゃない

「はそう言つて、麻奈美と話始めた」

「麻奈美さんは、ファンタジーものが好きなんですね？」

「はい」

「俺、ヘリーナ・ツッター好きなんですよ……本も全部読んだし、映画もDVDで観ました」

「私も大好きです……でも映画の方は、一番新しいのだけ観ていいないです」

「炎のビスケットですか!? 今度、貸してあげますよ」

しばらく黙つて、ハムサンドを食べていた南だが、

「ねー……龍一」

そう呼びかけるが、龍一は、麻奈美との話に夢中で聞こえていない。

「でも、一作目の話が、俺は一番好き……ヘリーナ・ツッターに乗ついたら、魔法の世界に迷い込んでしまうんだよね……」

再び、南が呼びかける。

「龍一！」

「何だよー?」

よつやく、南の呼び声に気づいた。

南は、龍一を連れて、店の外に出た。

「あんた、どうじつつもり?」

「何が!?」

「あんた、瑠奈さんと、麻奈美と、一股かけるつもり?」

「南、俺とルナさんは、付き合つてないわけじゃない……」

「だってアンタ、瑠奈さんのことが……」

「所詮、無理なんだよ……ルナさんは、今でも武さんのことが……

・・・

「・・・そうよね……だから、北斗も……」

「北斗さんが、何だよ!?」

「・・・な、何でもない……麻奈美と、つまへいくといいね……」

「・・・・・」

「私、邪魔みたいだし、帰るわ……」

「南・・・」

「じゃあね！」

「あつ、「一ラとサンドイッチ代！」

「いい人、紹介してあげたんだから、アンタのおじいさん、決まっているでしょ！」

そう言って、南は帰つていった・・・

「たく・・・ああいうヤツは、絶対長生きするな・・・」

だが南は、子供を助けるため、十八といつ若さで、この世を去つてしまつ・・・

龍一は、再び店の中に入つていった。

「南、帰つちゃつた」

「そうですか・・・では、私もそろそろ・・・」

「リュウ・・送つていてあげな」

「はい・・」

しばらく、龍一と麻奈美は、話ながら歩いていた・・・龍一は心中で、告白をしようと決めた。
そして、龍一が立ち止まつた。

「俺・・・麻奈美さんのことが・・その・・好きです！」

「・・・私、正直な人が好きなのです」

「・・・・・」

しばらく沈黙が続いた・・・

そして・・・

「俺は、本気でマナミの事が好きだ・・それは嘘じやない・・けど、それ以上にルナさんのことが好きだ・・・！俺は最近、夢を持った・・・最強の格闘家・・それが、俺の夢・・・」

「・・・・そうですか・・では、音楽をやつてている暇なんてあり

ませんね・・・ヴォーカルは、また新しく探しします

「ゴメン・・・けど・・・一度だけ、俺をステージに上げさせてくれ

！」

「はい！」

「じゃあ俺、店に戻るから・・・」

「龍一さん・・・あなたの気持ち、すごく嬉しかったわ・・・この言葉は嘘ではありません」

「ああ・・・じゃ、また・・・」

麻奈美を途中まで送つて、龍一は店に戻つた。

「おかえり、どうだつた？」

「・・・自分の気持ちを、彼女に伝えました・・・けど、俺には、本当に好きな人がいるから・・・」

「・・・そう・・・」

龍一はいつか、自分の気持ちを瑠奈に伝えようと、そつ心に決め、再び仕事に戻つた。

数週間後・・・

この日、龍一が、初めてステージに上がる。

この日のために、龍一は、天神流の稽古を休み、歌の練習に励んだ。

「ルナさん、絶対来てくださいよ・・・特に最後の曲は、俺が詩を書いたんだから・・・」

「ちゃんと行くわよ」

そして、アリスのライブが始まった。

ライブハウスには、瑠奈だけでなく、トオル、南、静、ミツオ、そしてフレシャスのメンバー達も観に来た。

「ようこそ・・・アリスの不思議な世界へ・・・」

龍一は、王子様のカツコウを・・・麻奈美は、お姫様のカツコウを・・・セイジは、ピエロ・・・ユータは、魔女・・・カミヤは、天使

のカツコウをして現れた。

「今宵は、このカムイが、皆様を案内をさせていただきます」

龍一らしくないセリフだが、彼は今、喧嘩屋修羅ではない。カムイ王子だ。

だから、修羅の名を使わずに、苗字の神威を使つたのだろう。

この、ライブハウスで瑠奈達以外に、彼らの演奏を、本気で聴いている人が何人いるかは、分からぬ……

だが、龍一が歌つているのは、瑠奈に聴いてもらうため……そのために、ステージに上がつたのだから……

そして、次が最後の曲……詩は龍一が書いたという曲……

「最後に、この曲を聴いてください……月の女神！」

龍一が、瑠奈のために書いた詩だ。

この時、瑠奈はどのような気持ちで、この曲を聴いていたのだろう。

曲が終わり、龍一が最後に、

「オ・ル・ヴォワール」

そう言つて、ステージを降りた。フランス語で、さよならという意味だ。

龍一は別に、フランス語が話せるわけではない……たまたま、知つていた言葉を言つただけである。

しかし、師匠の瑠奈は、フランス語、英語、更に、中国語まで話せる。

裏の世界で生きるために、彼女はいろいろな国の言葉を学んだのである。

ライブが終わり、龍一は、麻奈美や他のメンバー達と朝まで飲み明かした。

店に戻つた龍一だが、飲みすぎたため、二日酔いとなつた。

彼は以外と酒が弱い……といつても、彼は未成年……タバコと一緒にで、未成年の飲酒は法律で認められていない。

「の日、龍一はお休みで、毎過ぎまで眠っていた。

田が覚め、顔を洗い、瑠奈にあいさつをした。店に出てきた龍一。

・

「おはようございます！」

「もう、毎過ぎよ・・・」

「・・・昨日のライブ、どうでした？」

「・・・良かったわよ・・あんた格闘家より、ミコージシャン田指したら！？」

「・・・がんばって、最強の格闘家になります・・・！ちょっと、散歩してきます」

そう言つて、彼は散歩しに出かけた。

龍一が、散歩をしていると、公園で、高校生カップルが、三人のヤンキーに絡まれていた。

「こんなヤツより、俺達と遊ぼうぜ！」

その時、

「お前らとは、俺が遊んでやるよ！？」

龍一が現れた。

「ああ！？（き、金髪に女顔・・・修羅・・・）」

「お、俺達・・・よ、用事がありますから・・・失礼します！」

三人は、そう言つて、公園から去つていった。

「ありがとうございます！」

高校生カップルが、龍一にお礼をいった。

「ああ・・・なあ、あんた達、高校生だろ！？」

「はい・・・」

「高校つて、楽しいか？」

「俺は、楽しいと思つています・・・高校に行つたから、彼女とも出合えたし・・・」

「そうか・・・」

龍一も、来年は三年生・・・この時から、彼は高校に行く事を決意

する。

彼は途中で、参考書を買つたため本屋に立ち寄つた。

その時彼は、父親が書いている本を手に取る。読書家の彼だが、今まで父親の本だけは読んだことがない。彼は夢中で本を読み始めた。・・

龍一が店に帰つてきたのは、夕方過ぎだつた。

「ルナさん・・俺、明日から、学校に行きます！」

「ど、どうしたの・・急に・・」

「俺・・・高校に行くことに決めました！」

彼は、遅れたぶんを取り戻すため、猛勉強をし始めた・・・

そして龍一は、舞達と同じ桜木高校に入学した。

ふと、目を開け、

「・・・あんな頃もあつたんだな・・・」

そう、龍一はつぶやいた。

そして、龍一が阿の山にいる日がやつて來た。舞達は氣を利かせて、わざと見送りにこなかつた。

「ルナさん・・・行つてきます！」

「いってらっしゃい」

龍一を抱きしめ、瑠奈が優しくキスをした。龍一にとつて、一度目のキスだ。

そして龍一は、店を出て阿の山に向かつた。最強の格闘家になるといつ、夢に向かつて・・・

第九章 トウルース（愚かな男の真実）

第九章 トウルース（愚かな男の真実）

強さを求めているのは、龍一だけじゃない・・・

舞や一は、今までよりも厳しい空手の稽古を開始した。秀一も小野寺から、今までより厳しい少林寺拳法の修行を開始した。四郎は柔道部に入部し、再び柔道の稽古に励んだ。トオルも、再びボクシングジムに通い始めた。

そして、ある日・・・

「喫茶LUNA・・・ここだな・・・」

一人の男が、瑠奈の店にやつて来た。

「いらっしゃいませ」

「あの・・・ここに、龍一君がバイトしていると、聞いたんですけど・・・」

「「めんなさい・・・リュウ、今いないんです」

「そ、そうですか・・・（それにしても、なんて美しい人だ）」

男は、そのままカウンターに座つた。

「失礼ですけど、貴女が、龍一君に武術を教えている・・・お師匠様ですか？」

「・・・はい、そうですけど・・・」

「（うらやましい・・・）」

瑠奈が水を出すと、男はアイスティーを頼んだ。

そんな時、舞、一、四郎の三人が店にやつて来た。三人は席に座り、ジュークとハムサンドを頼んだ。

男は3人の声に、聞き覚えがあるみたいだ。男は後ろを振り向いた。最初に気づいたのは、四郎だ。

「の、野村さん！？」

男は席を立ち、三人に近寄った。

「久しぶりだなあ」

男は、あの愚かなクローン患者、野村 昇児だった。

昇児はアイスティーを持って、四郎の隣に座った。

「龍一君、いないみたいだね」

「龍ちゃん、山にこもって修行しているの・・・自分の夢に向かって・・・そのために学校も辞めちゃったのです」

「そうか・・・夢のために学校を・・・まるであの人みたいだ」

「あの人！？」

「俺の、憧れのヴォーカリスト・・・元ルナシーのヴォーカル・

河村 隆一さんだよ」

昇児が、タバコに火を点けた。

「俺も、隆一さんや龍一君みたいに、夢を持っていたなら、あんな学校を辞めていたかも・・・」

専門高校時代・・・それは、昇児が最も嫌う時期・・・

「そういえば、野村さんの病気って、変わった名前でしたよね！」

？

「ああ・・・クローン病だ」

その病名を聞いて、瑠奈が昇児の方を見た。

「（クローン病・・・野々村さんと同じ病気・・・）」

「来年で十周年だぜ！」

舞達と一緒に、馬鹿笑いしているが、彼は、ちょっと今まで、世の中がイヤになっていた。

「そうそう、皆にお勧めの本があるんだ」

昇児はカバンから、本を取り出そうとした。その時、一枚の紙が落ちた。四郎がその紙を拾った。

「修羅 生死のプロファイル！? 1979年? 2月22日生まれ

！何ですか？これは？」

それは昇児が、二年前に遊びで作ったプロフィールだつた。1979年の後の？は、別に意味はない。遊びで？と書いたのだ。彼は、一九七九年二月二十一日に名古屋で生まれた。

「あつ、それは見ないでー、俺が見せたかったのは、この本なの」昇児は、一冊の本を取り出した。

「少しば、恩返しが出来たかな」という鬪病記である。

昇児が少し前に、世の中がイヤになつた時、この本を読んで、生きることの大切さを、思い出す事が出来た本である。

昔、昇児は、本氣で自殺をしようとした人に、キレたことがある。また、せつかく友達になつたのに、病氣で失つた友たちがいる。昇児は彼らのために、祈りという曲を作つたこともある。

だが、昇児自身は、本当に弱い人間だ。この本を読む前や、初めて病氣した時など、何度も、世の中がイヤになつた事もある・・・おそらく、これからもあることだろう・・・

現在は、デパスという安定剤だけしか飲んでいないが、一時期は、かなりの安定剤を飲んでいた。

病氣してからも、馬鹿な事をしていたのは、彼の心が弱かつたからだろう・・・

「本で思い出しましたが、小説は書けたのですか？」

四郎が昇児に尋ねた。

「・・まだ、出来ていない・・一応、主人公は忍術家の少年！」

「忍術家！？龍ちゃんと同じだ」

「・・こ、この物語は、別に龍一君をモデルにした分けじやないよ・・最初は、拳法家にしようとしたんだ。俺、ブルース・リー やジャッキー・チョンに憧れているし、おれ自身も少林寺拳法を学んでいたし・・・」

「それが、何で忍術家になつたんですか？」

舞が昇児に尋ねた。

「俺が小さい頃、ショー・コスギさんの「ンジャ映画」が流行っていた。この時、俺は、忍術を学びたいと思った。しかし、本当に忍者がいるのか分からなかつた。そんな時、ある特撮番組に、本物の忍者が出でてゐると知つた。・・・初見 良昭先生だ」

奈が、武術は心得がある。今がた寝みて聞く。お前がたの母

「戸隠流二十四代目宗家」

その結果た

「わ、さすが、龍一君の師匠……初見先生は、戸隠流忍法など、九つの古武道を極め、戸隠流三十四代宗家となつている……本部は千葉県にあるらしい」

また、小学生たつた昇児には、名古屋から千葉は遠すぎた。だが、大人になつたら、忍術を学び行こうと思っていた。

「しかし、俺が学んだのは、少林寺拳法と実戦空手だ。しかも少林拳はガキの頃少し習つただけだし、空手も病氣してからだから、本格的には出来なかつた・・この物語の主人公には俺が出来なかつた事をやつてもらいたい・・だから、忍術家なんだ」

今昔物語

「俺、泳げなかつたんだ・・・だから、学校から少林寺を辞めて、スイミングスクールに通うように言われた・・・まったく、教師は勝手ござ!?しかし、学校では一じめられて、」

「 そ う な ん で す か ！ ？ 」

この時、昇児と兄は父親に、弟は母親に引き取られた。
兄は7年前に結婚し、家を出ている・・子供も一人いる。男の子で、
昇児にとつて、甥っ子だ。

兄は保育士で、弟も保育士になろうと、現在勉強中だ。だが、たとえバラバラに暮らしていても、たまに家族がそろえ、遊びに行ったりしている。

また、父親側の祖母は、一年前から、ずっと入院している。

祖父は、二〇〇一年一月一日・・・正月に永眠・・・

昇児は、その前の年に、一度だけ、祖父と同じ部屋で入院した事がある。それが、最初で最後だ。

昇児が、この時入院した期間は約半年・・その間に祖父が入院してきたのだ。

最初は師長も、昇児の祖父とは気づかなかつたため、違う部屋になる予定だつたが、気を利かせて、同室にしてくれたのだ。また、昇児が2回目のオペをしたのも、この年だ。

母親側の祖母は、母親が小さい時に亡くなっているから、昇児は知らない。

祖父も、昇児が小さい時に亡くなつた。

「中一から、馬鹿な事ばかりしていたなあ・・・授業中に大声で歌を歌つて、先生が怒つて、授業がつぶれたこともあつた・・・けど、この頃は、アニメのキャラに恋をしたりして、かわいらしい一面もあつたんだ」

「もしかして、この1992年の初恋つて、アニメのキャラですか！？」

四郎がプロフィールを見て尋ねた。

「当時の俺にとつては、愛の女神・・・ヴィーナスなんだよ・・でも、そのアニメ、中坊の時しか観ていなくて、大人になつてから続きを観たら、戦士が増えていた・・・俺は大人のような女性がタップだから、今なら、ネプチューンかな・・・」

3人は思つた・・・この人は、オタクなのかと・・・だがこの時、昇児は本気で、アニメのキャラに恋をしていたのだ。それだけ、彼の心は、まだ無邪氣だったのであるう・・・

「だけど、俺の心が荒んだのは、この後……」

昇児の顔から、笑顔が消えた……

さつきまで、馬鹿笑いしていた彼だが、今はまるで別人……

昇児は、中学を卒業し、料理の専門高校に入学した。暴力が全ての学校・・・専門学校でもあり、高校でもあるため、三年間通うこととなる。

特に一、二年は修羅場だった……

生徒同士の喧嘩・・・教師の暴力・・・そのストレスを発散させるため、ついに昇児は、罪の無い生徒をイジメてしまう……更に、教師が教師を止めるという事件……

そんな時に、昇児はルナシーと出会う。

一九九四年の夏の終わり頃・・・ツレとゲーセンに行つた時、その時に流れていた曲が「ロージア」だ。

この曲は病気をしてからも、昇児の支えとなつてている。

「野村さん、大丈夫ですか？」

舞の呼び声に、昇児が答える。

「ゴメン、ゴメン・・・ちょっとと考え事をしていた・・・僕の心が荒んだのは、僕の心が弱かつたんだ。それに、中学の時、ちゃんと勉強していれば、普通の高校に入れたと思うし・・・この闘病記の北原 和憲さんは、病気だけじゃなく、受験とも闘つているんだ。」

北原 和憲氏は、十九年と短い人生の中、卓球に励み、病気と闘いながら、受験勉強をし、早稲田、慶應、そして東大にまで合格している。

「俺には受験戦争なんかなかつたから・・・それより、背中が痛い！」

「背中！？」

昇児は数年前から、背中の痛みを訴えている。医者にも原因が分か

らない。彼はお腹の調子がよくても、背中の痛みは消えない・・・

「消化器の病気だけど、足が腐った人とかと出会ったこともあるし、テレビで目の見えないクローン患者を観た事もある・・・命に係わる病気じやないが、腸閉塞や血便がとまらなかつたら、当然命に係わる・・・病人は、痛み、苦しみ、そして、恐怖との戦い・・・」

「昇児は背中の痛みが強くなつてきたため、痛み止めを飲んだ。

「大丈夫ですか？救急車を呼びましょうか？」

「・・・大丈夫・・・痛み止めを飲んだから・・・救急車か・・・何

回乗つたことか・・・」

彼は、痛みや下痢で睡眠不足となつたりして、何度も倒れた事がある。そのために何度も救急車に乗つている。

また、お腹が痛いため、侍のようになつたものにはしようとトイレの中でそのまま眠つたことも何度かあつた。

これは彼だけでなく、多くのクローン患者が経験したことだらう・・・

彼の表情が、穏やかになつた・・・痛みが和らいだのであるう・・・
「・・・だいぶ良くなつた・・・口では、なつたものはしようがないとか言つてゐるけど、ホントは怖いよ」

この闘病記の中で、和憲氏は、両親には言わなかつたけど、彼は友人に年賀メールを打つていた。和憲氏の母親は、彼が亡くなつてから、そのメールを知つたみたいだ。

そして、メールの中に、恐怖との闘い・・・長い文章の中に、その言葉が書かれていた。

彼は恐怖の中、最後まで病気と闘つた・・・彼が残した本で、命の大切さを感じてもらいたい・・・

昇児自身も、この本を読んで、命の大切さを感じたのだろう・・・

「野村さんは、いつ病気になつたのですか？」

舞が尋ねた。

「一九九〇年……くだらないギャグはやめよう……一九九七年・・卒業して、パン工場に就職した時だから、十八歳の時だ」
パン工場に就職した彼は、お腹の痛みを訴える。

地元の病院では、精神的なものと言われた。

だが、彼の痛みは強くなる。五十キロ以上あつた体重が、四十キロ以下になつた。

そこで、祖父が通つている名古屋大学付属病院、通称名大で検査をして、昇児と家族は初めて、クローン病という病名を聞く・・・難病で治らない・・・彼は心中で、死にたいと思った・・・ルナシーはその頃、ソロ活動をしていたが、昇児は「ロージア」を聴いて、病気と闘う決意をした。

「入院中は、暇だからね・・・ビデオを観たり、CDを聴いたり、本を読むことくらいしか、楽しみはない」

長期入院で、しかも絶食・・・だから入院中には、CD、ビデオ、DVD、そして、本などが彼には、必要なアイテムとなる。

またこの時、メジャー・デビューしたマリス・ミゼルと出会い。中世ヨーロッパの貴族のカツコウ・・・まるで、おどぎの国から飛び出してきたようなバンドであった。入院中に、テレビでマリスのクリップ映像を観たとき、彼は病院ではなく、マリス・ミゼルの不思議な世界にいたのであるう・・・

そして、彼は、腸閉塞を起こしたため、緊急手術となつた。

この時の入院期間は約四ヶ月・・・初めての入院・・・初めての才ペ・・・

そんな彼を支えたのが、漫画と映画と音楽、そして、家族の愛情である。

またこの時、看護師に恋をしている。彼にとつて本当の恋だつたが、その人には、婚約者がいた。結局、彼の片思いで終わつた・・・

退院後、彼は空手を習う・・・会に在籍していたのは、約五年だが、本格的に稽古をしていたのは、二年くらい、しかもその間に何度も入退院を繰り返している。後の一年は少年の部の指導・・・最後の方は、ただ見学しているだけであった。

また仕事は、アルバイトを転々としている・・・

病気して間もない頃は、仕事場にも、道場にも、遊びに行く時にも、通院する時にも、エレンタールを持つ出かけた。

だが、それでも入退院を繰り返してしまう・・・

それは彼が、馬鹿な事ばかりしていたからかもしれない・・・

三年後になると、再び世の中がイヤになつた。

医者からは、再手術が近いと言われていた。

小腸と大腸のつけねの部分が糸みみたいに細くなつていたのだ。いつ、モノがつまつてもおかしくない状態だった。

そんな時、ある特撮番組と出会い。

四郎がプロフィールを見て、

「2000年にタイムレンジャーのおかげで生きる意欲が出てくる！そして、遊び人になる！何ですか？これは？」

と、昇児に尋ねた。

「あつ、それ、永井 大さんが出演している、特撮番組・・・二十世紀最後という事で、未来をテーマにしたスーパー戦隊シリーズ！」この番組も、彼に勇気を与えてくれた。

「永井さんがセリフで、明日を変える・・・というセリフがあるんだ。それを聞いて、明日を変えるためにも生きようと思った。そして、思い出した・・・病気で失った友たちの事を・・・

「そのあの、遊び人とは何？」

「僕が、初めて付き合つたのは、この時なんだ・・・でも、浮気されたから、一ヶ月で別れた・・・

だがこの時、昇児は怒る事もなければ、悲しむ事もなかつた・・彼自身も本気じやなかつたのであらう・・・

「それから、ナンパみたいな事をしたり、スロットをやつたり・・違う意味で明日が変わっちゃつた・・でもこの頃、祈りといづ曲を作つた」

祈り

荒んだ時代を生きていくために

僕は強く

生きていきたい明日にむかつて
僕は生きる

君の・・・

分まで・・・

華のようすに散つて逝つた

君のために僕は祈る

苦しみの中でも生きて散つてゆく

修羅のよひ

僕は・・・
生きる・・・

壊すものすらないから今は
空にいつも僕は祈る

華のようすに散つて逝つた

華のようすに散つて逝つて

君のために僕は祈る

これが昇児の作った祈りの歌詞である。昇児が亡くなつた友たちのために作った曲・・・

その亡くなつた友の中には小さな子供もいる。昇児が初めて入院した時、手術後、調子が良くなり、たまたま喫煙所で、付き添いをしていたご両親と知り合つて、入院中にお子さんと漫画の話をしたり、遊んだりしていた・・・年も病氣も違うが共に病氣と闘つた友達・・・だが、ある日、ご両親が喫煙所に挨拶をしに見えた。その時にその子に何が起きたか、彼にはすぐに分かつた。ご両親が、喫煙所にいた昇児や他の患者、付き添いの方に挨拶をしていかれた。

昇児にとって、その子は今でも大切な友・・・

更に一回目の入院の時、同室で仲良くなつた友も・・・昇児が退院してから、その子の母親から電話がかかってきた時、亡くなつたことを知つた。

更にクローンではないが、似たような病氣で亡くなつた人もいる。また、昇児が初めて入院して、落ち込んでいる時、励ましていただいた患者の人たち・・・

「少しほ、恩返しができたかな」の和憲氏や、病院で知り合つて亡くなつた友たちのためにも、命の大切さを伝えたい・・・昇児は心からそう思った。

また、昇児は、二十代前半の頃、金髪に染め髪を逆立てていた。当時彼は、バンドをしていたが、音楽をしているから、金髪に染めたのではない。

彼は、病氣に対する怒りを表すため、漫画のマネをして、金髪にしたのだ。

「病氣になつたのは、誰のせいでもない。だけど、その怒りを何かにぶつけたい・・・だから金髪に染め、自分がどれだけ怒つているかを、表したかったんだ。でも、その時の写真を見せると、チン

ピラ」と言われる・・・

「その写真を見てみたいな」

「・・・また今度・・逆立つていてる写真は、プリクラしかないから・・・」

「〇〇一年・・・最初で最後となつたが、祖父と同じ部屋で入院する。

そして、痛みに耐えきれず、彼はついに、一度目のオペを決意する。

「〇〇一年・・・」この年に、名古屋IBDの会の役員となる。

この会は、クローン病と、潰瘍性大腸炎のための会・・・潰瘍性大腸炎もクローン病と同じで、厚生省の難病特定疾患に指定されている病気だ。この時に、修羅生死という名前で祈りのCD-Rを作つていて。後、失敗となつたが、会の余興で一人ライブをしている。会議の時、勉強ばかりでは、若い患者が来ない。そこで、当時の会長から、ライブをしてくれと頼まれたのだ。だが、即興でやつたため、お笑いライブになつてしまつた・・・

「〇〇四年・・・その前の年から、何度も救急車で運ばれ、何度も入退院を繰り返している。そして、再び腸閉塞を起こし、三度目のオペとなつた。

だがここ数年、背中の痛みもあるし、手術してもすぐに再発してしまつ・・・

「〇〇五年には、大量の血便で再手術かと思ったが、何とか止まり、輸血をするだけですんだ。

だが、世の中がイヤになつた。もう、生きたくない・・彼は本気でそう思つた。

その時に出会つたのが、あの「少しば、恩返しができたかな」である。

この本は、彼に生きる勇気だけでなく、彼に夢を「与えた。

彼の今の夢・・それは、彼が今書いている物語を、いろいろな人に読んでもらう事である。

そして、クローン病やイジメ、人の命の大切さを伝える事・・・

「出来たら読ませてください」

「俺も・・・」

「僕にも読ませてください」

「OK! でも小説を書くという目標のおかげで、今を生きようとした気で思えた。前にも言つたけど、物語の中でなら格闘技をやる事が出来る。そのために、漫画を含めて、格闘関係の本を読んでいる・・・さて、そろそろ帰るか・・・お勘定はここに置いていきます」

その時、

「野村さん・・私の知り合いにも、クローン病患者がいます。その人も昔はクズでしたが、今は一生懸命生きています。あなたもがんばってください!」

瑠奈からの励ましの言葉だ!

「ありがとうござります!」

そう言つて、店を出た。

彼が、クズのままで終わるか、夢に向かって、がんばれるかは、彼しだい・・・
自分の明日をどう変えるかは、彼しだい・・・

第十章 後継者

龍一が山にこもってから、一年が流れた……

「助けてー！」

一人の少年がヤンキーにいじめられていた。

「逃げるなよ！」

その時、一人の少年が現れた！

「かつてこの街に、修羅と名乗る喧嘩屋がいた……」

「ああ！？」

「今その喧嘩屋は、どこにいるのだろう……」

ヤンキーがその少年を見て、恐怖を感じた。

「しゅ、修羅・・・」

龍一だ！龍一が山から下りて、この街に戻つて來たのだ。ヤンキーはあわてて逃げていった。

少年も龍一にお礼を言つて去つていった。

「やつと、帰つてこられた・・・この街に・・・

「龍ちゃん！」

舞、一、四郎の三人が、学校から帰宅途中に龍一と出会つた。

「皆・・久しぶり・・・

「龍一、今帰つてきたのか・・・？それにしても、すごいカッコウだな」

髪の毛はボサボサに伸び、道着はボロボロ・・・それだけで、龍一が阿の山で、どれだけの荒行をしてきたのかが分かる。

「今から美容院に行つて、綺麗になつてから、ルナさんの店に行こうと思っているんだ」

「じゃあ俺達、先に瑠奈さんの店に行つているよ」

「馬鹿ね・・・」ついう時は、一人きりさせてあげるの・・・

「いいよ、皆とも話しをしたいし・・それに、久々に会つから、緊張しているんだ」

龍一は一度家に帰り、その後で美容院に行つた。

喫茶SHUNA・・・

三人は瑠奈に、龍一が帰つてきている事を、わざと話さなかつた。瑠奈自身も、いつもと違う3人の態度を見て気づいていた。だが瑠奈は、三人の気持ちが分かつていてるから、あえて聞かなかつた。

しばらくして、龍一が現れた。

「た、ただいま帰りました・・・」

龍一は少し照れくさそうな顔をしていた。

「・・おかえり・・」

瑠奈も少し照れくさそうな感じだつた。

龍一は瑠奈に、何を話していいのか分からなかつた。

そして龍一は、舞達と同じ席に座つた。その間に、瑠奈との会話を考えようと思つたのだ。

しばらく4人で馬鹿笑いをしていたが、一の表情が険しくなる。

「一ちゃん、どうしたん?」

「実は一週間前に、転校生が入つてきたのだけど・・僕も舞ちゃんも四郎君も、その子の事が気になつていてるんだ」

「何を!?」

「その子の名は、不知火 隼人・・・髪を赤く染めていて、先輩達からも目をつけられていた」

「それである日、先輩達から呼び出されて・・偶然その時、私が

見かけたのよ。大変だと思つて、助けようとしたのだけど・・・先輩達は、一瞬で倒された

「俺も、アイツは氣に入らない・・・ボコボコにされれば良かつたんだ

「四郎は黙つていて・・・それでその時、その子が使つた技・・・

あれは、天神流だつたわ・・・

「不知火・・・」

龍一はそうつぶやくと、しばらく黙り込んだ・・・

そして、龍一が語り始める・・・

「天神流は一子相伝・・・幕末までは、後継者になれなかつた者は、たとえ我が子でも殺さなくてはならない・・・それが運命だつた・・・その運命を変えたのが、天神流十三代目・・・不知火 彦斎・」

「不知火 彦斎!?」

「彦斎の母の名は螢・・・父は不明・・・だが、河上 彦斎ではないか・・・とも言われている」

「あの大思想家、佐久間象山を暗殺したという幕末の人斬り・・・
河上 彦斎の事!?」

江戸の頃になると、時代は太平の世に向かつていた・・・

だが、一八五三年・・・黒船来航により、時代は大きく変わつてゆく・・・

多くの志士達が、尊皇攘夷などの理想のため・・・明日の日本のために、倒幕に乗り出した・・・

それが、幕末と呼ばれる時代である。

この幕末の時代に、河上 彦斎という人斬りがいた。
彼は一八三四年（天保五年）肥後生まれ・・・

河上は、我流の剣術、不知火流という、居合い、または抜刀術の使

い手である。

右足を前に出して構え、後ろに伸ばした左膝が着くほど姿勢を低くして、右手一本で斬りかかる、という極めて独特な居合い術だ。

天神流には、こんな伝説がある。

一八六三年（文久三年）・・・動乱の京・・・

「河上 彦斎殿とお見受けする・・・」

「（女・・・！？） そうか・・・そなたが噂の鬼姫か・・・」
動乱の京で、鬼姫と呼ばれている女・・・それが天神流十二代目・・・
蚩だ！

彼女は、明日の日本のために戦っているのではない・・・兵を求めて戦っているのだ。

「貴女は兵を求めて戦っているみたいだが、私は貴女が求めている兵ではない」

「いや・・・お前は強い・・・！」

しばらくの間、二人は睨み合つ・・・

そして、河上が抜刀した。

蚩は、河上の頭上よりも高く跳んだ。

「（消えた！？）

河上がそう思つたとき、蚩の天誅が炸裂！

「な、何という技だ・・・」

「これが私の天誅だ！」

天誅・・・この頃、多くの志士達の間で使われていた言葉だ。

天に代わつて、罪を裁くという意味・・・

河上が、蚩に刀を渡そうとした。

「私は人斬り・・・だが、そなたのような美しき鬼姫に斬られるなら・・・悔いは無い・・・」

だが蚩は、この時、河上に止めを刺さなかつた。

それからしばらくして、蚩は一人の男児を産む。

名は彦斎・・後に天神流十三代目となる男だ。

彼女が、河上に止めを刺せなかつたのは、二人の間に愛が芽生えたからかもしれない・・・

その後蛍は、阿の山に戻り、子供と、師でもあり、養父でもある辰巳としばらく暮らす。

蛍は赤子の頃に竹やぶに捨てられていた。その時に、辰巳に拾われ天神流を学ぶ事となる。

蛍との戦いから一年後・・・一八六四年（元治元年）・・・
新撰組が池田屋事件で、その名を天下に鳴り響かせた時、河上は佐久間象山を暗殺・・・

「初めて人を斬る思いがして、髪の毛が逆立つ思いがした」
そう語り、彼はそれ以後、暗殺をしなくなつたという。

時は流れ・・・一八六七年（慶應三年）・・・
十月十四日に大政奉還が成される。

だが十一月十五日・・・坂本 竜馬が近江屋で暗殺される。十七日には、同席していた中岡 慎太郎も息を引き取る。

それからしばらくして、蛍が京に戻ってきた。

坂本は北辰一刀流免許皆伝の腕前・・・蛍が求める兵であつただろう・・・

彼女がもう少し早く京に戻つていたなら、二人は戦つていたかもしない・・・

そして、ある月夜の晩・・・

二人の長州の志士が、数名の新撰組隊士に追われていた。

「覚悟しな！」

一人の隊士が斬りかかるつとした時、どこからか苦無が飛んできた。

「誰だ！？」

「お前達に用はない・・・」

「用があるのは……私ですか？鬼姫殿……」

「組長！」

その男こそ、新撰組一番隊組長……沖田 総司……

「貴女の噂はいろいろと聞いています……ですが、私には、女性を斬る事は出来ません」

「戦いに、男も女もない……それに本当のお前は、私と戦いはず……」

「……」

「く、組長！」

沖田は知らないうちに、刀を抜いていた。

そして、二人の激しい戦いが始まった。

スキを見て、長州の志士達はその場を去ることが出来た。

沖田は晴眼の構えから、やや右に刀を開き、刃を内側に向けた。平

晴眼と呼ばれる構えだ。

そして、沖田が三段突きを……だが、

「私の突きがかわされるとは……」

蛍は沖田の突きを全てかわした。そして距離を置き跳んだ！天誅だ！

だが、

「お前の方こそ……私の天誅をかわすとは……」

沖田も蛍の天誅をかわした。

だが、

「ゴホツ・・・ゴホツ・・・」

沖田が吐血をした。

彼の体はすでに病に侵されていたのだ。

「……お、沖田！？」

蛍は、しばらく沖田の様子を見ていた。そして、

「……この勝負、お前の病が治るまでおあずけだ」

そう言って、蛍は去つていった……

しかし、二人が戦うことは一度となかった……

時代の流れは止まらない・・・一八六八年（明治元年）・・・
戊辰戦争の始まりである鳥羽伏見の戦いが幕を開く・・・
だがこの戦いに沖田は参加していない。それだけ彼の病はかなり悪化していたのだ。

彼には分かつているのだろう・・・自分の死期が近いのを・・・
だが沖田は、他の病人達と冗談を言って、笑つてばかりいた。

師でもあり、新撰組の局長の近藤 勇は、

「あんなに死に対して悟り切つているヤツも珍しい」
と語つた。

だが四月二十五日・・・沖田よりも先に、近藤 勇が板橋刑場にて斬首される。

そして、沖田 総司が五月十五日に病死・・・

翌年・・・一八六九年（明治二年）・・・

新撰組は、北へ北へと戦い続けた・・・

だが、五月十一日・・・まるで沖田と近藤の後を追つかのように、鬼の副長、土方 歳三が戦死する。

天神流にも、鬼と鬼姫が戦つたという伝説はない。

土方は、蚩が一番戦いたい相手だつただろう・・・

土方自身もそれを望んでいたことだろう・・・

だが土方はこの日、銃弾を受け戦死したのだ。

それから間もなくして、戊辰戦争が終結する。

一八七〇年（明治三年）・・・

維新後、河上 彦斎は、攘夷思想を曲げ切れず、維新政府と相反し、更には無実の罪を問われ斬首される。享年三十八であった。
蚩はその後、不知火 蚩と名乗るようになつた。

時は流れ・・・天神流は、蚩から彦斎に受け継がれた。

彦斎には、三人の子供がいた。後継者となつたのは、次男の幻次である。

だが彦斎は、我が子を殺す事ができなかつた。一人の子供が、その後どうなつたかは、不明……

だが彦斎は、天神流の運命を変えた。

「十四代目となつた幻次には三人の弟子がいた。一人は彼の娘の灯、もう一人がルナさんのおじい様、そして、堀辺 正宗……僕も、阿の山に行く前に知つたんだけど、この人は、僕のお父さんの師匠なんだ」

「格闘王の師匠！？」

三人が同時に驚いた。

「そして、十五代目となつたのが、ルナさんのおじい様……本来は、後継者にならないと、技を教えてはいけない。堀辺先生も天神流を捨て、骨法などを学び、天神流を越える技を編み出そうとしていた。だがおそらく、幻次の娘不知火 灯が、子供と孫……そのハヤトという男に技を教えたんだと思う」

「じゃあ、ハヤトがこの街に来たのは……」

「私に会うため……！天神流の後継者になるには、全ての技を会得し、強い者が後継者になれる……ハヤトが全ての技を会得しているなら、後継者になる資格があるわ」

「それじゃ、龍ちゃんはどうなるのですか？」

「リュウも、全ての技を会得している……もし本当にハヤトが、後継者になるために、この街に来たのなら……二人を戦わせて、勝つた方を後継者にするわ」

「龍一がもし負けたら、どうなるのですか？」

「……天神流は、全ての技を会得し、強い者が後継者になれる。負けた者は……天神流を捨ててもううわ」

「僕は戦いますよ！そして、自分の夢のために勝ちます！」

天神流の後継者になるには、大体、二十年くらいかかる。瑠奈です

ら、約十四年かかっている。もし、龍一がハヤトに勝てば、七年といつ異例な早さで後継者になつたこととなる。

次の日、桜木高校・・・
舞がハヤトに話かけた。

「ねえ、不知火君・・・」

「なんだ！？」

赤く染めた髪、鋭い目・・・それが、不知火 隼人だ。

「あなたも何か武道をやつているみたいね！？」

「・・・関係ないだろう・・・」

「去年まで、この学校に天神流という古武術の使い手がいたわ

「ああ！？ 灯の話では、プロのスイーパーと聞いたが・・・」

「それは、その子の師匠・・・」

「そうか、弟子がいたのか・・・」

「それで、あなたも後継者になりたくて、この街に来たのでしょ
？」

「そうだ！俺は全ての技を会得している。そして、強い！ババア
は、再び天神流を、不知火一族のモノにするため、俺や親父・・祖ジイ
父やお袋にまで技を教えた・・ジジイはババアに惚れ、婿入りした。
だが、俺が小さい時に亡くなつた・・親父やお袋は腰抜けだから、
後継者争いから身を引いた・・だが、俺は違う・・必ず俺が、後
継者になつてやる！」

「現継承者である。月形 瑞奈さんが、弟子の神威 龍一と勝負
して、勝つた方を後継者にするつて・・」

「フン、面白い！」

「明日、土曜の朝方・・時間は午前四時・・場所はこの紙に書い
てあるから・・・後、負けた者は、天神流を捨ててもうつって、お
つしゃつていたわ」

「上等だ！」

放課後・喫茶LUNA・・・

「一応、伝えてきました」

「舞ちゃん、ありがとうございました」

瑠奈が、舞にお礼を言った。店には、舞、一、四郎のいつもの三人・・・だが、龍一の姿が見えない。

「龍ちゃんは？」

「あいつは、その辺をジョギングしているわ」

ジョギングといつても、龍一がこの時に走った距離は五十キロ以上だ。

戦いは明日の朝方・・・下手に体力を使うと不利になるのは分かっているはず。

だが今の龍一には、五十キロくらいなら、たいした距離ではない。

龍一は、五十キロを走り終え、店に戻った。

「ハアハア・・・ただいま帰りました！」

少し息切れをしているが、とても五十キロを走ってきた感じには見えない。

「みんな、僕、明日に備えて、もう寝るから・・ルナさん、今日は泊めてもらいますね」

そう言って、店の奥に入っていた・・・

そして、午前四時・・・

指定の場所に、ハヤトが現れた。

龍一と瑠奈は、一時間前から待っていたようだ。

龍一もハヤトも、天神流の道着を着て、腰には刀が・・・

この戦いは、今までの戦いとは違う。龍一は、瑠奈から奥義の使用も認められている。

そして、二人の戦いが始まるうとした・・・

その時、

「間に合つた・・・」

舞、一、四郎がやつて來た。

「皆・・・！」

「天神流の人間じゃない私達が、ここに来てはいけないと思ったのですが、どうしても二人の戦いを見届けたくて・・・」

「・・ルナさん、僕からもお願ひします！」

「いいんじやない・・アンタの大切な友達なのだし・・・」

「ありがとうございます！」

「おい、早くしろ！」

「ああ・・ワリーな・・」

龍一がハヤトの前に立ち、互いに礼をし、そして、一人の戦いが始まった。

先に攻撃を仕掛けたのは、ハヤトだ。

龍一の頭上より高く跳んだ！天誅だ！

龍一はハヤトの天誅を紙一重でかわした。

だが・・・龍一の腹から血が・・・

「な、何で、龍ちゃんのお腹から血が・・・？」

「・・リュウが天誅をかわした後、ハヤトは、抜刀したのよ・・
その時、リュウは後ろに跳んだ・・だから、あの程度で済んだのよ・
・もし、リュウの反応が少しでも遅れていたなら・・死んでいたかも・・」

「そ、そんな・・・」

「思つたよりやるな・・だが、俺の編み出した抜刀術、不知火はかわせないぜ！」

「抜刀術、不知火！？」

「行くぜ！」

「（正面から突っ込んできた・・）」

ハヤトの手が刀に・・・

「（来る・・）」

龍一は、再び後ろに跳んだ。

だが、

「（フェイント！？）」

ハヤトは刀を抜かず、龍一の後ろに回った。

「死ねー！」

ハヤトが龍一の背後を取り、刀を抜こうとした。

だが・・・

バシッ！

ハヤトが刀を抜こうとした瞬間、龍一の後ろ回し蹴りが炸裂した！

「（な、何！？）」

ハヤトはそのままふつ飛んだ。

「ば、馬鹿な・・・俺の不知火が・・・」

「正面から突っ込んで、抜刀するとみせかけ、相手が本能的に避けようとした方向を読み、超スピードで相手の背後に回り抜刀する。それが、お前の編み出した抜刀術、不知火だろ？」

「くそ・・なぜ、俺の抜刀よりも、お前の蹴りの方が速いんだ・？」

「・・・お前が、一瞬ためらつたから・・・お前は、俺と同じで、今まで、真剣を持って戦つたことがない・・そうだろう？」

「・・・・・」

「だから、自分の抜刀術がどれほどの威力か知らない・・だが、最初の一撃目で、自分の剣で、人を殺す事が出来る・・それが、お前には分かつた・・そして、心の中で、人を殺したくない・・その思いが、お前の抜刀を遅らせた・・だから、俺の蹴りの方が速かつたんだ」

「なんか、いつもの龍一と違うな・・」

「そうだね・・いつもの龍一君なら、相手が強ければ強いほど、修羅になるのに・・」

「リュウは、阿の山で、肉体だけでなく精神的にも強くなつたみたいね・・・もしかしたら、私を超えたかも・・・」

「龍ちゃんが・・・瑠奈さんを超えた！？」

龍一が刀を捨てた。

「フン、素手で勝負か・・いいだろう・・」

ハヤトも刀を捨てた。

「（おそらく龍一は、龍神を使ってくる・・ならば、俺も・・・）

「

「行くぜ！ハヤト！」

二人が、同時に奥義龍神を使つた！

龍神に必要なのは、常識を超えるスピードだ・超スピードで相手の急所に攻撃する。

数秒の間にどれだけ攻撃出来るかで威力が変わる。

そして、ふつ飛んだのはハヤトだ！

龍一の方が、ハヤトより多く攻撃したのだ。

「負けを認めろ・・ハヤト・・」

「くそ・・天神流を捨てるくらいなら、死んだほうがマシだ・・・

！俺を殺せ！」

「俺は、人殺しなんかになりたくないから・・・それに、命は大切にするものだ！」

「・・・完全に俺の負けだ・・」

「ハヤト・・俺の父さんの師匠・・堀辺 正宗は、天神流を越える技を編み出そうとした。お前も天神流を越える技を編み出し、また俺と戦おうぜ・・・！それに、お前の編み出した不知火・・あれは、すごかったし・・」

「・・・フツ・・いいだろう・・」

ハヤトの顔から、笑顔が・・・

彼は立ち上がり、刀を拾つて、去つていった・・・

舞達3人も、そのまま帰宅し、龍一は瑠奈と共に店に戻つた。

この日は、天神流の後継者を決める大事な日、そのため瑠奈の店は休業となつた。

龍一がリビングで休んでいると、瑠奈は部屋からある物を持つてきた。

「これに、お前の名前を書け」

それは、天神斎から瑠奈までの、継承者の名前が書かれていた巻物

であった。

この巻物に、名前を書いた者が、継承者の証なのであらう。

龍一は、瑠奈の名前の隣に、自分の名前を書いた。

この時から、龍一は天神流の十八代目となつた。

「今日からお前が、天神流の十八代目だ！」

「はい・・・！ルナさん・・あの・・えつと・・

「どうしたの？」

「・・前にも言いましたが、僕と付き合つてください！」

「・・・・・ゴメン・・お前とは、やはり付き合えない・・

「・・・・そうですか・・」

淋しそうな顔をしている龍一を、瑠奈は優しく抱きしめた。

「リュウ・・お前の気持ちに答えられなくて・・本当にごめんね」

「・・ルナさん・・ありがとうございます・・」

瑠奈は裏の世界で生きる女・・・

龍一には、もつと、すばらしい女性と出会って、幸せになつてほしいと、心の底から思つてゐるのであらう・・・

そして、彼女には分かつていたのであらう・・あの男が生きている
といふことを・・・

第11章 伝説の悪魔

第十一章 伝説の悪魔

龍一が継承者となつてから、二ヶ月が経つた・・・

龍一は、更に強さを求めた・・・

だが、たまに、生活費を稼ぐために、瑠奈の店でアルバイトをしていた。

そして、舞、一、四郎のいつもの三人が、店にやつて來た。

「龍一、お前から借りていた漫画・・・ここに置いとくぞ!」

「あ、うん・・・」

三人は、ジュースを頼んだ。

「久々に読んだけど、面白いな、タイガーボールは・・・」

「でしょ・・・！今度は虎衛門を貸してあげるよ・・・フシギ・F・フシオ先生の漫画は、最高だよ・・・あと、ナースムーンとか、るろうのケンシロウとかもいいよ！あつ、最近、ジャッキー・リーのポリス・怒りの鉄拳のDVDを買つたから、貸してあげるよ！」

「龍ちゃん・・・ナースムーンを讀んでいるの？」

「うん・・・特に、ナースヴィーナスが好き・・・ルナさんとは全然違うけど、ああいう女性もいいね！」

三人と、楽しそうに、漫画などの話をする龍一・・・その姿を見て、瑠奈は、自分がいなくなつても大丈夫だと確信した。

もう、瑠奈が龍一に教えることは何もない・・・瑠奈は、自分がこの街にいる限り、龍一に出会いはない・・・そう思い、この街から姿を消そうとしていた。

「ヴィーナスで思い出したけど、お前のいない間、野村さんが店に來たぜ！」

「マジ！？」

「ああ・・なんか武勇伝を語つて、帰つていた・・・」

この時、野村 昇児がどうしているかは、神の身が知る・・・

彼の話題は、すぐに終わり・・・再び、漫画の話に戻つた・・・

「でも、タイガーボールが一番好き！」

「僕も、あの漫画は好きだな」

「おう！僕も・・なんといつても、孫空悟まおうぶの鶴林波は最高の技だぜ！僕も、あの技が使えたならあ・・・」

「男の子はいいね・・単純で・・あんなの漫画の技じゃない・・・
氣で相手を倒すなんて・・・大体アンタ、山嵐はどうなったの？」

「・・あれば、今・・特訓中なのだよ・・・その後は、鶴林波の特訓だ！」

「だから、あれば漫画の技・・龍ちゃんも何か言つてあげてよ

「・・鶴林波は、確かに漫画の技だけ、天神流には、氣で相手を倒す神技しんぎ一天波がある」

「龍一・・ホントかよ！？」

「ウソ！」

「ウソかよ・・・」

「当たり前じやない・・・あれば漫画の技なんだから・・・四郎アシタつ

てホント単純ね

「うるせえな」

「いや、僕が言つたウソといつのは、一天波が、正式な天神流の技じゃないということ・・・

天神流の後継者になるためには、全ての技を会得しなくてはいけない・・・だけど、その技を使つた人は、天神斎という人だけ・・・僕やルナさん・・他の継承者となつた人たちも、その技だけは、会得出来なかつた・・・天神斎自身も、一度しか使つたことがないと云う・・・あれば、神の身が使える業・・・だから、一天波の上に神技がついている

天神斎が、いつ、どこで、誰に使つたのかは、不明……天神流の伝説でも、すでに七十を超えて、天神流を次の世代に託し、死期が近いと気づいた時、ある兵と戦い、その時に、使つた……そして、天神斎はこの世を去つた……としか伝わっていない……

再び、四人が漫画などの話で盛り上がる。

そして、話疲れたため、三人は帰ることにした。

舞達はお勘定を払おうとするが、瑠奈は、三人からお勘定をもらつつもりはない。

三人は、瑠奈にお礼を言つて、店を出た。

しばらくすると、一人の男が店に入ってきた。

「いらっしゃいませ！」

龍一が丁寧に接客した。

男は、長い髪を金色に染め、冷たい瞳をしていた。

瑠奈が珍しく、怯えた表情をしている。

「・・・リュウ・・私はこの男と話しがあるから、今日はもういいよ・・・」

「は、はい・・・」

龍一はエプロンを脱ぎ、男の横を通り、そして店を出た。

「久しぶりだな・・瑠奈・・」

「やはり、生きていたか・・・凍矢！」

その男こそ、かつて、瑠奈の父と武の命を奪つた男・・・凍矢である。

「俺が今まで、どこにいたか知りたいか？」

「・・・・・」

「俺は武との戦いで、重傷を負つた・・俺の傷が癒える頃、お前は俺より強くなっている・・そう思つた。だから、それ以上の強さを手に入れるため、俺は、世界に出た！」

「世界！？」

「そうだ・・強いヤツを求めて、世界に出た・・そして、お前に勝

てるという自信がつくるのに、十年かかった・・全ては、お前を、俺のモノにするため・・

「ふざけんじやないよ・・・・私は、アンタの女になんかならな
いわ！」

「・・・帰国したのは、一ヶ月前・・その間に、お前の事は、いろいろと調べた・・アルテミス・・裏世界では有名らしいな・・それと、お前の弟子でもあり、格闘王の息子でもある・・さつきの餓鬼・・今は、アイツが、継承者らしいなあ・・破門されたが、俺は全ての技を会得している・・アイツを殺せば・・俺が、十九代目だ！」

「リュウに手を出したら・・・殺す！」

「・・・フン・・俺を殺す事が出来ないのは、お前自身が、一番よく知っているはずだ・・・まあ・・天神流の後継者に興味はない・・お前が、俺のモノになれば、それでいいんだ」

「・・・・・

「三日だけ、時間をやる・・あの餓鬼の命は、お前の返事しだい・・・おれは、阿の山で待っている・・いい返事を期待しているぞ！」

そう言って、凍矢は去つていった。

「（この街を出て行くには、ちょうどいいかも・・・）」

瑠奈がついに、この街を出る決意をした。

その頃、龍一は、公園で天神流の稽古をしていた。
その時、

「龍一君！」

一人の男が、龍一に声を掛けってきた。

「将太さん！」

そう・・その男は、昇児と同じクローン患者、野々村 将太だった。二人は、ベンチに座り語り合つた。

「久しぶりに会つたけど、君、すごく変わったね」

「ですか・・・？あつ、そうだ・・友達が入院したに時、将太さんと同じクローン病の人にお会いました」

「へー、俺の知つているヤツかな！？」

「野村 昇児さんという人です」

「知らないな・・・ショウジ！？うん・・・数年前に、ある病院で、勉強会があつたから、美奈子といった時に、修羅 生死とかいうクローン患者なら見た事がある」

「その人ですよ！」

「そうか・・・その時しか見たことないけど、変わつたヤツだよな・・・。その時は、勉強会の余興かなんか知らんけど、マイクまでして、お笑いライブをやつていたぞ！」

「僕も、一、三回会つただけなんですけど・・今は分かんないですけど、その時は、格闘小説を書いて、物語の中で格闘をやり続けて、あと、いろんな人に、クローン病を伝えたいと言つていました」

「まあ、いろんなことをやる事は、いい事だと思う・・だけど、病院で死という言葉を使ったのは、まずかったな」

二十代前半の頃の彼には、常識がなかつたのであろう・・・。だが、後から、生死ではなく、生時と名乗ればよかつた・・・と気づいたみたいだ。

確かにその方が、「今は生きる時なんだ」と、言つて、命の大切さを伝える事が出来ただろう・・・。

「将太さん、体調はどうなんですか？」

「・・・気持ち悪い話かもしれないけど・・クローン患者同士だと、当たり前のように、話しているんだけど・・腹に穴開いちゃつて、腸が飛び出できちゃつたんだよね・・まあ、最近、3回目のオペをしたんだけど・・調子悪い・・・もつ、ムカついたから、最近は、纖維のある物はやめて、あとは、ほとんど食べている

「難しい病気なんですね・・・」

「仕事も、ほとんど休んでいるから、美奈子に迷惑をかけている・

・

「そうですか・・・」

「ムチャやつても、調子のいい人は、それでいいんだけど、がんばつてやつても、悪くなる人もいるから、その苦痛を・・その・・シヨウジとかいうヤツが、ホント、世の中の人に伝えてくれると、嬉しい」

「そ、そうですね・・・」

「それに、あんまり知られていないから、地元の病院とかで、原因が分からぬとか言われて、悪くなつてから、大きな病院に行つて、やつと、クローン病と分かる人が多い・・でも、すでに、悪くなつているから、緊急手術をする人が多い・・・！」

確かに、昇児も、地元の病院では、分からなかつた・・・
そのため、彼も緊急手術となつた。

腹痛や、下痢の多い人は、最初から、大きな病院で検査した方がいいであろう。

「まあ・・・腹痛から激痛に変わつたら、オペは近いと思う！・そうならないためにも、ショウジとかいうヤツが、世間にクローン病を伝えるべきだ！」

「・・・でも、もう一年前の話ですから・・・」

「・・・そいつが伝えられなかつたら、俺がやる！」

「そ、そうですか・・・」

「まあ、瑠奈ちゃんに会いたかつたけど、腹が痛いから、帰る・・・」

「あの・・ホントに頑張つてください！」

「あつ、そういうえば君、瑠奈ちゃんに告白した？」

「しました・・・！でも、僕もふられました・・・」

「そうか・・まあ、新しい恋でもして、がんばりな・・じやあな・・・」

・

将太は、お腹を押さえながら、帰つていつた。
龍一も、帰宅する事にした。

夕方・・・

龍一は、弟の龍之介と、ゲームをして遊んでいた。
そんな時、龍一の携帯が鳴った。

瑠奈からだ！

龍一が、電話に出た。

「もしもし・・ルナさん！？」

「リュウ・・お前に会えて良かつた・・・」

「ルナさん・・・？」

「もう、私がお前に教える事は何もない・・・」

「ど、どうしたんですか？」

「私のことは忘れて、幸せになつてね・・・今まで、ありがとうございます・・・」

そう言って、彼女は、電話を切つた・・・

「も、もしもし・・・」

龍一は、瑠奈の携帯に掛けるが、つながらない・・・
瑠奈の店にもかけたが、誰も出ない・・・

龍一は、瑠奈のことが気になり、急いで店に向かつた・・・

龍一が店に着くと、瑠奈の店は閉店してあつた。

「（やはりおかしい・・まだ五時過ぎなのに・・・）」

龍一は、持っていた鍵で、店に入つた。

だが、瑠奈の姿はどこにもなかつた。

瑠奈の愛車であるフューラーリもなかつた。

だが、他の荷物は全てある。

再度、携帯に掛けるが、やはりつながらない・・・

龍一は、北斗に電話しようとしたが、プレシャスは、今ツアー中であつた。

龍一は、舞、一、四郎、さらご、トオルや秀一に電話をし、事情を話した。

しばらくして、五人が現れた。

「みんな、忙しいのに・・『メン・・舞ちゃん・・原田さんは？』
「電話したけど、つながらないの・・自宅にも行ったけど・・い
なかつたわ」

「そう・・ありがとう・・」

「龍一、分かつたぜ！瑠奈さんと、原田さんは、付き合っている
んだ！」

「四郎、何言つているのよ

「・・四郎君の言うとおりかも・・」

「龍ちゃん・・」

「でも、相手が原田さんなら・・それで・・ルナさんが幸せなら・
・」

「龍ちゃん・・一人が、本当に付き合つているかどうかは、まだ
分からないわ・・明日は、土曜・・学校も休みだし、今からみんな
で、探しに行きましょう」

「もう・・いいんだ・・原田さんと幸せになつていてる・・そう、
信じたい・・今日は、ありがとう・・みんな・・」

「龍ちゃん・・」

その後、五人は帰宅し、龍一は、店に残つた・・・

次の日の朝・・五人は、再び店にやつて來た・・・

「おい、龍一、鍵くらじしとけよ」

「あつ、四郎君・・皆・・僕、そのまま眠つてしまつたみたいだ
ね・・」

龍一は、まだ寝ぼけている感じだ。

「龍ちゃん、大変よ

「何が・・・？」

「来る途中・・一ちゃんと、一人で、原田さんの自宅に行つたら、
昨日は、友達と飲んでいて、電話に気づかなかつただけみたい・・

「それで・・・？」

「この卒業アルバムを見てよ！」

それは、原田、北斗、瑠奈達の、中学時代の卒業アルバムであった。

「わー、ルナさんの中学生時代・・初めて見る。ヤンネーだけど、やつぱ美しいなあ・・・あつ、この人が、武さんか・・」

「もう・・後でゆっくり見なさい・・それより、コイツを見てよ！」

その男の、写真を見た瞬間、龍一の目が鋭くなつた。

「コイツは・・昨日の・・そんな・・まさか・・昨日来たヤツが・

・凍矢・・・?じゃ、ルナさんは、コイツのところに!?」

「原田さんからの伝言よ・・凍矢には手を出すな!と言つていた

わ

「手を出すな・・か・・・そうだよな・・俺では勝てないから、ルナさんは・・・」

「龍ちゃん・・・」

「俺は出来が悪いからな・・だから・・俺にはまだ、ルナさんが必要だ!」

「そうだぜ!龍一!」

「今から僕たちも、瑠奈さんのところに行こう!」

「トオル、一君・・・ありがとう・・」

「でも、龍ちゃん・・瑠奈さんが、今どこにいるのか、分からな

いじやない

「・・おそらく、阿の山・・そこそこになるとと思つ・・ん・・・?誰か来た!」

龍一達は、店に侵入者が入つてきた事に気づいた。

「泥棒かしら・・・?」

「俺は、ちゃんと、鍵を閉めたぜ!」

「ここに来る!・・・」

ついに侵入者は、龍一達のいるリビングに現れた!

金色の髪・・蒼い瞳・・・外国人の男だ。

「が、外人!?」

「龍ちゃんの知り合い?」

「いや・・・こういう時は、秀一さんに任せよつ」と、外人は、

「どいつが、神威 龍一だ？」

と日本語で話してきた。

「・・俺だ・・・・お前は、何者だ？」

「凍矢様の影だ！」

「凍矢の影！？そんなのがいるのか・・それで、俺に何か用か？」

「お前は、凍矢様と、月形 瑞奈という女との、結婚を邪魔する気だろ？？」

「当たり前だ！」

「二人の結婚を、邪魔するヤツは、殺して来いと命令されている

「龍ちゃん・・・コイツ強いわよ」

「ああ・・でも・・今の、俺の敵じゃない！」

龍一は、構えた。

「行くぜ！影やろ？！」

二人が同時に、回し蹴りを・・・

バシッ！

だが、龍一の方が、速かつた。

「（バ、バカな・・俺の蹴りより速いだと・・・）」

男は、再び構えたが、龍一の鋭い目に恐怖を感じ始めた。

「まだやるか？」

「・・ま、待て・・俺達は、凍矢様・・いや、凍矢を憎んでいるんだ・・・」

「俺達！？他にもいるのか？」

「ああ・・あの男と戦つて、敗れたら、死ぬか・・あの男の影になるしかない・・そのためには、名前、国、そして、家族までも、捨てなければならない・・お前が、あの男を倒してくれれば、俺は自由になれる」

「・・ルナさんは、阿の山にいるのか？」

「ああ・・だが、あの男に負ければ、お前も影になるが、死ぬかのどっちかだ・・」

「俺が勝つ！」

「オ・・・OK・・・! どのみち、任務を果たせなかつた俺は、殺される・・俺のためにも、勝つてくれ・・それまで、どこかに、身を隠している」

男はそう言つて、去つていつた。

「みんな・・この戦いは、かなり危険な戦いになる。だから、俺一人で行つて来る」

「龍ちゃん・・私たち、友達よ・・それに、瑠奈さんは、私にとつても、大切な人・・・絶対に、私も行くからね！」

「舞ちゃん・・」

「龍一・・俺は、お前の力になりたい・・だから、俺も行く!」

「四郎君・・」

「拳法家として、僕も戦うよ!」

「秀一さん・・」

「僕だって、新戦会の四天王の一人・・・破門覚悟で、僕も行く!

「!

「一君・・・」

「龍一・・・摩利支天は、武士のものふ守護神だぜ・・・お前の敵は、俺の敵なんだよ!」

「トオル・・」

龍一の目から涙が流れた。

「みんな・・・ありがとう! 俺には、もの凄く強い、仲間がいることを忘れていた・・・!」

この一年で、強くなつたのは、龍一だけじゃない。

ここに、集まつた者達は、皆、常識を超える強さを手に入れた格闘家達だ。

「トオル・・お前の、クラウンで行こ!」

「ああ・・いいぜ!」

「僕は、自分の単車に乗つていくよ」

「秀一さん・・何に乗つているんですか?」

「フォアだよ」

「へー、フォアか・・よし、俺も、久々に単車に乗つていくか・・

「龍ちゃん・・単車の免許持つていたの?」

「持つてないよ・・無免だよ・・トオル、俺が、阿の山に行く前に、預けたよな・・鍵返してくれ」

「ああ・・お前がいない間、ちゃんと綺麗にしどいたぜ!・

「さすが・・・!」

「龍一は、何乗つているんだ?」

「ルナさんから、受け継いだ・・ニンジャだよ!あつ、俺、気合を入れたいから・・・一時間後に、また、ここに集合しよつ

「龍ちゃん・・何のんきな事を言つてているの・・

「ゴメン・・気合いを入れたいんだ!」

「よし、一時間後に、また、ここに集合だ!・龍一・・後で、お前の家に行くよ」

「別にいいよ・・俺が歩いて、お前の家に行くから・・

「遠慮するな」

「・・そうか・・じゃあ、頼む・・」

「うして、龍一達は、一度帰宅することにした。これから始まる戦いのために・・・

それから、一時間半・・・

龍一は、金髪に染め、「修羅参上」の特攻服を着て、精神を集中していた。

「臨、兵、闘、者、階、陣、列、在、前!」

そして、真剣を手に取り、外に出た。

龍一が、外に出ると、そこには、特攻服を着て、タバコを銜えたトルの姿があった。

「待たせたな」

「もういいんだな」

トオルは、三十分前から、龍一の家の前に車を止め、彼が出てくるのを、黙つて、待つていたのだ。

二人は、車に乗り、龍一の単車を取りに行くため、トオルは、再び、自分の家に戻った。

これが、二人の友情なのであるつ。

トオルの家に着くと、龍一は、単車にまたがり、エンジンを掛けた。

そして、二人は、瑠奈の店に向かつた。

全ては、大切な人を取り戻すために・・・

第11章 伝説の悪魔（後書き）

次回で、最後です。外伝の天神流外伝もヨロシク！
この外伝で、天神斎が一天波を使った相手が分かるかも！？

最終章 修羅の者たち

神威 龍一・・・小学四年生まで、格闘王の息子なのに、弱という理由でいじめられていたが、瑠奈に助けられ、弟子となる。中学時代は、喧嘩屋修羅と名乗り、糺余曲折を経て、天神流の継承者となる。

そして、今、大切な人を取り戻すため、仲間と共に、伝説の悪魔との戦いが、始まるつとしていた・・・

龍一と、トオルが店に着くと、すでに、他の四人は、店の前で、二人を待っていた。

秀一は、Tシャツにジーパン、舞と一は、空手の道着、四郎も柔道の道着を着て來た。

「時間がない・・急ごつ！」

そう言つて、秀一は単車にまたがり、エンジンを掛けた。

舞と一は、トオルの車の後ろに乗り、四郎は、助手席に乗つた。

「ん・・・？お、おい、これ、龍一の刀じゃないか！？」

「そうだ、これから始まるのは、殺し合いだ！怖いヤツは、今のうちに、降りろ！」

「私は、降りません！」

「僕も、降りる気ないです！」

「・・お、俺だつて・・」

「フツ・・ところで龍一、その阿の山つてどこにあるんだ

「ついてくれば分かるよ・・」

そう言って、龍一達は、阿の山に向かった。

阿の山・・・天正伊賀の乱で、生き延びた天神斎が、傷を癒し、二十年以上こもって、天神流を編み出し、その後も、天神流の者たちの、修行の場となつた。

そして、武と凍矢の死闘の場ともなつた。

だが、その山が、どこにあるのかは、天神流の者たちしか知らない。阿の山という名前も、天神流の者たちの間で、そう呼ばれているだけ・・・

阿の山・・・それは、天神流の者たちだけが知る謎の山・・・

そして、その阿の山では・・・

「やつと来たか・・・」

瑠奈が、阿の山に辿り着いた。

「・・・凍矢、山に隠れている奴らは、何者だ?」

「気にするな・・・ただのパシリだ」

「パシリ!?まあ、いいわ・・・ここに来る前に、父と母、武の眠る墓に寄ってきた。そして、三人に、凍矢と結婚すると、伝えてきたわ」

「ほう・・・それでは、俺の女になるんだな」

「ああ・・・私みたいな女は、お前のようなヤツが、お似合いなかもしれない・・・」

「そうだ。お前も、俺と同じ人殺し・・・人殺しの女には、人殺しの男がふさわしい」

「・・・お前の女になるのだから、リュウには、絶対に手を出さないでよ」

「フン・・・お前を手に入れた今、あんな餓鬼を相手にしてもしょうがない・・・だが、アイツが、お前を取り戻しに来た時は、全力で潰す!」

「・・・その時は、私が説得するわ」

その頃、龍一達は、阿の山に向かっていた。

その時、向こうから、一台の単車が、逆走してきた。

ギヤバババーン！

龍一が、単車を止めた！

秀一やトオルも止まつた。

「おい、龍一！喧嘩なんかしている場合じゃないぞ！」

「・・インパルスか・・・」

そう言つて、龍一は、微笑んだ。

龍一には、向こうから来る男が、誰なのが分かつていて。

そして、トオル達にも分かつた・・その男が誰なのが・・・

ギヤバババーン！

インパルスに乗つた男も、単車を止めた。

「おい、どこに行くんだ？そんなカツコウで・・・」

「・・喧嘩しに行くのさ・・・お前も来るか・・・？虎次郎・・・

！」

インパルスに乗つた男は、あの大河 虎次郎であった。

龍一は、虎次郎に事情を話した。

だが、虎次郎は、龍一や瑠奈のために動いたりしない。でも、龍一には、分かつていた。

この男も修羅・・・

相手が、強ければ、強いほど、戦いたくなる男だということを・・・

「フン・・あの女がどうなるつと、知つた事じゃないが、ソイツが強いなら、俺が、ぶつ殺す！」

龍一の予想どおりになつた。

その時、

ブッブー！

後ろから来た自動車が、クラクションを鳴らしてきた。

「お前ら、ジャマだろう！はよ、どかんかい！」

三十代くらいの男性が、車から顔を出し、怒鳴ってきた。

虎次郎が、ガンをつけ、男を威圧した。

「（な、何だよ・・・）」「

「おい、龍一！後ろがつまっている・・急げ！」

「ああ・・・行くぜ！虎次郎！」

「フン・・」

こうして、虎次郎という心強い味方が出来た。
虎次郎が、龍一達と違うところは他にもある。

龍一は、天神流忍術・・・

舞と一は、新戦会空手・・・

四郎は、柔道・・・

秀一は、少林寺拳法・・・

トオルは、ボクシング・・・

だが、虎次郎には、格闘技の経験はない。

彼は、ただ一人、修羅場をくぐって、強くなつた男だ。

そして、数時間後・・・

もはや、車が通れる道ではなかつた。

ギヤバババーン！

龍一達が止まつた。

「ルナさんのフーラーリだ・・これで、間違になく、阿の山にいることが分かつた」

「じゃあ・・この辺が、阿の山か？」

「ああ・・」

「龍ちゃん・・一つ聞くけど、この前とか、ビリヤって、ここにい
で来たの？」

「歩いたり、走つたりしてきた。それも修行の一つや・・・」

「・・そ、そう・・」

「とにかく、ここからは、歩いていい」

龍一達は、単車や車を置いて歩き始めた。

しばらくすると、龍一が止まった。

「（一、二、三・・・十四人か・・・）隠れてないで、出て来い！」

その時、龍一達に向かって、手裏剣が飛んできた！

だが、それを全部、龍一が刀ではね返した！

「いいかげんに、出てきたらどうだ！」

「さすが、天神流の継承者・・・」

そう言つて、ついに、凍矢の影の者たちが現れた！

影の者たちは、黒い忍びの装束に、覆面をしていた。

「覆面をしているから、顔が分からんが、どうせ、ブサイクな顔をしているんだろ！？」

トオルが、挑発をした。

「ここから先は、通さないわ」

「女・・・？なんだ！？女もいるのか？」

「女は私だけ・・でも、戦いに男も女も関係ないわ」

「俺達は、ルナさんのところに行きたいんだ・・すまないが、退いてくれ」

「それは、出来ないわ。ここを通すと言わわれている」

「凍矢を倒せば、アンタらは、自由になれるんだろう・・」

「私は、凍矢様のためなら、命をも捨てられるわ」

「命をも捨てられる・・・？お前らは、アイツに負けて、命欲しさに、アイツの影になつたんだろう」

トオルが、再び挑発する。

「他の者は、そうかもしけないが、私は違う！」

「そうか・・どうやら、戦いは避けられないみたいだな」

他の影の者たちも、凍矢の強さと恐怖を知つてゐる。凍矢の命令に従わなければ、殺される。自分達が生きるためにも、龍一達を始末しなければならぬ。

そして、ついに、影の者たちと、龍一達の戦いが始まった！

その頃、瑠奈と、凍矢は・・・

「フン・・始まつたか・・」

「凍矢、お願ひ・・あいつらには、帰るよつに言ひから、手を出さないで・・」

「さつき、言つたはずだ。お前を、連れ戻しに来たら、ぶつ潰すと・・それに、あの餓鬼の強さは、本物だ！ アイツを、俺のパシリにしてやる！ それが、出来ない時は、殺してやる！」

「凍矢・・リュウたちに、手を出すというのなら、私は、アルテミスとして、お前を殺す・・・！ 立て、凍矢！」

瑠奈が、ついに構えた。

「俺が、優しくしてやれば・・調子に乗りやがつて・・この馬鹿女が・・・！」

凍矢も立ち上がり、そして構えた。

先に攻撃を仕掛けたのは瑠奈だ。

瑠奈が跳んだ！ 天誅だ！

瑠奈の天誅が、炸裂した！

更に、土方との戦いの時のように、もう片方の足で、凍矢を蹴り飛ばした。

だが、凍矢は、吹つ飛んだが、倒れなかつた。

更に、攻撃は続く、今度は、双龍、そして、奥義龍神を使った。

再び、凍矢がふつ飛んだ！

それでも、凍矢は倒れない。

「どうした瑠奈・・お前の力は、その程度か？」

再び、瑠奈が龍神を・・・

だが、凍矢も龍神を使つてきた。

今度は、瑠奈が、ふつ飛んだ。

瑠奈は倒れたが、すぐに立ち上がつた。

今の瑠奈では勝てない。それは、瑠奈自身が、一番分かつている。

だが、それでも、龍一を守るため、再び構えた。

その頃、龍一達も、影の者たちと戦っていた。

影の者たちも、凍矢から、天神流を叩き込まれていた。

しかも、相手は、十四人・・・

だが、龍一達も、この一年でかなり強くなっている。

龍一達は、血だらけになりながらも、七人まで倒した。

残りは七人・・・

これで、七対七の戦いになつた。

激しい戦いが続く・・・

そして、ついに、あと一人・・・

凍矢のためなら、命をも捨てられると言つた女だけとなつた。

龍一が関節を決めた。雷鳴だ！

関節を決め、投げ、そして、相手の喉に、肘鉄が炸裂した！

「ゴホッ・・・

「ハアハア・・・悪いな・・俺達は、どうしても、ルナさんのところに行きたいんだ。」

「龍ちゃん、急いで」

龍一達は、瑠奈と凍矢のいる場所に向かつた。

「ま、待て・・・」

女は、フラフラになりながらも、龍一達を追つた。

龍一達が、瑠奈のところに着くと、そこには、今まで見たこともない、血だらけになつた瑠奈の姿があつた。

「ルナさん！」

「リュウ・・・みんなを連れて逃げな・・・

「俺のパシリ共を倒すとは・・ますますお前を、俺の影にしたくなつた」

「ああ！？ ふざけるな！ お前は、俺が倒す！」

「倒す？ 面白い・・やつてみろ、ゴゾー！」

「（うつ・・な、何だ！？ アイツの凍りついた瞳は・・・）

龍一達は、昔の瑠奈のよう、凍矢の凍りついた瞳を見て、動けな

くなつた。

「どうした？俺が怖いか？」

その時、

「凍矢様！」

フラフラになりながらも、あの影の女が現れた。

「フン・・役立たずが・・よく俺の前に顔を出せたな・・お前らは、後で始末してやる」

「凍矢様に殺されるなら・・悔いはありません」

「凍矢！」

瑠奈が再び、凍矢に攻撃を仕掛けた。

だが、凍矢の方が強い。

凍矢の容赦のない攻撃が・・・

「（俺は、何しにここに来たんだ？大切な人を取り戻すために来たんだろう・・・）」

凍矢の龍神で再び、瑠奈はふつ飛んだ。

瑠奈は、倒れたが、再び立ち上がり、構えた。

「クソ、俺の龍神を、一度も喰らつて、まだ、立ち上がれるとは・・だが、次こそ・・・」

その時、

「凍矢！俺の大切な人を・・絶対にゆるさねえ！」

龍一が、凍矢の恐怖に勝ち、そして、構えた。

「リュウ・・・」

「ほう・・さすがだな・・それでこそ、天神流の十八代目だ」

「（ハヤト・・お前の技を借りるぞ！）」

龍一は、ハヤトが編み出した抜刀術、不知火をする気だ。

「（・・・殺す、殺さない、などという雑念は捨てろ・・何も考えぬ事・・無念無想・・・）」

龍一が、正面から突っ込んだ！

「（な、何だ！？）」

龍一が、刀に手を・・・

「（そうか・・抜刀術か・・・）」

凍矢は、本能的に避けようと、右後ろに跳んだ。

龍一は、凍矢の動きを読み、そして、凍矢の背後を取つた。

「（くそ餓鬼が・・・！）」

龍一が、抜刀しようとした。

だが、凍矢は、刀の柄を左手で鞘に押さえ込んだ。
そして、凍矢の後ろ回し蹴りが炸裂した！

バシッ！

龍一はふつ飛び、そのまま倒れた。

「コゾー、俺は、世界を相手にしてきたんだ。お前らとは、ぐぐ
つた修羅場が違うんだ」

「（ダ、ダメだ・・勝てない・・）」

龍一に、再び恐怖が襲う・・・

舞達も恐怖で動けない・・・

だが、もう一人、凍矢の恐怖に勝つたヤツがいた。
虎次郎だ！

虎次郎は、拳を強く握り、凍矢に殴りかかつた。

だが、勝てるはずがない・・・

それでも、虎次郎は、戦つた・・・

それを見ていた舞、一、四郎、秀一、トオルも、恐怖に勝ち、凍矢
に立ち向かつた。

「クズ共が・・・！」

だが、次々に、龍一の仲間が倒れしていく・・・

「みんな・・・！」

「リュウ・・」

「ルナさん・・・！大丈夫ですか？」

「私はいいから・・お前は、アイツらを連れて、ここから逃げる
のよ」

「そ、それは出来ません！」

「これは命令よ」

「俺は・・出来の悪い弟子です・・だから、俺には、ルナさんが必要なんです！」

龍一が立ち上がった。

「・・・アイツに勝てる方法が分かりなした・・神技一天波・・」

神技一天波・・・天神斎しか使えなかつた幻の技・・・

「・・・リュウ・・そうね・・お前なら出来るかも・・・」

龍一は、右の拳を強く握り、気を一点に集中し始めた。

「リュウなら出来ると、信じるわ！」

そう言って、瑠奈も再び凍矢に立ち向かつた。

「（あの餓鬼、何をする気だ・・・？まさか・・あの技を・・・？）」

凍矢がそう思つた瞬間、瑠奈の天誅が炸裂！

「クソアマー！」

「みんな、下がつていなさい」

「瑠奈さん・・・」

「リュウが、気を集中している間、お前の相手は、私がするわ

「フン・・あの餓鬼に、あの技が出来るわけがない」

二人が、三度目の龍神を使つた。

今度は、凍矢がふつ飛び、倒れた。

「凍矢様・・・！私も・・・」

影の女は、凍矢を助けようとしたが、

「クズの力などいらん！」

そう言って、凍矢は、立ち上がつた。激しい戦いが続く・・・

「（まさか、この俺が負ける！？）」

凍矢も瑠奈も、限界を超えていた。

「クソアマー、これで死ね！」

凍矢が、四度目の龍神を使おうとした。

だが、

「な、何だ？この気は？」

凍矢の動きが止まった。

「あのコゾーが・・・？まさか・・・？」

凍矢が、龍一に恐怖を感じた。

「凍矢の怯えた顔・・やつと見られたわ・・リュウ・・・・今よ！」

瑠奈が、その場を離れた。

「う、動けん・・・！」

今度は、凍矢自身が、金縛りにかかりた。

影の女は、凍矢を守りに行こうとするが、彼女の体も、思うように動かない。

「くたばれー！凍矢！』

ついに、龍一が一天波を放つた！

神技一天波・・・全身の気を一点に集中し、その時に放たれた衝撃波で、相手に触れることなく、相手の全身の骨を砕き、確実に相手を殺す！まさに神の業だ！

凍矢は、吹っ飛び、そのまま、動くことはなかつた。

「凍矢様！」

影の女が、泣き叫んだ。

「龍一、殺つたのか！？」

トオルが叫んだ。

龍一は、そのまま、後ろに倒れそうになつたが、瑠奈が抱きとめた。

「リュウ！」

「・・ルナさん・・人を殺すつて、イヤなことですね・・俺は、その罪を背負つて、生きていかなければならぬ・・ルナさんも、この苦しみを、ずっと背負つて、生きてきたんですね・・俺もこれから、一人で、この苦しみを背負つて、生きていくのか・・」

「リュウ・・お前一人、苦しませたりはしない・・これからは、私と二人で、その苦しみを背負つて、一緒に、生きていく

「ルナさん・・・」

「リュウ・・愛しているわ！」

「ル、ルナさん・・・！お、俺も・・俺も愛しています・・」

二人は、そのまま熱いキスをした。

「龍ちゃん・・良かつたね」

その時、影の女が覆面を取つた。

黒い髪に、ショートヘア・・・

顔は、瑠奈に負けないくらい、綺麗な顔立ちをしている。

「へー、すげー美人じやん・・・！」

四郎の心が、一瞬、ときめいた。

「もう、私は、凍矢様の影じやない・・私の名は、春麗、生まれは、中国北京・・」

「春麗か・・いい名前だ」

「四郎、どうしたの？」

「な、なんでもない・・」

「私は、他の影の者たちと違つて、凍矢様と戦つたことはない・・

・七年前のある日、私は、三人組の男性に、犯されそうになつた・・

その時、私を、助けてくださつたのが、凍矢様・・

「七年前！？俺が、ルナさんに助けられた時だ」

「その時、凍矢様は、お前を助けたわけじゃない、ただ、イライラしていたから、腹いせに、虫を殺しただけだ・・・そうおつしゃつていたわ。でも、私にとつては、命の恩人、だから、凍矢様の影となり、凍矢様に恩返しがしたかつた・・でも、結局、なんの役にも立てなかつた・・・」

春麗は、そのまま、凍矢の亡骸を抱いて、崖の方に向かつた。

「凍矢様・・私も、そちらの世界に行きます。今度こそ、凍矢様の役に立てる女になります」

春麗は、凍矢を抱いたまま、崖から飛び降りようとした・・・

その時、四郎が、

「待てー！」

と叫んだ！

「お前が、本当に、凍矢のことを思つなら、お前は、凍矢の分まで生きるべきだ！」

春麗の足が止まつた。

「お前にとつて、俺達は敵かもしない・・けど・・俺は・・お前に・・・一目惚れした・・お前は、美人だし・・だけど、それだけじゃない・・お前が、凍矢を思う純粋な心に・・俺は・・俺は惚れただんだ！」

「・・・・・！」

春麗の心が揺れ動いた・・・

「べ、別に、付き合つてくれとは、言わない・・ただ、生きてほしい・・・」

春麗の目から、涙が流れた・・・

「・・フツ・・敵か・・そうだな。お前達は、凍矢様の・・私の敵・・凍矢様の仇を討つためにも、私は生きる！」

彼女は死ぬ事より、生きる事を選んだ。

そして、凍矢を抱いたまま、山を降りていった・・・

人は、生まれ、そして、いつか死んでいく・・・
だから人は、今を、一生懸命、生きるのだろう・・・

「四郎君・・」
「瑠奈さん・・みんな、いいんだ・・彼女が生きていてくれれば・・さあ、帰ろうぜ！」

山を降りた時、すでに、他の影の者たちの姿はなかつた・・・
そして、七年の時が流れた・・・

龍一は、プロの格闘家となつていた。

彼は、七年の間に、表だけでなく、裏で、生と死を懸けた戦いをし、

全て、勝利している。

もちろん、相手を殺したりはしない。

彼が殺したのは、凍矢だけ・・・

一天波を使ったのも、あの時だけ・・・

また、六年前に瑠奈と結婚して、五年前に、娘も生まれている。名前は、聖華・・・

龍一は、めったに、弟子を取らない。

現在、彼の弟子は、娘、聖華と、弟の龍之介、そして、大空 達也だけである。

かつて、南が、命を犠牲にしてまで、助けた時の子供・・・それが、大空 達也である。

達也は、南の分まで、一生懸命生きたい・・・その熱意に応えるため、龍一は、達也を弟子した。

瑠奈は結婚後、喫茶店は、経営しているが、裏世界は引退した。また、七年前に、メジャーデビューしたプレシャスの、ニューアルバム「レ・ジェンド」の、最後の曲に、龍一はピアノ、瑠奈はヴァイオリンとして参加している。

曲名は、「R e s t I n P e a c e」意味は、安らかに、眠りたまえ・・・

北斗の妹、南のために、作られた曲である。

また、龍一や瑠奈と共に、凍矢たちと戦った修羅の者たちも、それぞれの道を歩んでいる。

新戦会の四天王の一人、沖田 一は、舞と、四年前に結婚し、後藤家に婿入りした。

彼は、沖田 一から、後藤 一となつた。

二年前には、息子も生まれた。名前は、後藤 誠・・・

また、新戦会は、東京と大阪に、支部を作つた。

東京には、土方が、大阪には、永倉と原田が任された。

四郎は、実家が、中華料理店を経営しているので、彼は、店を継ぐために、中華料理の修業をしている。

そして、最近、この中華料理店に、一人の中国人女性が、お客様として現れる。

女性の名は、春麗・・・凍矢の影だつた女・・・

二人は、付き合っていないが、それに近い存在・・・

秀一は、大学を卒業後、北斗や南の父、杉原グループの会長に見込まれ、養子となっている。彼が後に、杉原グループを背負っていくのであるう・・・

また、結婚はしていないが、恵とは、今でも付き合っているようだ。

トオルは、プロボクサーとなり、異種格闘技戦で、龍一と再び戦うが、敗北・・・

また、彼は、現在、アリスのリーダー麻奈美と付き合っている。アリスも、三年前にはメジャー・デビューして、活躍している。

虎次郎は、現在も無職で、相変わらず、強いヤツを求めて、喧嘩をしている。

龍一とは、裏で、生と死を懸けた戦いをするが、ついに、龍一が勝利し、虎次郎は、敗北した。

神威 龍一・・・かつて、いじめられていた少年だが、瑠奈の弟子となり、この時から、彼の戦いは始まった・・・
そして、これからも、戦い続けるだろう・・・
強いヤツを求めて・・・

最終章 修羅の者たち（後書き）

物語はいいでおしまいです。今までありがとうございました！
最後に、この物語の裏話を書いたので良かったら読んでください（

＾＾

武勇伝とは、作り話の中に、僕の真実を描いた格闘小説である。また、この物語で、僕が伝えたい事は、「クローン病」、「イジメ」、「命の大切さ」を伝えたいと思っています。

ここでは、武勇伝の、主な登場人物の裏話を書いてみました。

神威 龍一・・・この物語の主人公。

彼は、いじめられていたが、瑠奈の弟子となり、天神流十八代目となるのだが、最初は、鳥山先生の「ドラゴンボール」やジャッキー・チェンやブルース・リーが好きだから、彼を拳法家にしようと思つていました。だが、彼には、僕の出来なかつた事をやつてもらつたくて、忍術家にしました。

僕が小さい頃、ショー・コスギさんの「忍者映画」がヒットし、世界中に、忍者ブームが起きました。

また、僕が小学校の低学年の頃に、「世界忍者戦ジライヤ」という特撮番組に、戸隠流三十四代目宗家、初見 良昭先生が出てらして、僕は、初見先生の弟子になりたい・・そう思いましたが、本部が千葉にあるため、まだ、小さい僕には、千葉は遠すぎました。結局、忍術は学べなかつた。だから、龍一を忍術家にしたのです。神威 龍一の名は、僕の憧れのウォーカリスト、河村 隆一さんとガクトさん（神威 楽斗さん）を合体させました。（ただし、隆を龍と書くことにしました）

容姿を、女の子のような感じにしたのは、和月先生の「るろうに剣心」の剣心のようなキャラが好きだからです。

また、誕生日は、河村さんと同じ五月二十日である。

武勇伝では、正確な、身長や体重などの設定はないです。まあ、龍一の身長は、160ちょい、体重は50もない。

瑠奈は、龍一より背が高い。170くらいで、体重は彼女も50もない。

月形 瑠奈・・・龍一の師匠で、プロのスイーパー、後に龍一の妻となるのだが、実は、最初は、瑠奈は、凍矢との戦いで戦死し、龍一は、その後を追う事を考えるが、瑠奈と武のジャマをしてはいけない・・・そう思い彼は、生きる道を選んだ。と、最初は考えていた。だが、一人を、幸せにしたくて、結婚させてあげました。

瑠奈は、本当に僕の理想の女性です。実際に、こんなに凄い女性はないかと思うが・・・

作中に、瑠奈が、龍一を呼ぶ時に「リュウ」とカタカナで書いたり、逆に龍一が、瑠奈を呼ぶ時に「ルナさん」と同じようにカタカナで書いたりしたのは、二人の関係は、師弟関係だけじゃない・・・そう思つてカタカナにしました。

瑠奈という名は、ルナシーが好きだから瑠奈にしました。

誕生日は、ガクトさんと同じ七月四日。また、武と凍矢も同じ。つまり、瑠奈と武と凍矢は、同じ年の同じ月日に生まれている。

後藤 舞・・・龍一と同じ高校に通う空手少女である。

新戦会の人間は、新撰組がモデルとなつていて、舞は、別にモデルになつた人物はいません。頭の中で、舞という名が浮かんで、舞になりました。

沖田 一・・・新戦会空手、四天王の一人で、後に舞と結婚し、後藤家に婿入りしている。彼は、僕が一番好きな、一番隊組長、沖田総司と三番隊組長、斎藤一を合体させているが、主に沖田をモチーフにしている。

嘉納 四郎・・・柔道の経験者で、少しヤンチャボーキだが、意外と仲間思いである。彼の名は、あの嘉納 治五郎と、姿三四郎のモ

デルにもなった西郷 四郎を合体させました。

岡村 徹・・・龍一の中学生からの親友で、魔利支天の特攻隊長で、ボクシングをやっている。

ちなみに、魔利支天とは、武士の守護神である。もののかぶトオルも舞と同じで、頭の中でその名が浮かんだ。

小林 秀一・・・ルックスも良く、頭もいいし、スポーツ万能で、少林寺拳法を、小野寺から学んでいる。彼の名前は、少林寺と小林が似ているから、名字は小林にし、下の名は、秀一しかないとthoughtから。後に、北斗の代わりに、杉原グループの、会長の後継者になるため、会長の養子にした。

大河 虎次郎・・・龍一のライバル。鳥山先生の「ドラゴンボール」の悟空とベジータみたいな感じ。髪を逆立てているが、これは、昔の河村 隆一さんがモデルです。（あそこまで髪は長くないし、メイクもしていない）

名前は、龍ときたら虎だと思って、苗字も大河タイガまた、こじりうとは、普通は小次郎と書くが、彼は虎次郎と書く。

武田 武・・・瑠奈の元恋人だが、凍矢との戦いで戦死。とにかく、武術の達人をアピールしたかったから、武という字を使いました。そのため、上から読んでも、下から読んでも、武田 武！

水谷 凍矢・・・瑠奈を、自分のモノにしようとしている男。冷酷な性格から、凍矢の名前が浮かんだ。また、彼が作った族のチーム名は、百鬼だが、その前に考えたのが、瑠奈の苦乃一に対抗して、死乃火という名前でした。でも、百鬼のほうが気に入つたので、百鬼にしました。

原田 光介・・・元魔利支天の人間で、新戦会空手の四天王の一人。新撰組の十番隊組長、原田 左之助が、モチーフである。また、左ノ助の助と字が違うのは、僕のミスだが、逆に、こっちの介のほうが気に入つたから、そのままにしました。

永倉 新一・・・新戦会空手の四天王の一人だが、あまり活躍する事がなかつた。新撰組の一番隊組長、永倉 新八がモチーフである。土方 歳夫・・・新戦会空手の四天王の一人で、師範である。新撰組の副長

土方 歳三がモチーフである。新撰組の土方も鬼とよばれているから、歳夫も鬼と呼ぶにふさわしい人物にした。また、音楽をやつていたのは、トシと呼ばれている事から、×のトシさんを思い出して、音楽をやつていた人物にした。

後藤 勇・・・新戦会空手の館長で、舞の父親。新撰組の局長、近藤 勇がモチーフである。

僕が、新撰組に興味を持つたのは、和月先生の「るろうに剣心」と、川原先生の「修羅の刻」を読んでからである。

杉原 北斗・・・元魔利支天の三代目で、プレシャスのヴォーカルとギターを担当。ルナシーの、スギゾウさんがモチーフ。苗字はスギゾウさんと同じで、下の名は北斗と、頭の中で浮かんだからです。スギゾウさんは、ギターとヴァイオリンを担当。ヴァイオリンは、北斗の代わりに短期間だが、瑠奈をメンバーにして、瑠奈がヴァイオリンを担当することにしました。

また、ルナシーの曲に「プレシャス」という曲があります。でも、僕自身は、「ロージア」が一番好きです。あと、ルナシーと同じで、リーダーがない。

ラン・・・元摩利支天の特攻隊長で、プレシャスのギター担当。本名は、メンバーと、瑠奈と原田、武と凍矢しか知らない。ルナシーのイノランさんを、かなりヤンチャにしたのがランである。ランという名は、イノランさんと同じで、小学校からのあだ名である。

ジュンジ・・・元百鬼のメンバーの一人で、プレシャスでは、ベスを担当。本名は、小野 純一で、ルナシーのJさんがモチーフ。ルナシーは、元々Jさんとイノランさんが高校の頃出来たバンドで、真矢さんとスギゾウさんは、ピノキオというバンドについて、このピノキオが解散したときに、真矢さんとスギゾウさんが加入し、最後にリュウイチさんが加入しているが、プレシャスは、北斗とランが、敵だったジュンジとユウヤを誘つて、結成されたバンド。

確かに最初は、ランとジュンジ、北斗とユウヤのコンビにしようと思いましたが、その辺は逆に変えてみました。またスギゾウさんと、真矢さんは一つ上だが、北斗たちは、皆同じ年である。

ユウヤ・・・元百鬼のメンバーの一人で、プレシャスでは、ドラムを担当。本名は、山田 裕也。ルナシーの真矢さんがモチーフとなつていて。真矢さんと同じように、右腕に刺青を入れている。

天神斎・・・天正伊賀の乱で、生き延びた後、天神流を編み出す。天神流は、僕が昔、弟と遊びで（僕は本気だった）明光天神流とう、新たな格闘技を編み出そうと考えてつけた流儀名です。

最初は、一人の忍びが、抜け忍となつた時、追つ手から、身を守るために編み出したという設定でしたが、抜け忍となつた者が、あんな凄い技を編み出すのはなあ・・・と考えに考えて、天正伊賀の乱で生き延びた忍びが、己を強くするために、編み出したということにしました。また、明光をはずしたのは、影に生きた武術だからです。

また、天正伊賀の乱がなぜ起きたかを、調べてみるのもいいかも？

（ホントは説明するのが、めんどくさいだけ……）

螢・・・幕末に生きた天神流の十一代目。実は、天神流と沖田 総司を戦わせたくて、そのために考えた人物。また、河上 彦斎を登場させたのは、「るろうに剣心」の剣心のモデルになつた人だし、かれの我流、不知火流という流儀名が気に入つたからです。そのため、河上が斬首された後に、不知火 螢と名乗つてもらいました。ホントは、土方とも戦わせたかったが、川原先生の「修羅の刻」と同じになつてしまふから、やめました。（ホントは、大好きな漫画だからマネしようかなあ）と思いましたが・・・）まあ、武勇伝では、歳三の変わりに、歳夫と瑠奈が戦つてゐる。

不知火 彦斎・・・螢の子供。父親は、河上 彦斎かどうかは、私にも分かりません（笑）天神流の十三代目で、天神流の定めを変えた人。幕末時代を描くために、必要となつた男。天神流は一子相伝で、幕末までは、継承者になれなかつた者は、我が子でも殺すのが定め。だが、彦斎は三人の子供がいた。十四代目となつたのは、不知火 幻次。だが、彦斎は他の子供を殺す事が出来なかつた。そのため、天神流の定めを変えた。

不知火 灯・・・彼女は、幻次の娘だが、後継者にはなれなかつた。この時、継承者となつたのが、瑠奈の祖父、月形 十蔵である。（瑠奈の祖父の名は、今思いついた）灯の名は、考えに考えて、灯に決まった。

不知火 隼人・・・最初、龍一が天神流の継承者となるため、瑠奈と戦い、勝利して、天神流の十八代目になるという予定だつたが、幕末時代を書きたくて、不知火一族を登場させた。それに、ハヤトは再び、天神流を不知火一族のモノにしようとしている男。龍一の相手にふさわしい男だ。

月形 良昭・・・天神流の十六代目で、瑠奈の父親。苗字は、ルナを訳すと月、それを忍術家らしくして、月形にしました。下の名は、やはり初見 良昭先生の名しかないと思つたからです。

神威 武蔵・・・伝説の格闘王で、龍一と龍之介の父親。さて、彼の名はすごく悩んだ。だが、瑠奈の父親には負けたが、表では、不敗。そう思つたら、富本 武蔵が浮かんで、武蔵にしました。後から、神威流を神威円明流に変えようと思いましたが、川原先生の「修羅の門」の陸奥圓明流みたいだから、やめました。（まあ、大好きな漫画だからいいかなあ）と思いましたが・・・）格闘家を引退してから、何をしているのか悩んで、龍一が読書家だから、小説家に決めました。

堀辺 正宗・・・神威 武蔵の師匠で、かつて、灯や瑠奈の祖父と共に、天神流を学んだ男。彼は、灯と違い、天神流を捨て、それを超える技を編み出そうと、骨法を学ぶ。

また、なぜ骨法かというと、この男のモデルとなっているのが、喧嘩骨法の、堀辺 正史先生だからです。

野村 昇児・・・「武勇伝」の原作者。つまり私です。

1979年2月22日生まれ。1997年にクローケン病となり、数え切れないほどの入院をし、オペも3回している。初恋の相手が、アニメのキャラというのは事実！竹内先生の「美少女戦士セーラームーン」に出てくるセーラーヴィーナス（愛野 美奈子）が初恋の人。まあ、たまたま、アニメの世界の人間に、恋をしただけです。また、2000年に、「未来戦隊タイムレンジャー」という特撮番組を観て、明日を変えようとし、遊び人となりました。

2003年に、修羅生死の名で、「祈り」というCDーRを作りました。

2006年に、闘病記「少しば、恩返しができたかな」を読んで、自分も闘病記を書こうと思いましたが、ろくな生き方をしてきていないので、作り話の中に、真実を書きました。また、名前を生時と改名。少林寺拳法と、空手を学んだが、弱いです。

ジャッキー・チェンとブルース・リーに憧れています。

好きな漫画は、鳥山先生の「ドラゴンボール」と藤子先生の「ドラえもん」など。

好きなバンド、ルナシー、マリス・ミゼル（ガクトさん時代のマリス）、アニメタルなど。

杉原 南・・・北斗の妹で、トオルの元彼女。彼女は、母親が死んで、薬に手を出し、ジャンキーとなつたが、自分の命を犠牲にしてまで、車に轢かれそうだった子供を助ける。

人にはそれぞれ、大切なものがある。彼女が死んで、北斗や南の父親は、仕事より家族のほうが大切と、ようやく気づく。南の名は、兄が北だから南にした。

星野 静・・・龍一の幼馴染。彼女を登場させたのは、龍一ほどの美系で、弱い者を守るとする。そんな彼に好意を持つものがいてもいいと思って、登場させました。彼女の名は、藤子先生の「ドラえもん」のしづかちゃんと、「パーマン」の星野 スミレを合体させました。

野田 光夫・・・彼も龍一の幼馴染で、密かに、静に好意を持つている。またイジメられていたが、静を守りたい・・その思いが、彼に勇気をあたえて、そして、静の彼氏となる。彼の名も、「ドラえもん」の、野比のび太と「パーマン」のミツオを合体させつむりだつたが、野田 光夫にしました。

まあ、作中では、一人の未来は描いていないが、結婚して幸せにくらしていると思う（笑）

麻奈美・・・アリスのリーダーで、ギターを担当。龍一が、瑠奈以外に恋をした相手。龍一は、瑠奈をあきらめるために、彼女に恋をするが、やはり龍一は、瑠奈のことがあきらめる事ができなかつた。後に、麻奈美は、トオルの彼女になる。

アリスのメンバーは、マリス・ミゼルのメンバーがモデルで、麻奈美は、マナ様（マナ様は男だが・・・）同じくギターのセイジは、コウジさん。ベースのユータは、ユウキさん。ドラムのカミヤは、1999年（ガクトさんがソロ活動を開始した年）に病死したカミさんです。

また、作中では出てこないが、初代ヴォーカルに、テツさんをモデルにしたテツヤがいる。

また、龍一が、ライブの最後に言つた言葉、「オ・ル・ヴォワール」は、マリスの曲にあります。僕の一番好きな曲。

小野寺 辰彦・・・少林寺拳法の達人で、秀一の師匠。

修羅と名乗つていた頃の龍一は、強い者なら、老若男女関係なく、喧嘩を売つていた。だが、世の中には、強いヤツはたくさんいると、龍一に教えるために登場させた。しかも、彼の前には、父、格闘王に負け、原田にも負けている。だが、敗北を知るのも、強くなるためには、必要だと、僕は思う。

名前には、寺の文字を入れたくて、この名前になった。

野々村 将太・・・かつて、瑠奈に、小野寺を始末してくれと、頼んだチンピラの一人。瑠奈に病院送りにされ、入院中にクローン病と診断された男。

もう一人くらい、クローン患者を出そと、こいつをクローン患者にした。

もし、こいつが、クズのままで、瑠奈の街にいたら、今度こそこいつは、始末されただろう。その後、瑠奈に恋をするが、失恋し、

美奈子と結婚する。

将太の名は、僕の名を少し変えて、野々村 将太となりました。美奈子は、やはり「セーラームーン」の愛野 美奈子からで、職業は、やはり看護師！

西村 和也・・・魔利支天の六代目。実は、背中に七福神の刺青を入れている。

この男のモデルは、僕の、従兄の兄ちゃんがモデル？

神威 龍之介・・・龍一の弟で、後に、弟子となる。最初は、龍一という名にする予定だったが、キャラ的に、龍之介となつた。幼馴染の百合と付き合つ。

さて、天神流の継承者となれるのは、一人。果たして、誰が、龍一の後を継ぐのだろう。ちなみに、彼の性格は、能天氣で、兄と違い鬭争心がない。そのため、動きが読みにくい。

神威 聖華・・・龍一と瑠奈の娘。彼女も当然天神流を学んでいる。聖華は、最初、隆一さんが、昔使つていた名前、レイラにしようと思つていたが、僕の甥の文字を入れたくて、聖華になつた。龍一と瑠奈の子だから、武術の素質はかなりのもの。また、彼女の初恋の相手は、達也。

後藤 誠・・・舞と一の子供。作中では書かなかつたが、実は、強いのだが、優しすぎるため、イジメられ、聖華によく助けてもらい、密かに聖華に好意を持つ。まあ、その後、二人がどうなるかは、私も分かりません（笑）

名前は、新撰組といえば、誠の旗。だから、誠にしました。

大空 達也・・・彼が幼き頃、南が、自らの命を捨てて、助けた男。そのため、南の分まで生きたいと、強く思い、そのため、龍一は、

彼を弟子にした。

作中では、書いていないが、後に、南にそつくりな女性と付き合つ。名前は、読み直しをしているときに、南、そして、子供を助ける。なんか、あだち先生の「タツチ」みたいだなー」と思い、達也にした。苗字は、下の名が、野球漫画の主人公の名前だから、上の名前は、サッカー漫画の主人公から付けようと、高橋先生の「キャプテン翼」の大空 翼の大空を使い、この名前になつた。

春麗・・・凍矢の影の一人。密かに、凍矢に好意を持つていた。

実は、最初は、凍矢の亡骸を抱いて、崖から飛び降り、死ぬ予定だつたが、命の大切さを伝えたいから、彼女には生きてもらった。四郎とは、恋人ではないが、それに近い存在。

おまけ

ジャッキー・リー・・・僕の尊敬するジャッキー・チエンと、ブルース・リーの名前を合体させた。「燃えよ醉拳」は、「燃えよドラゴン」と、「醉拳」を合体させ、「ポリス怒りの鉄拳」は、「ドラゴン怒りの鉄拳」と、「ポリス・ストーリー」を合体させた。

好きな映画や、漫画のタイトルを変えるのは、結構楽しかった。だから、体調が悪く、寝込んでいる時に考えて、少しでも、苦痛をやわらげようとしていました。フシギ・F・フシオは、藤子・F・不二雄先生。「虎衛門」は、「ドラえもん」で、「ナースムーン」は、「セーラームーン」。「るるうのケンシロウ」は、和月先生の「るるうに剣心」と原先生の「北斗の拳」。「るるうに」という言葉は、和月先生の造語だから、「るるうの」にしました。「タイガーボル」は、「ドラゴンボール」で、孫空悟は、孫悟空からです。「ヘリー・コップター」は、「ハリー・ポッター」他にも、作中には、書かなかつたが、カプコンの格闘ゲーム「ストリートファイター」とRPG「ブレス オブ ファイター」を、合体させた「ストリートファイター」など、調子が悪い時に、いろいろと考えました。

最後に、武勇伝は、何度も落選し、そのたびに、内容が変わっているので、これは、あくまでも、現段階の、裏話です。

平成18年12月27日 生時

あとがき

去年から、この物語を書いて、いろんな出版社に送りました。

そして、ある出版社から、「本にしませんか?」と電話がありました。

しかし、自主出版みたいだし、お金がかかるから、お断りをしました。

とりあえず今は、オンライン小説で公開して、クローン病やイジメ、命の大切さを伝えたいと思い、このサイトを利用させていただきました。

僕自身、本は読むのですが、いざ自分で書くと、作家さんの大変さが分かりました。

でも、目標が出来たおかげで、物語を書いたり、そのためにいろいろと調べたりしていると、病気の事を少しは忘れる事が出来ました。僕は、武道を学んでたのに、精神的に弱い人間です。

そのため、調子が悪くなると、病気に負けてしまいます。

これからも、病気に負けそうな時もあると思いますが、その時は、新たな目標を探します!

病気の話はもういいとして、他に音楽を遊びでやっていますが、何の活動もしてません。

ただ、病気の会の余興で、ライブをしたり、CD・Rを作ったりしただけです。

失敗したな~と思うが、あの時はあれで、病気の事を忘れられて良かったのかも・・・

まあ、出来ない事、出来なかつた事を、この物語の主人公、神威龍一にやつもらいました。

そして、僕の理想の女性が、月形瑠奈です。（初恋の女性、ヴィー

ナスとは全然違うタイプだが・・・
まあ、ライブハウスでライブが出来るくらいにならなくては・・・
とりあえず、ギターをマスターしなくては・・・
あと、パソコンを勉強しなくては・・・
以外にも早く、田標が見つかった。

これからも、小説を書くと思うので、その時は、またよろしくお願
いします！

平成19年11月2日 生時

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8762c/>

武勇伝～修羅の者たち～

2010年10月28日06時29分発行